

蒼き雷霆は戦姫と共に

D・ヒナ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

シンフォギア装者がガンヴォルトの世界に行くお話です。

# 目次

始まり	1	助けてくれたのは	49
皇神グループ	6	新しい生活	53
武装組織「フエザー」	10	いい知らせと悪い知らせ	57
能力者を滅する者	15	日常を謳歌する“非日常”	61
「チームシープス」ミッションスタート	20	電波塔での悲劇	66
「チームシープス」ミッションREスタート	25	偵察任務	72
ト	30	少女の手は血にまみれている	76
接触 電子の謡精	35	少女の歌は光で溢れている	81
天才司令官メラクの最期	41	見え始めた光	86
ミッション完了	45	楽しい休日、ただしお金は減る	91
作戦会議	49	血の気が多い神園家	99
		戦闘の基本は格闘	105
		データバンク施設制圧作戦(上)	

111	データバンク施設制圧作戦(下)	111
116	能力者を滅する弾丸	122
	ミサイルはやっぱり乗り物	126
	対立	133
	合流	138
143	皇神保有地下施設偵察任務(上)	209
150	皇神保有地下施設偵察任務(中)	219
157	皇神保有地下施設偵察任務(下)	237
	目覚め	243
	end:?	237
	正義と善	229
	ケジメ	219
	四人には勝てない	214
	悲劇と始まり	209
	皇神保有工場攻略任務(下)	204
	皇神保有工場攻略任務(中)	197
	皇神保有工場攻略任務(上)	190
	幕間	185
	薬理研究所襲撃任務(下)	175
	薬理研究所襲撃任務(上)	169
	帰還	163

蒼き雷霆の目覚め

決着

END

トークルームでの会話 [壱]

トークルームでの会話 [弐]

トークルームでの会話 [参]

248

253

259

269

275

281



# 始まり

それは突然に、そしていつも通りやって来た。

本部の中にアーム音が鳴り響きカルマノイズが現れたことを告げる。

その直後司令官のものであろう声が響き本部の人々がせわしなく動き 装者 が招集される。

これが Squad of Nexus Guardians、通称SONGのいつもの風景である。

十数分後――

「すみません遅れました!」

いきなり一人の少女 「立花響」の声が響く。

「遅いぞバカッ!」

「雪音クリス」が怒鳴り立花響を責める。

「そう言うな雪音、私たちが数分前に来たばかりではないか!」

「風鳴翼」が雪音クリスをなだめる。

そうしたやり取りをした後SONGの司令官、「風鳴弦十郎」とSONGの異端技術の

顧問

「エルフナイン」が現れ任務に赴く装者や並行世界について説明する、いつもの流れだった。

ただ一つ二人の顔がどこか不安げだったことを除けば。

「三人とも、よく来てくれた。」

風鳴弦十郎が口を開く。

「早速本題に入らせてもらおうぞ。今回は君たち三人に並行世界に行ってもらおう…ただ…」

弦十郎が並行世界に赴く装者を説明、発表する、いつもの流れだ。だがどこかおかしい。

「ただ…?」

立花響が聞き返す。それを聞きエルフナインが答える。

「今回並行世界との繋がりがとても不安定なんです、なので向こうへ着いても離れ離れになって

いたり最悪次元の狭間で迷ってしまうなどの可能性があり経験豊富なあなたたち三人に行つて

もらうことになったのですが…」



「なにせ危険が大きすぎる。なので君たちの意見も聞こうと思ってな…。」

エルフナイン、弦十郎が共に不安を顔に出す。

その問いに一番に答えたのは立花響だった。

「もちろん行きますよ！向こうでカルマノイズのせいで困っている人がいるなら助けてあげたいです！その力を悪用する人がいれば止めてあげたいです！次元の狭間が

なんですか！へいき、へっちゃらですよ！」

そう語った立花に続き二人も頷く。

「そうか…そこまで言ってくれるならば問題はないだろう。君たち三人は並行世界に赴

き

カルマノイズを撃破してもらおう。頼むぞ…！」

「はい！」

三人の声が勢いよく響き任務が始まった。

—————

「でもよお…次元の狭間か…そいつがどんだけのモンか…。」

雪音クリスが弱音ともとれる言葉を発する。

「大丈夫だ、雪音。私たちはたくさんの困難を乗り越えてきたではないか。」

風鳴翼が慰める。

「そうだよクリスちゃん！ 私たちが力を合わせればどんな事もへいき、へっちゃら、だよ！」

立花もそれに続く。

「だよな…：そうだよな！ ヨシ！ そうと決まれば早速行こうぜ！」

雪音がそう言い

「うん！」「ああ！」

二人が相槌を打ち並行世界へと出発する。

数分後…

「…！ 皆、気をつけろ…！」

風鳴翼が注意する。

「何、あれ…！」

三人の目線の先には目視でもはつきりと分かる「歪み」があった。

「エルフナインが言ってたのはこういう事か…！、どうする？ 先輩。」

雪音が問う。

「一点突破あるのみ！ 皆、行くぞ！」

翼が言い三人は速度を上げその先にあるであろう出口を目指す。

だが、そうは問屋が卸してくれなかった。

「何…コレ…!!」

歪みに入つた途端に感じたものは力、それも圧倒的な、絶対的な力だった。

「ぐあああああつっ!!なんだ…これっ…!!」

「皆手を離すなっ! 離れれば死ぬぞっ!」

「みんな大丈夫!?! 絶対手を離さないでっ!」

そんな三人の努力も虚しく三人は意識を奪われ手を引き剥がされた

「あああああああああああああつっつっつっつ!!!!」

そして皆次元の狭間に迷い込むかと思われたが…彼女らは巨大な蝶の羽のようなものに受け止められ偶然にも目指していた並行世界に招き入れられた。

しかし幸運はそこで尽き皆世界のバラバラの所に辿り着いてしまった。

しかし神は見放さなかつた。皆同じ舞台に立つことを許してくれた。

そしてそれは新たな幕が上がることを意味していた。

## 皇神グループ

立花響が目を覚ますとそこはSONGにどこか似ていてそれでどこか違う場所だった。

「目が覚めたか。」

目の前の軍人であろう男に立花は力なく静かに頷いた

「立て、紫電様がお前に話があるそうだ。準備が出来次第来い。」

そう言うのと目の前の男は扉を指さした。

着ている病院服であろうものを整えつつ立花は考えた。

(どこだろう……？みんなはどこ……？)

そんなことを考えつつも準備を終えた立花は男に案内され扉の先へ歩いていった。

しばらく歩いた後一つのとても嚴重そうな扉の前に着いた。

「失礼します！」「失礼します…。」

二人は挨拶をし中に入った。

扉の先には一人の少年がいた。だが彼は立派な服を着て高級そうな椅子に座り一つの紙を睨んでいた。

「彼女を連れてきてくれてありがとう、もう戻っていいよ。」

少年は男に向かって言った。男は返事をし戻っていった。

「さて、君の正体を教えてもらおうか…。」

少年は立花に問う。

「えつと…ここは…？それにあなたは…？」

立花が少年に問うと少年は静かに笑顔を見せ話し始めた。

「おつと、まだ自己紹介がまだだったね。僕は紫電。ここ、皇神グループのトップ…じゃないけど偉い人さ。君がここに来た時の第一発見者でもあるね。」

紫電がそう言うやいなや立花が感謝を述べた。

「そうだったんですか！ありがとうございませう！もしあなたに見つかっていなかったらどうなっていたか…、本当にありがとうございませう！」

「どういたしまして。…君の名前は？」

「私は立花響です！7才で誕生日は九月の十三日です、血液型はO型で身長は…」

そう言った所で紫電はそれを制止した。

「もういいよ、ありがとう。…では立花響、君の目的は何だ。」

さつきまでの笑顔はどこかに消え失せ尋問官のような表情と目をしていた。

「えっ!?…あーえつとですわね…」

立花が動揺していると紫電は追い打ちをかけた。

「言い訳は無駄だ、突然の出現、纏っていたモノ、謎が多すぎる。」

「それはー…そのー…機密事項でして…。」

そう立花が言うのと彼女の体がいきなり静かに浮き、首に手のような何か張り付いているような感覚と苦しみを彼女に与えた。

「これでも話す気にならないかい…？」

「カヒュツ…ハツ…ガア…。」

立花の意識が飛びかけた所でどこからかさつきとは違う男の声が聞こえた。

「紫電様！大変です！輸送中のアレが！」

その報告が聞こえた途端紫電は悪態をつき、それと同時に立花の苦しみが消えた。

「ゴホツ！ゴホツ！ハアツ…ハアツ…」（何だったの…今の…）

立花が喘いでいる間に紫電は彼女に言い放った。

「君に部屋を用意してある、そこにいる男が案内してくれるだろう、君の持ち物もそこだ。」

「あなたは何処へ…？」

立花が聞くと紫電は少々声を荒げて言った。

「少しここを出る、メラク！聞こえているんだらう！彼女を守れ！」

言い終わると彼はいつの間にか部屋から消えていた。

フラつきながら部屋から出ると先ほどの軍人らしき男が立っていた。

「来い、立花響。」

そう言うとは彼はスタスタと歩いていってしまった。立花は置いて行かれないよう頑張ったが疲労と先程のダメージで追いつくことなど到底不可能で最終的には彼女の意識は沈んでしまった。

彼女が目覚めた時にはベッドの上だった。

## 武装組織「フェザー」

立花が目覚める数日前ー

「んはあっ…はあっ…はあっ…」

風鳴翼が目覚めた場所はどこかの質素でシンプルな部屋のベッドの上だった。

ただ一つ一般的な部屋と違うところを挙げるとすればその部屋はゴトンゴトンと規則的に揺れている所だった。

翼はベッドから出た後周囲を確認した。

すると彼女はテーブルの上に自身が着ていた服が置いてあることに気付いた。

その服に何か異常がないか調べた後その服に着替えた、そして彼女は気付いた。

ギアペンダントが無い、と。

「不味いな…あれがなければ…」

そんなことを呟いた少し後に扉がノックされた。

「入ってもいいか？」

声は落ち着いていて男の声だった。

「どうぞ。」と翼は答えた。



入ってきたのは美しい空色の髪と青のサングラスが似合った長身の男だった。

「調子はどうか？ よければ君の名前と所属を教えて欲しいのだが…いいか？」

男は翼の名前と身分を求めている。

（前者は良い…だが後者は…教えてよいものか…）

翼は悩んだ、悩んだ末黙秘を選んだ。

「そうか…ならば仕方がない。我々の任務が終わり次第君にはここを出てもらう。」

「任務…？」

翼が問うと男はこう答えた

「我々は今とても重要な任務のために列車を走らせている、だが時間があまり無く君を降ろすための時間さえも惜しいのだ。」

「そうですか…」

翼はギアもないこの状況でどうやってここを出れば良いか考えた、だが相手は止まってくれそうな様子はない。

そこで翼は賭けに出た。

—————

気が付くと少女は自分の脇を通り抜け部屋の外へ出ていた。

「なあっ!？」

驚きが隠せない。さっきまで寝ていたはずの少女が、偶然発見出来た謎の装甲を纏った少女が、自分を隙を突いて逃げ出したのだ。

「脱走者だ！」

自分は叫んだ、だが仲間の行動する音は聞こえなかった。

（何故だ！何故皆動かない！）

その問いの答えはすぐに分かった。

皆動いていないのではなかった、動けなかったのだ。どういう仕組みかは分からなかったが影に刃物が突き刺さっていた。

たった一人の少女に不意打ちとはいえチームは制圧されたのだ。

男の顔から笑みがこぼれる、この少女ならば、と。

「なんとという事だ、チームシップスがたった一人にやられるとは…。」

少女は何かを言おうとした、それを声量と勢いで誤魔化しつつかき消し少女に言った。

「その腕を見込んで頼みがある、我々フェザーに入隊してくれないだろうか。」

少女の顔に動揺が表れる。それでも自分は続けた。

「君にとつても悪い話ではないと思うのだが…。」

しかし少女は頷かなかった。

彼女がそうしたので少年に目配せし気絶させるよう促した。彼の体から電流が放出され少女から意識がなくなる。

——

数分後私は意識を取り戻した、時間は近くの時計で知った。動こうとしたが手足を拘束されていたので動けなかった。

拘束から逃れようとした音で気付いたのか一人の少年がやってきた。

「無駄だよ、縄がほどかれた途端にアラームが鳴るようになってある、それに僕たちに同じ手は通用しないから。」

しばらくした後任務のことを少年に聞いた。

すると少年は意外にもペラペラと喋ってくれた。そこまで余裕なのだろうか。少し腹が立った。

だがフェザーのことやこの世界の常識など重要な情報も手に入った。「第七波動」や「スメラギ」、我々の世界と違う事が多すぎる。

そこで翼は一つ提案をした、「自分をフェザーに入れてくれ、そうすれば私の持つ情報を教えよう」と

その提案は意外にもすんなりと承諾され拘束も解かれた。

そしてペンダントも戻ってきた。

こうして風鳴翼のテロリストとしての日々が始まった

## 能力者を滅する者

翼が目覚めた数日後――

「……………ッ！」

雪音はどこかから聞こえる戦闘音で目を覚ました。

そして周囲を見渡し自身の状況を確認する。

雪音がいた場所はどこかのビルの屋上らしき場所だった。

衣服に異常な所は無くペンダントも紛失していなかった。

雪音は立ち上がり身構えギアを纏った。だがそれは悪手だった。

纏った瞬間に銃弾らしきモノが彼女の頬を掠めた。

雪音が銃弾の飛んできたであろう方向に振り向くとそこには誰もおらず気付けば頭

に銃口が突き付けられていた。

そして彼女の耳に少年の声が聞こえた。

「何だ、その装備は。皇神の能力者か。答えろ。」

（スメラギって何だ…？能力者…？意味が分からねえ…）

雪音は戸惑いつつも飛び退き飛んできた銃弾を躲し少年と距離を取った。

「貴様…逃げるな！」

少年は盾を構えつつ片手銃で攻撃してきた。

「うるせえ！アタシはスメラギでも能力者でも無えよ！」

雪音もハンドガンを構え即座に反撃する。

少年の弾丸は弾丸に打ち壊され少年にダメージを与えるかに思えた、だが盾が弾丸を弾き少年を守った。

「ならば…！」

少年は駆け出し雪音との距離を詰め接近戦に持ち込もうとした。

「させるかよっ！」

雪音は大量のミサイルで迎撃したが盾がまたもや少年を守った。

「無意味だっ！」

土埃が起こるが少年は勢いをつけ盾で雪音がいた所を殴った。

だが盾は空を切った。

「なっ!？」

少女は土埃を隠れ蓑にし隣のビルへ乗り移っていた。

「クソっ！待て！」

少年は少女を追った。

雪音は逃げる前に気付いていた、戦闘音がこちらに近づいていることに。そしてそれと同時に列車のものらしき走行音も近づいていると。

（クソっ！何だあの盾！全然攻撃が入らねえ！それに別の奴らまでやってくる…戦闘に巻き込まれるのは厄介だ…！）

そんなことを考えていた時雪音は気付いた、戦闘音の中に聞き間違うはずが先輩風鳴翼の歌声が混ざっていることに。

雪音は気が付けば足を止め列車が来るであろう方向を見てしまっていた。

列車の上では翼と二人の少年が戦っているのが見えた。

「先輩!?何やってんだ！早く助けねえと…！」

雪音は移動手段ミサイドルの準備をした。だがそれは少年によって阻止されてしまった。

「何をするつもりかは知らんが死んでもらうぞ、能力者バケモノ」

「クソっ！やるしかねえってのか…！」

雪音はハンドガンをトンファーのように構え少年に向かっていった。

少年はまたもや少女に向かって発砲した、だが少女はそこには居なかつた。

雪音は少年を飛び越え盾の向いていない方向から殴りかかった。

少年は銃を向けたが右手でそれを弾き飛ばし左手で相手の顔を殴った。

「ガッ！」

少年が隙を見せたのを見て一気にラツシユを叩き込む。

「オラオラア！」

「ガハッ！」

少年は盾を杖のようにして膝をついた。雪音はそれを見て気絶させるために渾身の一撃を叩き込もうとした。

そのためだろうか、雪音は影から近づいてくる一人の侍女の存在に気付かなかった。

「ガアッ!？」

侍女は雪音の腹に重い拳を叩き込んだ。雪音の体が少年の寸での所で止まった。

「助かった、ノワ。こいつの相手は一人だと厳しかった。」

ノワと呼ばれた侍女が少年に答える。

「いえ、アキュラ様がご無事であればうれしい限りでございます。」

アキュラと呼ばれた少年が侍女に提案をした。

「……この能力者の宝剣は従来のもものと違う、だからコイツを連れ帰り情報を得るというのはどうだろうか。」

侍女が雪音の体を俵のように抱えながら言った。

「それは名案ですね、アキュラ様。」

そんな会話を朦朧としながら雪音は聞いていたが反抗する体力は無く、されるがまま



だった。

(クソっ…すまねえ…先輩…みんな…)

雪音の意識はそこで途絶えた。

—————

気付けば雪音は何処か分からぬ廃屋の中で拘束されていた。

## 「チームシープス」 ミッションスタート

翼がフェザーに入隊した翌日、リーダー「アシモフ」が率いる「チームシープス」のメンバーに翼は改めて簡単な自己紹介をした。

翼を皆は快く歓迎してくれた。

その後チームシープスのメンバー「GV」、「ジーノ」、「モニカ」そしてアシモフが自己紹介をしてくれた。

一通りの挨拶が済んだ後翼のためにもう一度任務ミッションの確認の会議が行われた。

聞いた内容を要約すると、この世界には国民的ヴァーチャルアイドル「モルフォ」という存在が居るがアイドルというのは表の顔でその正体は敵対組織「スメラギ」がフェザーを含む第七波動セブンス能力者の発見、確保に使用されているソナーであり今回の我々チームシープスの任務はそれモルフォのプログラムコアの破壊。という内容だった。

その話を聞いた翼は怒りに打ち震えていた、罪のない能力者に抑圧をかけるスメラギに、人々に。

会議が終わった後、彼女は他より少し広い程度の場所で簡単な訓練をして、眠った。

翌朝、目が覚めるとジーノと呼ばれていた少年はどこかへ姿を消していた。

アシモフに話を聞くと彼はスメラギ内部への潜入任務へ赴いたと話してくれた。

簡単な訓練をした後ふと思ひ立ちGVの元へ向かった。

翼はGVにGVのセブンスの事を教えて欲しいと頼んだ。

GVは一昨日と同じようにすんなりと承諾してくれた。

その日はセブンスの事を学びまた訓練をして眠った。

翌朝、今度はモニカという少女にフェザーの行動理念を聞いた。

彼女曰く、能力者の自由を掲げ、スメラギに囚われたセブンス能力者の救出を主な活

動としている、だそうだ。

だが世間一般ではテロリストとして知られているらしい。

翼はこれから立ち向かうスメラギの権力の強さを多からず感じていた。

モニカに礼を言いました訓練をした後に眠った。

翼はその後数日 仲間達にこの世界の常識や社会のことを学び、簡単ではあるが訓練

をして、眠る。 といった生活を続けた。

そんな生活に飽きを覚え始めた頃、アシモフからいきなり命令が伝えられた。

「ジーノがモルフオの居場所を特定した。明日、作戦を実行する。皆、備えてくれ。」

いきなりの伝令で驚きを感じたがそれ以上にここから出れるという喜びが大きかった。

翼は胸を躍らせながら眠った。

翌日、深夜。

翼はG Vと共に一つのビルに潜入していた、

…がスメラギのセキュリティは凄まじく隠密行動の訓練を積んだ翼も敵に見つかりG Vと共に敵兵士に追いかけられていた。

「G V、後ろの追手を撒くことは出来そうか！」

「あそこのシャッターを使えば…やってみる」

G Vがシャッターの制御装置に避雷針ダートを撃ち込み電撃を流し込む。

少し間を入れて装置からエラー音が発せられたかと思えばシャッターが閉じ後ろの追手を振り切ることが出来た。

だがそれも敵の想定内らしく前方からも敵兵士が迫っていた。

「カザナリ、あつちの敵なんとか出来そう?」

「当然だつ!」

翼が返事をした直後彼女は高く飛び大量の短刀を出し敵に飛ばした。

半分の短刀は敵の銃に突き刺さり、半分の短刀は敵の影に刺さった。二人は相手が硬直している間にその脇をすり抜けた。

その少し後に本部にジーノから通信が来た。

「アシモフ、ばつちり聞いたぜ。モルフオのコアはスメラギ第一ビルだ。俺の事前調査通りな。」

「よくやった、ジーノ。聞いていたか、G V、シープス4。」

「はい。」

「今も沢山の仲間がスメラギに発見されている。急いでくれ。」

「了解。」「承知。」

廊下を抜け、階段を降り、ジーノから事前に報告されていた部屋に入る。そこで見たものは、

何もない部屋だった。

「こちらシープス四、モルフオのプログラムコアが見当たりません。」

「そんなはず無えよ！場所は合ってるのか!？」

ジーノの声から動揺が伝わる。

「間違いないよ、何処かに移されたんだ。」

GVが冷静に返答する。

「やむを得ん。任務を中止とする。」

アシモフから指令が下る。

それと同時に背後から複数人の足音が聞こえた。

「動きが読まれているらしい…」

「GV、シープス4、すぐそこを離脱するんだ。」

「……………」

GVから目配せされる。

(どういう事だGV…? なにか作戦でもあるのか…?)

「聞こえているのか!?! GV! シープス4!」

返答が無い事を不審に思ったアシモフから焦りの混じった声が聞こえた。

二人の兵士が二人に近づいていく足音が聞こえた。

ブオンと風の音がした所で二人の意識は途絶えた。

## 「チームシープス」 ミッションREスタート

二人は電撃と何かを叩く衝撃で目を覚ました。

「お目覚めかしらん？<sup>テロリスト</sup>フェザーの諸君？尋問の時間よ。」

目の前から下品な男の声が聞こえたかと思えば次の瞬間GVの右腕に痛みが走った。

「…ッ！」

「どう？テロリストの少年、電磁ムチのお味は？」

「何をッ！」

翼の怒りの声はムチの音にかき消された。

「黙りなさいッ！…アタシ達<sup>スマフラキ</sup>皇神グループに逆らうなんておバカちゃんねえ…」

「貴様アッ！」

「暴れてもいいけどこの子がどうなるかあなたでもわかるわよね？」

「クッ…」

翼が引き下がると男は話を続けた。

「さて…あなたたちの目的は<sup>ウチチ</sup>皇神の<sup>デリート</sup>電脳アイドルモルフオちゃんの<sup>デリート</sup>消去…いえ、抹殺つ

てトコロかしら？」

「それを何処でッ！」

「ウフフ…あなたたちの作戦も通信もゼーんぶ筒抜けよ、今頃モルフオちゃんは輸送列車の中ね。」

「……………」

「ウフフ…絶望した？フェザーの目論見なんてゼーンプお見通しつてワケ！これは尋問なんかじゃないの…アナタたちみたいなカワイイ子いたぶりたかっただけ…、つまりはシユミツ!!」

さあー、少女少女！いい絶叫<sup>コエ</sup>で鳴いてプリイーズ！」

男が長々と語った所でGVがようやく口を開いた。

「…そうか、ターゲツトは<sup>電子の諷刺</sup>ここには居ないか…」

「むっ、無傷!? 高圧電流を流した電磁ムチなのよっ!? 何で平然としていられるのオ!？」

「GVッ！無事なのか！」

二人から驚愕の声が聞こえる。

「…ボクに電撃は効かない。」

その発言の直後周囲は雷撃に照らされ止んだ時には鎖が焼き切られていた。

「よくやった！GV！ならば私も…ハアッ！」

また周囲が照らされ気付けば鎖が引き千切られていた。



「その光はっ…まさか…第七波動!?」

「死にたくないならそこでおとなしくしててください。さようなら、変態のオジサン。」

そう言うとGVは男の動揺の声も聞かずに駆け出してしまった。

翼は喜びと驚きを感じつつGVを追った。

「こちらコードネームGV”ガンヴォルト”よりシープス3、回線開いて」

「こちらシープス3、無事だったのねガンヴォルト、シープス4。」

「ええ、チームに情報の修正を。ターゲット、電子の謡精は輸送用列車で別のポイントに移動中。列車の位置の特定を要請します。」

「ちよつと本気? 罠の可能性だつて低くないのよ!」

「こちらシープスリーダー、了解した。GVとシープス4はそのままミッションの継続を、シープス3は位置を特定してくれ。」

GVの要請にモニカが反対したがアシモフが制したの翼は聞いた。

その後GVは通信を終え二人はエレベーターに走った。

エレベーターに入れたは良いが動かない。

「送電を止められたか…」

GVが静かに状況を解析した。

「ならば…掴まれ！GV！」

翼が叫んだ直後彼女はGVを掴み脚部のスラストを起動し天井に蹴りを入れた。するとエレベーターを動かすことはおろか、蹴破り二人は上の階へと上昇した。

「翔けるぞ、GV！」

呆気にとられているGVを横目に翼は走り出した。

「位置情報はまだ？モニカさん！」

「今急いでいるから急かさないで！」

通信から二人が焦り始めているのが分かった。

「見つけた！研究設備行き自動制御型輸送列車…でも駄目、もう発車している…」

「案内してくれ、モニカ！」

翼がモニカの落胆の声に反撃する。

「…突き当たりを右ツ！見えるはずよ！」

「ならばツ！」

翼が跳躍したかと思えばそこに巨大なブースターの付いた板剣が出現した。

「乗れツ！GV！」

「ツ！」

GVが板に飛び乗るとブースターが作動し列車にたちまち追いついた。

飛び乗った後は兵士達からの熱い出迎えが二人を待っていた。

「皆！降伏しろ！……GVッ!？」

GVが駆け出していったと同時に彼と彼らは発砲した。

「何をしている!?!GV!？」

翼の抑制も聞かずにGVは彼らに発砲し放電した。

「何も殺すことはないだろうGV!？」

「やらなきやボク達が死んでたのに?？」

翼の問いにGVは冷ややかに答えた。

「……畜生ッ!？」

二人は敵を倒しつつターゲットの積載されている列車へ向かった。

## 接触 電子の謡精

翼はチームシープスのメンバーと協力しつつ敵を打ち倒しターゲットの積載されている列車を探していた。

(この世界の奴らはこんなことが日常なのか?!?)

そんなことを考えていた時にモニカから通信が来た。

「後方から複数のレーダー反応を確認したわ、第九世代戦車のようね…」

「敵を捕捉した、これより邀撃する、一機目命中、二機目命中…:チィ

タンク二機の狙撃に成功、撃破した。残った一機がそちらの列車に向かったぞ。」

アシモフからの報告が終わった数秒後目の前に大きな戦車マンティスが衝撃と共に現れた。

「いい? 無人型の第九…:ってシープス4何をしているの!?!」

「人が居ぬのならアッ!」

モニカの言葉を遮り翼は巨大な剣を戦車に突き刺し撃破してしまった。

「グレイト…:シープス4…:」

アシモフから感嘆の声が漏れる。

「そんなッ! あんなデータラメな攻撃でマンティスを倒すなんて!」

「予備があと一機あるはずだッ！前の車両に発信準備の通信を入れろ！……だがその程度で敵う相手とは思えんッ、本部にも部隊を要請しろ！」

前方から兵士達の慌てふためく声が聞こえる。

「不味いな……どうするの？カザナリ。」

「無論ッ！最速で突破するのみッ！」

「ならば急いでターゲットの積載されている列車を探してくれ、位置が分かればその列車と他の列車を切り離せる。」

その言葉が聞こえた直後二人は目で追えない速さで敵の間をすり抜け、先頭へ向かっていった。

しばらく走ると二人の視界にはあからさまに嚴重で危険そうな扉の付いた列車が入った。

「あれかつ！」

「だろうね。」

「アシモフッ！聞こえるかッ！ターゲットは二両目だッ！狙撃を頼む！」

「ッ……そもいかないみたいだよ。」

気が付けば二人は先程の物と同じタイプの戦車とヘリ2機のサーチライトに照らされていた。

「クソッ！…ハアッ！」

翼は悪態をついた後へりに向かって飛んで行き乗員を引きずり降ろしへりを爆破した。

その行動をアシモフは少し苛立ちを覚えながら見ていた。

翼がへりに飛んでいる間にG.Vはマンティスに電撃を浴びせ破壊していた。

「…殲滅完了。」

「……こちらシープスリーダー、連結部を狙撃しターゲットと他の車両を切り離す。

ターゲット停止後二人は列車に侵入、速やかに目標のプログラムコアを破壊するん

だ。」

「了解。」

その後すぐに弾丸が連結部に当たりターゲットと他の列車を切り離した。

……

「この車両にターゲットが……。」

「その筈だけどね……。」

翼が部屋に入るとそこにはポツンと一つの光っているポッドがあった。

二人はそこを覗き込んだ。

「なっ!? これは一体……どういう事だ……。」

「これが…モルフオ…？そんな…これは！」

ポッドの中には一人の少女が機械に接続され拘束されていた。

二人が驚いていると何処かからか声が聞こえた。

「あなたたちは…？研究所の人達じゃ…ないの…？」

「この声は…テレパシー？」

「GV？てればしーとは…？」

しどころもどろしている翼を無視しGVは続けた。

「こちらGV。ターゲットに接触、コアを発見しました。ただ…」

「どうした？GV。」

仲間の質問にGVが答える。

「ここに居るのは小さな女の子だ。ミッションの変更を要請、これより少女の救出を…」

「却下だ。」

GVの言葉はアシモフの冷徹な言葉に打ち消された。

「そのコアを抹殺しろ、モルフオが存在する限り能力者の拉致は終わらない。」

「この子を殺せだどっ！？ふざけるなっ！能力者の自由を求めてお前達は戦ってきたのではないのかっ！何故この少女には自由を与えないッ！」

「その少女が居ることでも多くの能力者が苦しむことになったとしても？」

翼の問いにアシモフが冷酷に問い返す。

「構いません。もうあの人達の為の歌は、みんなを苦しめる歌は歌いたくない……」  
(この子は同じだ……あの時のボクと……)

GVはポッドに手を付けながら話す。

「聞いてくれ、もしも君が自由を望むなら僕が手を貸す、君の本当の願いは何？」  
チームから驚愕の聲が聞こえるが二人は通信を切った。

「私の……願……い……?」

少女の答えは一人の少年の声にかき消された。

「勘弁してよ、もー。なんで僕が戦わなくちゃいけないルートに来るかなあ？」  
そこには先程まで何も居なかった場所に一人の少年が立っていた。



## 天才司令官メラクの最期

「ッ!? 貴様…何者だ!」

翼が剣を構え少年に質問する。

「スメラギの能力者か…。」

翼の質問に答えるようにGVが言った。

「メラクだよ。」

少年は短く自身の名前を言った。

「メラク、今すぐ投降しろ。命までは取らん。抵抗せずにフェザーまで来てくれ。」

「ナニソレ? ボクのこと馬鹿にしているの? そんなのにボクが応じるワケないじゃん。」

翼の勧告をメラクは無視し話を続けた。

「外に出ようか…こつちとしても彼女を傷つける訳には行かないからねえ…。」

そう言ううとメラクは剣のような物を取り出し掲げた。

「貴様! 何をして…ッ!」

メラクは黒いモヤに包まれ晴れた時にはシンフォギアに似た装甲を身に纏っていた。

「それっ!」

「何ッ!?」「これは…」

メラクの掛け声と同時に三人の足元に「穴」が開き穴は三人を引きずり込んだ。気付けば二人は列車の上に立っておりメラクは空中を浮遊する無骨な椅子に座っていた。

「メンドクサイからサクツとやるよ…こっちはネットゲのフレンド待たせてるんだ。」

そう言った瞬間彼の椅子に着いたアームからミサイルが発射され二人を襲った。

「そのような弾幕ッ!」

だが翼はミサイルを全て容易く切り落としてしまい、その間にGVがメラクに発砲した。

「チツ…。」

メラクは悔しそうに穴の向こうへ消え次の瞬間翼の真横に現れた。

「何ッ!? 貴様!ぐあッ!」

腕が翼を掴みGVの射線を塞いでいる。

「くっ…狙えない…。」

GVが悔しそうな表情をしてメラクが得意げな表情をしていた時翼が口を開いた。

「お前は…何も思わないのか…? 少女の…あの痛ましい様子を見ても…何も思わないのか…?」

「そーゆー暑苦しいの、勘弁してよ…ッ!？」

気が付けばG Vが跳躍しており自身の頭部に狙いをつけている所だった。

メラクは思わず体を逸らし腕への集中を疎かにしてしまった。

「今だっ！抜け出すんだ！」

G Vの叫びで翼は腕を振りほどきG Vの隣に跳躍した。

「クソっ！してやられたよ…。」

メラクが悔しがっている時にG Vは彼に質問した。

「お前は何の為に戦っているんだ。」

「ハア？ボクが戦うのはただゲームを買いきたいからさ。」

「そういう願いがあの子にもある！外の世界で歌を歌いたいという願いが！」

「だから…激ウザなんだよッ！そーいうのがさあ！」

メラクは怒り大量の穴を空中に出現させた。そして彼の椅子が光りレーザーを穴に

向かって発射した。

「くっ…」

穴はG Vを囲いG Vに向けてレーザーを撃った。

「はあっ！」

その後大量の壁と翼がG Vを囲いレーザーを弾いた。

「駆け出せっ!」

「ありがとうっ!」

GVはメラクに向かって走り出した。

「フリーズしちゃいなよ!」

メラクはこれでもかというほど穴を出現させGVにレーザーを浴びせた。

だがGVはレーザーを全て「回避」した。

「嘘だろっ!?!そんなのチートだっ!」

「煌くは雷纏いし聖剣 蒼雷の暴虐よ 敵をつら…」

GVが飛び上がり剣を出現させ敵に振りかざそうとした瞬間、遠くにビルの屋上で大きな爆発が起こり風でGVは地面に叩きつけられた。

「うがっ!」

「GV!?!大丈夫かっ!?!」

翼がGVに近寄り心配しているのを横目にメラクが呟いた。

「今回はラックが味方してくれたみたいだね…。後は…ウグツ…!」

メラクがひるんだのを見てGVは弱々しく言った。

「とどめを刺すんだ…カザナリ…、あの子のためにも…!今彼は疲弊している…今なら…!」

「…チイツ！」

翼はメラクに走り出しアームに向かって剣を振った。

「ハハッ！ ナニコレッツ！ さっきのに比べたら全然雑魚じゃんツ！」

メラクは翼の剣を軽く受け流しながら笑った。

「クソっ！ ならば数でっ！」

翼は剣を振るスピードを上げた

「もしかして…殺すのを躊躇してるとかつ？ ハハハハッ！」

「何をっ！ ハアッ！」

翼は剣から刃を飛ばした。

「無駄な攻撃ッ、しないでよねっ！」

メラクは自身をアームで覆った。

「勝機ッ！ 食らえっ！」

翼は高く飛び上がり炎を纏いながら相手に斬りかかった。

腕は容易く折れ、勢いを殺しきれなかった。

「しまっ!？」 「ゴハアッ！」

剣はメラクの体に突き刺さり血を纏っていた。

息絶える直前にメラクは小さく言い放った。

「やっちゃったね…人殺しイッ！」

直後彼の体が爆ぜ翼は吹き飛ばされた。  
翼の意識はそこで途切れた。

## ミッシェン完了

「くっ…うう…はっ！」

翼が目覚めたのは埠頭にある倉庫の中だった。

「目が覚めた？二人をここに連れてくるのは大変だったんだからね。」

「すまないGV…現状は？」

翼が尋ねるとGVはため息をついたあと話した。

「少女は無事回収完了、追手は振り切った。今アシモフ達との合流を待ってる。」

「そうか…なら良かった…。」

翼は安堵の表情を見せ立ち上がる。

そして彼女は気づいた、潮の匂いとは違う臭いが漂っている事に。

「これは…アアッ！」

翼は思い出してしまった。

「自身が人を殺めてしまった事を、その人に言われた事を。」

「うわあああああああ!!!」

倉庫の中に少女の絶叫が響く。

「カザナリ……」

それをGVはただ静かに見ていた。

少女の叫びが静まった頃チームの仲間が入ってきた。

「落ち着いたか？ シープス4。」

「……………」

翼は暗い表情のまま黙っていた。

「さて……本題に入ろうか。モルフォ少女を渡せ。」

その言葉を聞き翼は立ち上がり剣を向けた。

だが剣を向け睨むだけで言葉は発しなかった。

それを見たGVが言った。

「出来ません。」

「GV……」

アシモフが叫んだ。

「……この子はあの時の僕と同じなんだ、アシモフに救われた時の僕と。この子もずっと

苦しんでいた！」

「その少女がどれ程危険か分かっている筈だ。」

アシモフの言葉にGVが反撃した。



「危険なのはスメラギだ！この子の歌じゃない！」

「…詭弁だな…。」

アシモフが言った直後二人は歯を噛みしめ怒りを押し殺した。

その後GVは雷を纏った。

「マジかよ…。」「二人とも…。」

二人が困惑を見せるが構わずGVは続ける。

「この子が笑顔で歌える方法が必ずある筈なんだ！その可能性を一方的に奪うというのならフェザーもスメラギも同じじゃないか！」

…かつて貴方がそうしてくれたように今度はボクがこの子の力になる！」

「それが、お前の選んだ自由か。ガンヴォルト。」

「はい。」

アシモフの問いにGVが頷く。

「いいだろう。ならば今、コードネームGV、シープス4をフェザーから除名する！組織に規律を乱す者は不要。今後もしも我々の障害となるようならば容赦はしない。」

覚えておけ、二人共。その少女の自由はより多くの戦いの先にしか無い。

グッドラック<sup>幸運</sup>を。

アシモフは除名の宣言をした後踵を返し思考が追いついていない二人を連れ倉庫を

出た。

その様子を少女はいつからか静かに見ていた。

GVは三人が去ったのを確認し笑顔で少女を抱きかかえた。

「もう心配ない、行こう?」

その言葉を聞いた少女の目からは涙が溢れていた。

「そうだ…カザナリはどうする?別に離れても構わないけど…」

GVの言葉を遮り翼は叫んだ。

「離れる訳がないだろう!その少女の自由のため、私も仲間に入れて欲しい…頼む。」

翼の様子をみてGVは穏やかに言った。

「分かった。じゃあ一緒に帰ろうか。」

「ありがとう、GV。」

こうして電子の謡精抹殺ミッションは終わり翼の新たな生活が始まった。

## 作戦会議

サイバーディヴァ  
電子の諜精抹殺任務が終了した翌日立花響は皇神グループのビルの一室で目覚めた。

「んん……こは……そうか……私あの後倒れて……」

立花は辺りを見回した。

今回はあの時のように近くに誰か居る訳ではなく監視カメラのような物も見当たらなかった。

立花は近くに鏡を見てすぐに気づいた。

自身の衣服が紫電やあの軍人の物と似たようなデザインになった物に変わっている  
と。

立花は困惑を覚えつつ部屋を出た。

部屋を出ると扉のそばに一人の硬い鎧に身を包んだ男が立っていた。

「目が覚めたか。お前が起きたら紫電様の元に連れて行くよう言われてる、ついてこ  
い。」

そう言う男はついてくるようハンドサインをした後歩き出した。

響がついていき部屋に入るとあの時と同じように紫電とあの軍人らしき男が部屋に

居た。

「ありがとう、君は警備に戻ってくれ。」

紫電が短くそう言うのと男はすぐに戻って行った。

「あの…紫電さん…。この服は…?」

「ああ、それについても後々話すよ。…さて。」

今回君達に集まってもらったのは我々の重要拠点「大電波塔」アマテラス」の守備をお願いするためです。」

その言葉を聞いて軍人が叫んだ。

「何を言うのですか!?!紫電様!コイツはまだ我々に害を成してはいないものの所属も正体も知れぬ女!そんな奴に守備を任せたら…!」

そこまで叫んだ所で紫電が制した。

「まあまあ、イオタさん。落ち着いてください。今回はコイツのテストも兼ねているんですよ。」

彼女が我々と同じような服を着ているのもその為です。」

「だからとは言え…!」

そう言った所で紫電が遮り、言った。

「これはイオタさんにしか出来ない重要な任務です、どうかよろしくお願いします。」

そう言われイオタと呼ばれた男は落ち着きを取り戻した。

「さて、立花響…あなたに質問です。この人に見覚えは？」

そういうと紫電はタブレットに青い装甲を纏った髪の毛の長い女性を映した。

「翼さんっ!？」

立花は思わず叫んでしまっているのを見て紫電は静かに笑いながら言った。

「お知り合いましたか…。実は彼女に我々スメラギグループの重要な構成員を殺されて  
いるんです。」

「そんなんっ!?!翼さんがそんなことする筈がない!」

「残念ながら…事実です。」

立花の叫びに紫電はタブレットに映像を映しながら言った。

立花は映像を食い入るように見てから目の焦点が合っていない状態で弱々しく言っ  
た。

「そんなん…こんなの…こんなこと翼さんは絶対にしません…きつと何かの間違いです  
…。」

そういう所で紫電が割り込んだ。

「そうだろうね…きつと彼女はこんなことをするような女性じゃない。そこでだ、立花  
響。君に彼女から事実を聞き出して欲しい。」

「でもどうやって…?」

立花の問いに紫電は答えた。

「彼女はおそらくさつき話したアマテラスにやってくる。フェザ<sup>テロリスト</sup>の連中と共にね。」

「待ってください！翼さんはテロリストなんかに進んで入ったりはしません！きつと何か事情があるんです！」

「そうなんだろうね…どうせなら彼女をこつちに連れて来てもらっても構わない。お願いしますよ。…ボクからの話は以上です。何か質問は？」

紫電に質問をする者が居なかつたので紫電は解散の号令をし、二人は部屋から出た。

「…イオタさん、よろしくお願いします！」

「……………フンッ。」

響の言葉を無視し男は立ち去ってしまった。

「…はあ…翼さんがそんなことする筈ないよね…。」

響の顔はとても暗かった。

# 助けてくれたのは

立花が目覚めた頃…

「ゴハアツ!？」

雪音は拷問を受けていた。

「吐けッ！貴様の宝剣はどんな仕組みだ?!」

そう怒鳴りアキュラは雪音の腹を殴った。

「ガアッ!」

雪音はただ耐えていた。

「スメラギの奴らは何処までステージを進めている?!」

アキュラはまた怒鳴りまた雪音の腹を殴る。

「グウッ!」

だが雪音の口は堅く何も喋らず唸り声だけを出していた。

「アキュラ様、これ以上は身が持ちません。」

ノワがアキュラに止めるよう促した。

だがアキュラの勢いは増すばかりだった。

「まだ吐かないか…、ならばこれでッ！」

そう言うときアキュラは蛍光灯のように光っている棒を取り出し、雪音に押し付けた。  
「ああああああああ!!!」

直後雪音の体を強い痛みが襲い雪音の体がビクンビクンと跳ねた。

「周囲に発生した電界がコイツの神経を直接刺激する、これなら文句はないだろう？」  
「ですがアキュラ様、彼女の精神は…」

そこまで言った所でアキュラが叫んだ。

「黙れ！こいつはヒト人間じゃない、バケモノだ！…それにお前もコイツを殴って分かっているんだろう？コイツが普通のヤツでは無い事に。」

「それはアキュラ様…」

「言い訳は無用だ。では再開するぞ。」

そう言いアキュラは雪音にまた棒を押し付けた。

数十分後——

「しぶといバケモノだ…。次で喋らなければ殺す、覚えているろ。」

そう言いアキュラは部屋を出た。

しばらくして雪音はノワに部屋から出され一つに部屋に入れられた。

「ここがあなたのお部屋になります。御用があれば何なりと。」



そう冷たく言い放ち彼女は部屋を出た。

(ああ…どうなってるんだよ…先輩…おっさん…バカ…助けてくれよ…)

雪音の意識はそこで闇に沈んだ。

闇の中で雪音は夢を見た。

フィーンに引き取られた時の事、ウエルの野郎に捕まった時の事、ステファンの脚を  
撃ち抜かなければいけない事。

そんな時、どんな時にも仲間<sup>みんな</sup>達は助けてくれた事、自分は敵を出し抜いてきた事、今  
日までみんなまで生きてこれた事。

そんな記憶が雪音に勇気を、力をくれた。

雪音は光に吸い込まれていった。

「んん…ハッ！」

雪音は目を覚ましたと同時に自分が泣いていたことに気付いた。

だが雪音の気持ちは暗くも重くもなかった。

雪音は扉をノックし扉の先に居るであろう相手に話しかけた。

「なあ、アタシをここから出してくれないか！雑用でも、力仕事でも、なんでもする！だ

からアタシをここから出してくれ！」

そう叫ぶとしばらくした後返事が返ってきた。

「承知しました。アキユラ様に掛け合ってみます。」

雪音に一筋の光が射した。

## 新しい生活

ノワから話してはくれたもののそう簡単には行かなかった。

手錠をかけられさつきほどでは無いが尋問された。

雪音は並行世界の事、シンフォギアの事、そして自分はその能力者では無い事。

分かる事は全て話した。

だがすぐには信じてもらえなかった。

「並行世界？そんな眉唾物が存在する筈がないだろう。」

「だからあ！アタシはその並行世界から来たんだって！」

「ならばその宝剣は何だ！能力者で無ければ使えないそれを使用している時点で能力者であることは確実！」

「違えよ！ソイツはシンフォギア！適合係数が高いアタシにしか使えないシロモノだ！

……あとそんなに能力者かどうか気になるってんなら血でも肉でも採って調べりゃいいじゃねーか！」

「調べられたら苦勞してない……だが一つだけ出来なくもない物がある……。」

そう言うのアキュラは一つの瓦礫を持ってきた。

「先日戦った能力者のエネルギーの入った瓦礫だ、コイツには第七波動を無力化する力がある。持ったまま纏ってみろ。」

そう言うのとアキュラは瓦礫とペンダントを差し出した。

「…暴れたら容赦しないからな。」

「わーってるよ、んなことあ…。」

Killtler Ichai v a l t r o n :

彼女が聖詠を唱えた瞬間周囲が光に包まれ少女は鎧を纏った。

「なっ…。」「なっ…！」

二人の声が重なった。

「本当に能力者ではなかったのか…。」

「だから言っただろ！アタシは能力者なんかじゃないって。」

「チツ…スメラギでも無く能力者でも無い…。確かSONGと言ったな、詳しく教えろ。」

その後アキュラに様々な事を話したがこの世界と違いすぎるらしく、彼の顔は暗いままだった。

「ハア…参考にならん、ノワ。」

「お呼びでしょうか、アキュラ様。」

声が聞こえたかと思えば彼女はアキュラの近くに立っていた。

「コイツに部屋とここでの暮らし方を教えてやれ、やり方はお前に任せる。」

そう言うのアキュラはスタスタと出て行ってしまった。

「では…、まずはその衣服ですな…。」

雪音はメイド服に着替えさせられ様々な家事を教えられた。

…だが大抵の事は問題なく、むしろかなり上手くこなしてしまった。

「あなたはその並行世界でもメイドなのですか？」

疑問に思ったノワが質問した。

「いや、そーゆーんじゃないけど…。まあ後輩達や先輩に普段からやってるからかな

…。」

雪音は優しい眼差しで話した。

「そうですか…。」

ノワの目は何処か悲しげだった。

—————

それから数日アタシはこいつらの元で働いた。

ここ、神園家はかなりの金持ちらしく、部屋はデカイし人の出入りは多かった。

気になる事も出来た。

一つは出入りする人の中で医者が特に多かった事、もう一つは二人から絶対に入つてはいけなと言われた館があること。

そんな事を考えながら部屋の掃除をしていると、突然ソイツはアタシに話しかけてきた。

「ねーねー、君ダレ？新しいお手伝いさん？」

アタシは声のする方を見てすこぶる驚いた。

何せ声の主はまんまる、球体だったから。

## いい知らせと悪い知らせ

雪音が驚いているのをよそに”ソレ”は続けた。

「あつーもしかしてお医者さん？それとも楽器弾きさん？」

少女は少しだけ落ち着いたらしく嘯みそうになりながらも話した。

「ちつ違えよ！アタシは雪音クリス！ついこの間ここで働く事になったお手伝いだ！」  
「フーン……。」

ソレはしばらく雪音の周りを回りじろじろと見た後言った。

「お手伝いさんならミチルちゃんの話し相手になってよ、ついてきて。」

そう言うのとソレは部屋を出て、館を出て、一つの館、「絶対に入ってはいけない館」に雪音を導いた。

「おい……こつて。」

「何やってるの？こつちだよ。」

雪音の言葉も無視しソレは強引に彼女を館に連れ込んだ。

しばらく歩き医者とすれ違った後一つの扉に辿り着いた。

「ミチルちゃん！連れてきたよ！」

ソレはベッドの上に居る白髪の少女に勢いよく話しかけた。

「口口、あの人が困ってるよ。また無理やり連れてきたんじゃないの?」

少女はタブレットに書いてソレに見せた。

「何言ってるの、ミチルちゃん!ボクがそんなことする訳ないじゃん!」

「そう言ってるの間も無理やりだったじゃない」

二人が仲睦まじく話しているのをじつと見ていた雪音に気付いた少女がタブレットを見せた。

「あなた、誰?良い人?悪い人?」

「アタシは雪音クリス、この間からここで働いてるお手伝いだ。っていうか喋れないのか?」

雪音の素朴な疑問に少女は寂しげな笑顔で答えた。

「わたしは小さい頃から病気がちで喋ることも立つことも難しいの。」

「そうなのか…。名前は何ていうんだ?」

「私はミチル、この子は口口。」

「よろしくね!クリスちゃん!」

口口は雪音の顔に勢いよくぶつかり、ベッドに落ちた。

「イツテテテ…。おい、大丈夫か?」



「大丈夫だよ、よくあることだし、すぐ起き上がるよ。」

「そんなもんなのか…。」

雪音が困惑しているとミチルはとて面白い笑顔でダブルレットを見せた。

「起きるまで二人でお喋りしてもいい？」

「…ああ！トーゼンだ！」

そうして長い時間が経った後アキュラとノワがものすごい形相で部屋に入ってきた。

「ミチル!? 大丈夫か!? 嫌な思いしてないか!？」

「ハアツッ!」 「ごはっ!」

ノワが雪音を突き飛ばしたのを見てミチルは急いで書いた。

「その人は悪い人じゃない! 嫌な事もされてない!」

「……。」 「……。」

二人は目を見合わせミチルに詫びをした。

「そうだったのか! すまない、ミチル!」 「申し訳ありませんでした、ミチル様。」

「テテテ…なんだよいきなり…。」

「テロリスト共とスメラギが戦うという情報をお前に伝えようとしたらお前は居ないし、ロロからの通信は途絶した。それが心配でこつちに来てみたらこの有様だ。」

「すまねえ…。でもなんでそんな情報をアタシに?」

「当然そこへ共に赴き奴らを殲滅するために決まっているだろう。」

「ふーん、そうなのか…。ん?…なんだってえ!!?!」

雪音、ここへ来て何度目かの絶叫である。

## 日常を謳歌する” 非日常“

電子の謡精抹殺ミッションが終了してから数日後…

「……ああ……ハア……」

ボクは隠れ家の玄関でため息をついていた。

「GV、お帰りなさい。」

帰ってきたボクを少女、「シアン」が出迎えた。

「おおお……お帰りなさい……、GV。」

翼も物陰に隠れながらおずおずとこちらを見ていた。

「……掃除、始めるよ。」

「かたじけない……。」「うん！」

ボク達は何故こうなったとしか思えない程散らかった部屋の掃除を始めた。

何故三人でこのような事をしているのかという……

「三人で暮らすのであれば、特に女性レディが居るのであれば安定した拠点が必要だろう……  
だつてよ！」

アシモフの奴恥ずかしがってるのかねえ？ハハハ！連絡は以上だ、そこは自由に使っ

ていいってよ！じゃあな！」

こんな事をジーノから伝えられありがたく使わせて貰っていたのだが問題は翼にあった。

G Vがシアンの子守りそして護衛を翼に任せて任務に少し買い出しに言った途端、この有様だ。

…とまあそれはさておき、なんやかんやボク達はここで共同生活をする事になった。

「G V…本当にすまない…。」

「G V！ツバサを責めないで！私が止めてあげられなかったのが悪いの！」

「……いいよ、別に。ボクもここの掃除をしようと思つて買い出しに行つたんだから。」

そんなやりとりをしながら掃除を終わらせ、夕食を摂り、就寝した。

翼がうなされていたのが気になった。

—————

○月a日

とりあえず日誌をつけてみる事にした。

皆が危険にさらされた時にこれで情報を得れるかもしれない、というのは建前で本音はただ単にフェザーでの癖が抜けないだけだ。

今日は必要な家具を買いに行こうとしたけど、謎のダンボールが大量に玄関の前に

あつて中身は家具。恐らくアシモフの氣遣いだらう。

部屋が部屋らしくなつたしこれで二人は床で寝る必要はなくなつた。

○月b日

今日は仕事を探しに行こうとした、けどモニカから通信が入つてミッションに行くことになつた。

ミッション終了後、モニカからまた頼んでもいいかと言われ報酬も手に入るので快く了承した。

あと何故か学校に行つてみないかと言われた。

帰ると二人は既に寝ていた、今日は比較的マシだった。

○月c日

昨日言われた、学校の件を二人に相談してみるとシアンは不安そうにしていたがツバサは「いいじゃないか！行つてみてもし駄目そうならやめればいい。」みたいな事を嬉しそうに話していた。

シアンが行つてみる事になつたのでボクも護衛という事で一緒に行くことになつた。行くのは明後日らしい。あとツバサがボクの歳を聞いて目を白黒させていた。

○月d日

今日は二人と学校の下見に来た。すると先生らしき人がボク達に話しかけてきた。

なんとなく話を合わせていると何故か話がボクとシアンからツバサの方向にずれ気付けばツバサがボク達の親代わりという事になってしまった。

なんだかツバサが親と言われるとやるせない気持ちになった。

○月 e 日

今日は入学式という行事に参加した。慣れない場所なので体が硬くなってしまった。ツバサはボク達を見て泣いていた、何処か変だっただろうか。

シアンも最初は硬かったけど時間が経つと共にクラスに打ち解け笑顔だったらしい、ツバサから聞いた。ボクはあまり興味が無かったのでクラスメイトに話しかけはしなかった。

学校が終わるとすぐミッシンに呼ばれてしまった、シアンをツバサに任せボクはミッシンに行った。家に帰るとシアンは笑顔でツバサに今日の出来事を話していた、よかった。

○月 f 日

今日、シアンと共に家に戻るとアシモフから電話が掛かってきた。話の内容を要約すると「明日の深夜、大電波塔“アマテラス”を攻略するので力を貸して欲しい。人手が足りないのでツバサも来て欲しい。」…とのことだった。シアンを一人にさせるのは不安なので誰かが来た時の対処法を一通り教えた。ツバサもかなり楽しげに教えていた。

○月g日

今日はミツシヨンの事で頭が埋め尽くされ授業に集中できなかつた。自分もまだまだだと思つた。

○月h日

『このページは何か書いてあるが黒く塗りつぶされていて読めない。』

## 電波塔での悲劇

某日、深夜

「……か……」

「情報通りならね……つとアシモフから通信が来た、ここで合ってるみたいだ。」

翼はGVと共に大電波塔アマテラスを攻略しに来ていた。

今回はチームシップスリーダー、アシモフとの共同作戦という事でGVらとアシモフは二手に別れて行動する事になっていた。

「さ、行こうか。」

「了解ッ！」

二人は塔の入り口を目指し駆け出した。

「貴様ら、フェザーの連中か！撃てエー！」

近づくくと皇神の兵士と戦闘用メカの手厚い歓迎を受けた。

「フンッ！」「フッ！」

二人は敵に剣や針を刺し機械は破壊、兵士は無力化していった。

「クッ！敵の進行が思ったよりも早い！イオタさグッ……」



「これでこのエリアは制圧完了か。」

翼が兵士に峰打ちをした後言った。

「急ぐよ、アシモフとの待ち合わせに遅れたくないからね。」

「だが私はともかくGVはどうするんだ？あの時と同じように私が担げばいいか？」

「いや、ここにはリニアカタパルトがある。これでボク自身を射出すればいい。」

「そういうものなのか…？」

二人はアシモフとの合流ポイントである頂上を目指した。

「あまりに静かだ…、もう制圧し終わったのか…？」

しばらく走った後GVが呟いた。

「敵が居ないのならば好都合、今のうちに！」

その後様々なエリアを走り回り、昇ったが誰に出会わず、時々ロボットが置いてある

ぐらいだった。

「……ここが頂上か…。」

GVが少し気が抜けた声で言った。

「ツ……そういう事だったのか…。」

頂上に着いた二人はいつの間にか敵兵士に囲まれていた。

「退け。」

奥の方向から声がしたかと思えばそこから一人の青年と一人の少女が出てきた。

「なっ?! 立花! 何をしている!」

「翼さん、きつと何かの間違いですよね…? テロリストなんかに入つて人を殺すなんて…。」

翼の質問を無視し響は小さく言った。

「皇神の能力者か…!」

「青い装甲の少女、そして雷撃を操る能力者とは…やはり貴様らであつたか。この先には行かせんで、国賊共が。」

私はイオタ。皇神の…この国の栄光を守護せし光の戦士! ここは皇神の威光をあまねく世界に知らしめる為の標…。貴様らのような国賊如きに落とされる訳にはいかんのだ!」

そう長々と語つた後イオタは宝剣を、立花はペンダントを取り出した。

そうした青年は黒い、少女は白い光に包まれ見える頃には二人は装甲を纏っていた。

「チツ…、…?」

GVは銃を向けたと同時に気が付いた、翼の息が随分と荒い事に。

「どうしたの? ツバサ。」「翼さん! 大丈夫ですか!」

二人は同時に翼に駆け寄り手を差し出した。



イオタは血を吐きながらも、憎悪を翼に向けていた。

「貴様ア…私を舐めてくれるな…、我が光刃ヤイバが貴様という影を絶つ！」

そう叫ぶと自身の第七波動のエネルギーで剣を創り翼に向かって光の速さで翼を貫いた。

「ガアッ！」

そう叫ぶと翼の赤いものは消え、気絶しているものの無傷の翼が現れた。

「イオタさん！大丈夫ですか！」

立花はイオタに駆け寄った。

「紫電様…申し訳ございません…国賊を討ち取る事が出来ませんでした…貴方様の威光を見れなくなるのは心惜しいですが…お別れです…。」

そううわ言のように呟いた後イオタは叫んだ。

「スメラギに、光有れーッ！」

そう言うのと彼の体は爆ぜ立花は壁に打ちつけられた。

「大丈夫か!？」

G Vは立花に手を差し出しながら言った。

「ありがとうございます…。」

立花は力なく言った。

その後アシモフが到着し、アマテラスの攻略は完了した。  
スメラギの少女”立花響”はフェザーの捕虜として捕らえられた。

## 偵察任務

同時刻――

「なあ……。アタシ達、なんでこんな事してるんだ？」

「無論、バケモノ共を滅する為の力を得るためだ。」

二人は電波塔の近くのビルの屋上からイオタ達を見ていた。

――

前日 夕方

「なんでアタシ達がテロリスト共の抗争にちよつかいかけるんだよ！」

「……まあ止めさせるってんなら協力するけどよ。」

「止めさせるのでは無い。殲滅するんだ。」

二人はミチルの居る部屋からかなり離れた所で話していた。

「殲滅だとお!? ふざけんじゃねえ！ 争いは無くすべきだ！ そうだろう?!」

「確かに無意味な戦闘は無くすべきだ。オレの弾丸も無限では無い。」

「そーいう事じゃねえよ！」

二人の声はどんどん大きくなっていく。

「まず第一何でお前がそいつらに喧嘩売る必要があるんだよ！」

「俺は奴らが持つ宝剣が欲しい、バケモノ共を殲滅する為に。」

「なんでアンタはそこまでそのバケモノとやらを殺す事に執着するんだよ！」

「そいつらはそんなに危ない奴らなのか?！」

「ああ! そうとも! 奴らは人類の悪だ! だから殺す! 皆殺す!」

「そうかい! そんならアタシも用心棒としてお前を護衛してやるよ!」

「そうか! 正直戦力が足りないと思っていた所だ! ならば明日の深夜、作戦を決行する

! 遅れるなよ! 遅れたら殺す!」

「ああやってやるよ! お前を守ってやるよ!」

「そう言い二人は別れた。」

—————

(はあ…、そうだ…。アタシコイツに乗せられてこんな事してるんだった。)

雪音はスコープを見ながら自分の行いを悔いた。

「一階、出入り口に人影あり! しっかり見ておけ!」

いきなりアキュラは叫び双眼鏡を二人の人影に向けた。

「ツ…: あいつらが例のテロリストか…!」

雪音も追って銃口を向ける。

「撃とうだなんて考えるなよ、ここで気付かれれば作戦は失敗だ。」

アキュラが静かに言った。

「なんつった!? 見殺しにしろつてかあ!?!」

雪音が騒がしく言った。

「ああ、そうだ。それにあいつらは機械は壊すが人は殺さないらしい。」

「何イ!?!……ホントだ。」(あの人影……どつかで……)

雪音はアキュラの言葉で落ち着きを取り戻し、監視を続けた。

しばらくして最上階であろう場所に大きな男が現れた。

「居たツ! あいつが今回のターゲットだ!」

「あいつがあ? ただの男じゃねーか。」

アキュラは興奮して、雪音はつまらなさそうに言った。

そうこうしている間にテロリストは屋上に着き、スメラギの人達は二人を囲んだ。

アキュラは興奮していたが、雪音は驚きが隠せなかった。

「先輩ツ!? それにあのバカ! 何やってんだ!」

「知り合いか? 例のSONGとやらの。」

アキュラが興味本位で聞いた。

「ああ、そうさ! だが何であいつらが……なっ!?!」



言葉を遮らせたのは赤いものに包まれている風鳴翼だった。

「先輩!?何やってんだよ!ああクソっ!こんな時に!」

雪音は一瞬瞬きをした。

雪音が目を開くと屋上は綺麗な赤が咲き乱れていた。

「ああっ!」「ハハッ!」

「一瞬であの部隊を…ハハハ!あの力があれば…!」

アキュラは心の底から嬉しそうに笑った。

だが雪音は目の前の光景を信じる事が出来なかつた。

咲き続ける血の花、咲かせ続ける先輩、それを見て足がすくんでいる立花。

「あああああーっっっ!!」

その光景を信じる事が出来ず雪音は叫び、気絶した。

## 少女の手は血にまみれている

フェザー拠点内にて――

「そういう関係だったのか…」

「はい…でもまさかこんな事になってるなんて…。」

立花は捕らえられた後フェザーにスメラギに助けられ、働かせられていた事。ここに  
来た理由は翼と同じという事。スメラギのやっている事は知らされていなかった事。  
全てをフェザーに教えた。

「お前は奴らの悪行を止めたくはないか？」

アシモフは立花に言った。

「勿論ですツ！その為に私達は来たんですから！」

立花は食い気味に答えた。

「そうか、ならば話は早い！我々フェザーに協力してくれ。」

「はいツ！」

こうして元スメラギ構成員立花響はフェザーの協力者となった。

その直後GVが二人の居る部屋に駆け込んで来た。

「アシモフ、大変だ！ツバサが！」

「彼女がどうした！」「どうしたんですか!？」

二人はGVに聞いた。

「ツバサの様子がおかしいんだ、狂ったように暴れている。二人共手伝ってくれ！」

その答えが聞こえた途端立花はGVの来た方向に向かって走った。

「待て！ヒビキ！」

二人は立花の後を追った。

私は走った。翼さんに何があったのか不安でたまらなかった。

「……だ！」

私は乱暴に開かれ少し傷がついている扉の先に行った。

「……なツ!？」

そこで私は青白く発光する透明の膜に向かって狂ったように殴りかかり叫んでいる翼さんを見た。

「目覚めた時からこうなんだ。ボクの第七波動で抑えてはいるもののいつまで持つか分からない。」

いつの間にか背後に居たGVが言った。

「三人がかりなら安全に抑えられると思う、手伝ってくれ。」

そう言うとうとGVさんとアシモフさんは体術の構えをした。

気が付くと膜は消えていて翼さんが飛び掛かって来ていた。

「フツッ!」「ハアツッ!」

二人は翼さんの腕や脚を必死に抑えていた。

「何やってるんだ、ヒビキ!手伝ってくれ!」

「…はいっ!」

私も声に動かされ二人を手伝った。

そうして私達は翼さんを拘束した。

—————

「……は……?」

私は涼しい、むしろ肌寒く感じる部屋に居た。

「……ん?」

私は鎖で拘束されていた、ギアペンダントも取り上げられていた。

「……は何処だ……?」

そんなことを呟いた後扉の先から声が聞こえた。

「翼さん、入ってもいいですか?」

「立花か!?頼む!鎖を切ってくれ!」

「それは出来ません。」

立花の声は震え今にも崩れそうだった。

扉が開く。

立花は目に涙を浮かべ、落ち着きがなかった。

「翼さん、体調はどうですか?」

立花が弱々しく聴いてくる。

「どうした立花!?いつものお前らしくないぞ!」

「らしくないのは翼さんですよ!」

私の叫びを掻き消し立花は叫んだ。

「…すみません、急に叫んで。…でもどうしちゃったんですか?あんな事…するなんて…。」

私は立花に聴いた。

「あんな事とは何だ?」

「覚えてないんですか?!あなたは沢山の人達を殺してるんですよ?!手を取り合えたのかもしれないのに!メラクさんも、イオタさんも!みんな!…あなたが…」

立花の言葉が聞こえた時私は全てを思い出した。啜うメラク、睨むイオタ、恐怖し、叫



## 少女の歌は光で溢れている

「……………」

翼は座ったまま俯き何も喋らず目に光は無かった。

「翼さん……」

立花が心配しているとアシモフが話し始めた。

「ツバサが目覚めた後から彼女には生気が感じられない。これではミツシヨンに行っても足手まといになるだけだ。彼女には休養が必要だ。そこでだ、ひとまずGVの隠れ家に置いてやってくれないか。」

「それは構わないけど……」

GVが返事をしたのを確認しアシモフは続けた。

「それと、だ。ヒビキ、お前は確かツバサの知り合いだったよな？ 知っている顔があると彼女も安心できるだろう。近くに居てやってくれ。」

「はい、分かりました……」

「二人の了承も得た事だ、今日はここで解散だ。」

そう言いチームシープスとGVら三人は別れた。

隠れ家にて…

「お帰りなさい…GV、その人…誰？」

玄関で三人を迎えたシアンが恐る恐るきいた。

「ただいま、シアン。この人はヒビキ、ボク達の味方さ」

「初めまして、シアンちゃん。私は立花響！よろしくね！」

「よろしくお願ひします。」

一通りの挨拶を終えた後シアンは翼を見て言った。

「ねえ…本当にこの人はツバサさんなの？」

「そうだよ、今はこんなただけどきつとすぐに元気な翼さんに戻るよ。」

シアンの問いに立花は優しく答えた。

「…そう…なのかな…。そうなんだよね。」

シアンは独り合点しGVらを部屋に入れた。

「すつかり遅くなっちゃったね。晩御飯作るよ。」

GVはエプロンを着けキッチンに立った。

「あつ私も手伝います！」

立花もキッチンに入って行つた。



「ありがとう、ところでヒビキは料理は出来るよね？」

G Vが立花に聴いた

「まあ、出来ませうけど…。どうしたんですか？」

「いや…前にツバサをキッチンに立たせたら大変な事になって…。」

「あぁー…。」

立花はG Vの言葉に納得したように頷いた。

十数分後…

「料理、出来たよ。」

「お待たせ。シアンちゃん！一緒に食べよう！翼さんも！」

立花は二人に促した。

だがシアンは来たものの翼は座ったまま動かず応えなかった。

「翼さん？」「ツバサ？」

「翼さん！ご飯一緒に食べましょうよ！」

立花は翼の肩を叩いた後言った。

だが翼は応えず見向きもしなかった。

「翼さん！何とか言ってくださいよ！」

立花は肩を掴み、揺すり、叫んだ。

だが翼は動かなかった。

「お願いだから…何か言ってくださいいよ…。」

遂には立花は泣き崩れてしまった。

「どうして…?どうして何も言ってくれないんですか!」

立花が泣きGVは何も言えず立ち尽くしている所にいきなりシアンが叫んだ。

「どうしてツバサに何かさせようとさせるの!?!ツバサは疲れてるんでしょ!?!ツバサにだつて何もしたくないときだつてあるよ!なのみんなは何か言つて、ご飯食べて、つて。ちつともツバサの気持ちを考えてない!」

そこまでシアンが叫んだ所で立花も涙を流しながら叫んだ。

「じゃあどうすればいいの!?!シアンちゃんにはそれが分かるの!?!」

その問いにシアンは優しく答えた。

「私がポッドの中に居た時歌が聞こえたの。心地よくて、優しくて、カッコいい歌だつた。それはツバサの歌だつた。…きつとツバサは歌が大好きなんじゃないかな。だから私は歌うよ、ツバサの為に。」

そう言つた後シアンは優しく包み込むように歌い始めた。

その場に居た全員が聞き惚れた。

気付けばそこには一匹のモルフオ蝶が飛びそれは女性の姿へ変わりシアンと共に歌

を歌い始めた。

その歌声に気付いたのか翼は顔を上げ歌を聴いていた。

歌い終わる頃には翼の目には光が宿り、涙を流していた。

## 見え始めた光

「うう…ひぐつ…。」

翼が泣きじやくつているのを四人は静かに見守っていた。

「…すまない、私は沢山お前達に迷惑を掛けてしまったな。」

「いいんですよ、翼さんが元に戻ってくれたなら…。」

「そうだね。…だが君は誰だい？助けてくれたのは感謝するけど。」

二人は翼を慰めつつ新たに現れた一人を見る。

「自己紹介が遅れたわね、アタシはモルフオ。この子、シアンの意志が具現化した存在<sup>マホロシ</sup>。前までスメラギで歌わされていたの、助けてくれてありがとう。」

「そうだったのか…。改めて翼を助けてくれたのは感謝する、ありがとう。」

「ありがとうございます！モルフオさん！」

「本当に感謝する…ありがとう…。」

三人が口々に感謝を言う。

「…どういたしまして。でも私の力を使わないといけない程に気を病むなんて何があったの？」

モルフオが言うとしばらくした後翼が重々しく語り始めた。

「……私は沢山の人を殺した、沢山の返り血を浴びた。本来我々は、私は人々を救い敵対する者には拘束、無力化が絶対なのに。私は何人も人を殺し、私の意志に反した行動をしてしまった。」

…それもこれもあの時の言葉が原因なのだろう…。彼…メラクが言った言葉が忘れられず、彼の最期の表情が焼き付いてしまったんだ。」

「…それでツバサは宝剣を見た時あんな風になってしまったんだね…。」

翼がしばらく語った後GVが入り込み話を止めた。

「…でも、翼さんが無事でよかったです。」

「そうだね…とところでシアン、どうしてそこで縮こまつてるんだい？」

GVが話題を変えるとシアンは涙を流しながら言った。

「翼さんが元に戻ってくれたのが嬉しい…つていうのもあるけど…あの時私あんなに大きな声で叫んで、しかもいきなり歌いだして…」

そこまで言った所で立花が割り込んだ。

「大丈夫だよ、シアンちゃん！…あの時は私もどうかしてた。それにあの時シアンちゃんが言つて、歌ってくれなかつたら翼さんは元気になつてくれなかつた。シアンちゃん  
は悪い事なんてしてない…だから、泣かないで。」

「そっか…ありがとう！ヒビキさん！」

二人が話している笑顔になった所でGVが二人に話しかけた。

「二人共、いや、みんなが仲直り出来た所で晩御飯、食べようか。」

「そうだね！でもすっかり冷めちゃったね。」

「すまない、皆…。私のせい…。」

「もう翼さんだったら！そんな顔しないでくださいよ！美味しいご飯が台無しですよ？」  
「飯なんてまた温めればいいんですから。その涙を拭いてください。」

「ああ…ありがとう立花…。ありがとうみんな…。」

こうして五人の楽しい、穏やかな夜は過ぎていった。

—————

「…んん…ああ、もう朝か。昨日はあのまま寝てしまったんだな。だが、ここでこんなに熟睡できたのは初めてだ。それだけ昨夜は楽しかったという事だろう。」

翼は起きて独り言を呟いた後周囲を見渡した。

「そういえば…今は何時だ？」

「そう言い翼は時計を見た。」

すると時計はかなりギリギリの時間を指していた。

「あつ！不味いッ、皆！起きろ！」

「んん？どうしたの？」

G Vが目を擦りながら起きた。

「もうこんな時間だ！急がなければ不味い！シアンを起こすのを手伝ってくれ！」

翼は必死に言うがG Vはまた横になり言った。

「今日は学校は休みだよ、ミツシヨンもアシモフのおかげで入ってない。寝ててもいい

日だよ。」

「そうなのか…とでも言うと思ったか！もうこんな時間だぞ！皆寝すぎだ！」

そう言い結局翼は皆を起こし朝食を摂らせた。だが朝食を作ったのはG Vだった。

.....

朝食後、多分10時くらい。

「うーん…今日は何もない日だから本当に暇だね。」

立花が独りごちた。

「そうだね…本当に何も無いね…。」

シアンもそれに同調した。

「……。」

G Vはだらけている二人を見て何かを思いついた。

「みんな、折角だし何処かに遊びに行かないかい？ボクも行きたい所があるし。」

「うん、行こう！私も暇してたし。いいよね、シアンちゃん！」

「うん。私も出掛けるのはあの時以来だし。」

「ツバサもいいよね？」

「ああ！正直私も暇で腕が鈍りそうになっていた、お供するぞ。」

「さて、三人の了承も得たし。一時間後に出発するよ。」

「こうして四人の休日が始まった。」



# 楽しい休日、ただしお金は減る

四人がやってきたのはショッピングモール、しかもかなり大きな所。

「おおー…。」

立花とシアンは目を輝かせていた。

「ふう…さて。今日はちよつとした家具を買いに来たけどどうせなら楽しもう。みんな行きたい所はある?」

そう言うと立花が一番に言った。

「はい、はい、はい! 私ゲームセンター行きたいです!」

「ゲームセンター…?」

「ゲームセンターはね! UFOキャッチャーとか、コインゲームとか! 沢山面白いゲームがある場所なんだよ!」

シアンの問いに立花は元気に答えた。

「ゲームセンターか…ボクもジーノに付き合わされて以来行って無かったな…。」

GVは懐かしそうに呟いた。

「なら、最初はそこに行ってみよう。」

という訳で一行はゲームセンターに行くことになりました。

.....

「わあく……」

シアンは目をパチパチさせながらセンターを見ていた。

「ふっ、立花。私もあの時はこんな感じだったか？」

「どうでしょう？ 翼さんはもつとオドオドしてましたよー？」

立花は翼の言葉にいじわるっぽく答える。

「……じゃあ、遊びに行こうか。最初に何をしよう？」

「やっぱり、メダルゲームでは？」 「当然、太鼓の殺陣だ。」

「ん？」

二人同時に答え、二人同時に疑問符を出す。

「いやいや、翼さん！ やっぱりメダルを落としてメダルを落とす。単調で楽、でも楽しい

！ そんなゲームがいいのでは？」

「いや、それは違うぞ。鼓動に乗り太鼓を叩く、音楽に合わせて体を動かす。そういう

遊びこそ彼女も楽しめるのでは？」

「……………」

「あの一！」

二人が火花を散らしている途中シアンが割って入った。

「ん？どうしたの、シアンちゃん！」「どうした、シアン。」

二人は無理やり笑顔を作りシアンの話聴く。

「私、あそこにあるアレをやりたい。」

そう言いシアンはUFOキャッチャーを指差す。

「ああ…：UFOキャッチャーだね！一緒にやろうか！」

…

台の中に置いてあったのは青い髪の銃を持った天使のぬいぐるみ。

「ああー！かわいいー！」

立花が女子らしく言う。

「…これってどうやるの？」

シアンが一同に聞く。

「そのレバーを使って台の中のアームを操作して景品を取るんだ。…出来そう？」

「…わかった、やってみる。」

シアンが真剣な目をしながら答えた。

「よし、じゃあ…。」

GVがコインを入れる。

「……。」

シアンがアームを動かし人形の頭を掴む…がアームから抜けてしまう。

「あつ…あー…。」

三人は天を仰いでいるがシアンだけはまだ台を見ていた。

「あつ…これって…もしかして…!」

ポフッと音がして人形が落ちる。

「みんな！取れたよ！」

「「ええーッ!?!」」

三人は驚きを隠せない様子で叫んだ。

「どうやったの？えつ!?!さっきアームは…。」

立花が一気に話す。

「頭は離しちゃったけど天使の輪っかは掴めたの。」

シアンは嬉しそうに話す。

「へー…意外な才能…。」

一同はその後ゲームセンターを大体一時間くらい回って楽しめましたとき、ちなみに踊るゲームでヤバイ点数を出す少女と少年がゲームセンターに現れたって噂が出たらしい。

「はむっ…んぐんぐ…。」

一行はフードコートで昼食を摂っていた。

「シアン、ケチャップ付いてるよ。」

G Vがシアンの口をおしぼりで拭う。

「…こうしてみると二人って兄妹みたいですね。」

立花がふと呟いた。

「兄妹か…みんなは兄妹っているの？」

G Vが聞く…が皆居ないと言うか首を横に振る。

「そっか…ボクもなんだ。」

…

「…そういえばクリスちゃんは何処にいるんだろう…。」

「そうだ！雪音！」

ツバサが急に叫んだので微妙な空気になる。

「…あつ！そうだ！今日はG Vさんも用事があつてここに来たんですね！確か…」

そこまで言った所で翼が口を挟む。

「家具を買いに来たんだろう？だが…何を？」

「いや…必要な物はあるんだ。ただ…少々飾り気が無いなと思ったから何かみんなの欲しい物はあるかな…と。」

「そうですか…、でもみんな…ひッ！」

立花が言いかけて気付いた、翼の目がこれまで以上にギラギラしている事に。

「助かった、私は正直ここに来て鍛錬の道具が無くて困っていたんだ。これで我々も助かる。そうだろう？立花。」

「はひっ！そ…ソウデスネ…ハハハ…。」

立花が目を逸らしながら答える。

「そうと決まれば行くぞ！」

そう言いかなりのスピードで行ってしまった。…あ、でもちゃんとみんなの食べ終わりは待ってたよ。

…

「ああ、これだ！私の求めていた物は！」

そう言いながら翼は嬉しそうに模造刀とかかしを抱えながら歩いてきた。

「…ええ…。」

さすがのGVも驚きが隠せなかった。

「GVさん！一応取って来ましたよ。って、ええ…GVさん財布大丈夫ですか？」

立花は拳法着とそれっぽいポスターを持って来ながらGVを心配していた。

「ああ……うん……なんとか……。」

「GV！持ってきたよ！」

シアンはフォークを持った悪魔の女の子のぬいぐるみを持ってきた。

「シアンちゃんのヌイグルミかわいいー！」

立花が女子っぽさを出しながら言う。いや本人は普通に言ってるんだろうけど。

「ふう……さて。買って、帰ろうか。」

……

こうして一行の楽しい休日は過ぎていった。……ちなみに列車の中に模造刀とかかしを持って変じ……美人が居たってウワサがあつたつてよ。

○月i日

今日はツバサの休養として休みを貰った……がシアンとモルフオのおかげでツバサは元気になったから休日を利用させてもらった。財布の中身は大分喰われたけど、シアンの笑顔が見れたからこのくらいは問題ない。あとちよつと気になる事も出来た、あとで二人に聞いてみよう。

出費抑えなきやな……、ヒビキの胃袋はちよつと

大きいし。



## 血の気が多い神園家

休日を利用してGVらがやいのやいのしてたその頃…

神園家にてー

ベキッ

「ぐうっ！」

ごしやっ

「あがつ！」

二人、アキキュラと雪音は顔を凄い事にしながら殴り合っていた。

事の始まりは数分…数十分…くらい前…

えっ何？真面目要素入るから真面目にナレーターやれって？…へー

いべシイ痛い！

バシヤアッ

「んぐっ!?ぶはっ…ごほっごほっ…ペッ！」

雪音はアキキュラのバケツの水で目を覚ました。

「目が覚めたか、臆病者。」

「…んだと!？」

アキュラの唐突な悪口に雪音は寝起きというのに本調子でキレた。

「当たり前だろう。ほんの少し血が見えただけで叫んで倒れるとは…お前は本当に孤児として戦場を歩いてきたのか？」

「何だとテメエ! もう一回言ってみろ!」

「お前の世界の戦場は甘々のお遊びと言ったんだ。」

ベキィ

「ガッ!？」

アキュラが言い終わると同時に雪音は間髪入れずにアキュラを殴った。

「誰が甘ちやんだコラア!?! ぶっ殺すぞ?!」

「貴様ア…ハッ!」

バキッ

「ゴベッ!」

アキュラも殴り返した。

「当然だろう! だつたらあの醜態は何だ! 倒れた直後、先輩、先輩…なんて呟き続けるわ、急に叫びだすわ。…ノワでさえも心配したレベルだぞ!」

「うるせえ! あんなの見せつけられたら誰だつて…ハッ! そうだ! 先輩とバカが!」

「逃がさんツ！」

雪音はアキユラがガミガミ言っているのを無視してすぐ走り去ろうとしたがすぐ服を掴まれ捕らえられた。

「それにだ！お前が急に叫ぶから警備システムに見つかり、俺がお前をおぶりながらここまで逃げ帰ってきたんだぞ！どれだけ苦勞したか！」

「知るか！早く二人を助けねえと！」

アキユラの説教を無視して逃げ出そうと雪音はもがいたがその様子を見たアキユラが血管を浮かべているのに気付いていなかった。

「黙れ！少しは反省しろ！」

バゴオツ

「ガハツ!？」

アキユラは雪音を引き寄せ思いつきり腹を殴った。

「…テメエ…二度もアタシを殴りやがったな…それにあんな場所を甘々だとも言いやがった…。容赦しねえぞ！ハアツ！」

ドゴオ

「ウグウツ！」

雪音も思いつきり腹を殴った。

「黙れ…お前がもつとちゃんとしていれば宝剣の回収ももつと楽だった…その上逆ギレしてくるとは…随分と躰がなつてないようだな！」

ドカッ

「グベッ！」

アキュラは雪音のこめかみを殺意も込めて殴った。

…といった流れでドンドン殴り合いはヒートアップして行き、今では殴る音と唸り声しかない野蛮なファイトになっていた。

そんな二人に近づく球体が一ついた。

「アキュラくん！ノワさんが呼んでるよー！アキュ…あーいたいた！約束の時間になつ…うわああっ！」

口口は二人の血まみれ痣まみれの二人をみて驚きの声を上げた。

「ああ…えーつとお…うわーっ!!ノワッ助けてーッ!!」

口口はしばらくした後ブースターを起動してノワの所へ飛んで行った。

「……。」「フンッ！」「オラア！」「ハアッ！」「ウラア！」

「アキュラ様、クリス。」

「何だ!?!」「アア!?!」

二人が殴り合っているのに割り込んでノワが二人に声を掛けると二人同時に反応し

つつノワを睨んだ。

「…口口から二人を止めてくれと言われました。どうか喧嘩を止めて頂けないでしょうか。」

「黙れ！こいつは少し灸を据えなければ駄目だ！何も言わないでくれ！」  
「ウルセエ！コイツはアタシ達を馬鹿にしがった！止めないでくれ！」

二人はまたもや同時に返事をした。

「…交渉決裂…では少々手荒に…」

「ぐべえっ!?」「アバーツ!?!」

ノワは眩くと二人の間に割って入り一瞬で二人を地面に打ちつけた。

「…落ち着きましたか…?二人共何があつたのか話して頂けませんか?」

…二人はノワに事のいきさつを話した。

「…これは二人共悪いと思います故、罰として二人には私との戦闘訓練をしていただきます。」

「ま、待てノワ！何故そうなる！」

「そうだ！お前の訓練とコレは関係無いだろ！」

「何か異論でも?」

叫ぶ二人をノワが睨みつける。

「ウグツ…」 「ヒイツ！」

こうして二人は若干強引に戦闘訓練に付き合わされることになった。

## 戦闘の基本は格闘

神園家保有のジャングルにてー

三人は運動用のウェアを着て立っていた。

「まずは戦闘の基本、格闘から始めましょう。」

ノワは二人に静かに言った。

「だが何をしろって言うんだ？まさかコイツとやり合えって言うんじゃないだろうな？」

雪音はノワに言った。

「私も最初はそう考えましたがまずは二人の技量を知りたいので私と殴り合って頂きます。」

「んな…あの時アタシはアンタにやられたが正々堂々っていうんなら多分アタシの方が上だぞ？」

雪音は言い放つがノワは平然とした顔で返した。

「どうでしょうか？…ともかく、一度戦ってみないことには分かりません。」

「そうか…ならば頼む。」

アキュラは静かに言い、格闘の体勢を取った。

「ああ…分かったよ、やりやあいんだろ？」

雪音もぼやきながら構えた。

「では…行きますッ！」

ノワは二人が構えたのを確認し駆け出した。

「ハアッ！」

「グウッ！」

アキュラはノワの蹴りを両腕を交わらせ受け止めた、だが…

「隙有りッ！」

「後ろッ!？」

ノワは腕を踏み台にしアキュラの背後に飛び込み背中に体当たりをしアキュラを突き飛ばした。

「ナニッ!？」

「呆けている時間はありませんよッ！」

「チイッ！」

ノワの拳を後ろへ下がりギリギリで回避する。

「なかなかですね。ですがっ！」



「なあッ!？」

ノワの脚が雪音の顔に向かって来るのが見えた、次の瞬間雪音は茂みに突き刺さっていた。

「ウウ…クソっ、アキュラ!同時に叩き込むぞ!」

「気は進まないが…やるぞっ!」

二人は立ち上がりノワに向かって走り出した。

「ウラア!」「ハアッ!」

雪音が殴りかかり、アキュラが飛び蹴りをする。

「遅いッ!」

だがノワは拳を軽く躲しアキュラは足を掴まれ投げ飛ばされてしまった。

「んのヤロオーッ!」

雪音はノワに殴りかかるが全て躲し、受け止め全て受け流され拳句の果てには投げ飛ばされてしまった。

「ぐああ…」「クソっ…」

「二人のスペックは分かりました。これから私の言うメニューを行って貰います。」

二人が唸っているのをよそにノワは二人に厳かに言った。

.....

二人はその後ノワに言われたメニユーをなんとかクリアしていった。

途中野生動物の捕食や猿の面を付け松明を持ち踊るといったトレーニングもあつたがノワに訊いても「これも大切なことです」と言うだけで意味は教えてくれなかった。

数々のトレーニングを乗り越え、最後のメニユーをする時にはもう夕暮れだった。

「これで最後です、二人で闘ってください。」

「ああ…そうかよッ!」「決着を…つけるッ!」

二人は互いに走つていき互いに拳をぶつけた。

「ダラア!」「ハアッ!」

互いに拳を突き出し拳をぶつける、ぶつけ続ける。だが拳に傷が付くだけで進展は無い。

これといった有効打がないと思われたその時アキュラが足を滑らせバランスを崩す。

「貰ったあ!」

それを見た雪音がアキュラに掴みかかり、柔道の要領でアキュラを叩きつける。が、アキュラはすぐ雪音に蹴りを入れその勢いで起き上がる。

「ゴフツ!」

「ハアッ!」

アキュラは雪音がのけ反った所を殴り、そこからラツシュを叩き込み畳み掛ける。

「ダアツ!」「アガツ!」

雪音は苦し紛れに足を蹴りアキユラにダメージを与え拳を止めさせる。

「ダラツシヤア!」「させるかツ!」

二人の脚が空中でぶつかり合い止まる。

「ウグツ…。」「ガハツ…。」

二人は次の手を打つ事無く倒れた。

二人が倒れた後ノワが静かに歩いてきて二人に告げた。

「…合格です、二人は無心で拳を打ちつけ合い、そして勝負を終えました。…二人の仲も少しは深まった事でしょう、トレーニングも出来て一石二鳥ですね。」

ノワが平然とそんな事を言うので二人は笑い出しそして呟いた。

「ふう…コイツはやられたな。…でも悔しいけど楽しかった、ありがとな。」

「…ああ、少しではあるがお前のことが分かったような気がする。ありがどう、そしてすまなかつた。」

「いいってことよ!」

そして二人はまた笑い出し、ノワは二人を静かに見守っていた。

ちなみに二人はしばらく泥と汗の臭いが取れなかったらしい。

〔二人共、なんだか土の匂いがするよ?〕

〔ハ、ハハハー…何でだろうな?〕

〔さ、さあ?ミチルの気のせいじゃないのか?〕

〔そう?…でもなんだか二人共仲も良くなったように見える。〕

〔ハアツ!?ここコイツと?いやいや、気のせいだよ!〕

〔そ、そうだぞ、ミチル!コイツとは…。〕

二人が言い訳をしているとミチルはクスツと笑いこう書いた。

〔二人共息びつたり。まるで夫婦だね!〕

〔「何イ!?!」〕

…その後一週間程二人が出会う度に顔を赤らめるようになった。

## データバンク施設制圧作戦（上）

G Vらがやんややんやしてから約半月後、翼の精神状態も元に戻りミッションに参加しても問題ないようになった。

G Vは翼に配慮してこれまで以上に殺しはしないようになった。

そうして彼らなりに平穏な日々を送っていた時そのメールは来た。

「よう、G V！元気か？今回は報告と依頼だ。

まずは報告から。ツバサとヒビキの言ってた…並行世界への入り口だったか？…すまねえ、まだそれらしきモノが見つかって無えんだ。もう少し待ってくれ。

それと…「ユキネクリス」の搜索なんだが…それもなんだ。まだ見つかって無え。許してくれ。

…それで、こんなんだが頼まれて欲しい事がある。皇神のデータバンク施設の襲撃だ。なんでもその施設には皇神が研究してきた能力者のデータがあるらしい。

…謝ってばっかだな…スマン。…だが出来る限りの事はする。だから頼む、今回の依頼引き受けてくれ！」

「…だそうだけど。二人共、今回の依頼どうする？」

GVがメールを読み終え立花と翼に訊く。

「当然、行きますよ。スメラギの悪い事を止める手助けになるのなら。」

「そうだな、私も立花の意見に賛成だ。」

「…そっか、ならジーンには承諾のメールを送っておくよ。」

こうしてGVらは任務に赴く事になり指定の時間を待った。

翌日：深夜

「はあ…。」

立花のため息が施設の中に響く。

「施設の中に入れたみてえだな！慎重に行けよ、一時間程前に皇神のへりがそこに来ている。もしかしたら能力者かもしれないねえ。気を付け…。」

ジーンの言葉をアラームが掻き消す。

「あ…私、やっちゃいました？」

立花が恐る恐る訊く。

「はあ…駆け抜けるよ。」

GVが呆れたように言い走り出す。

「立花、任務が終わった後私が隠密の訓練をみっちりしてやる。」

翼も若干恨みを込めながら言い走り出す。

「ああ…私、呪われてるかも」

立花も呟きながら走り出した。

こうして三人はアラームを聞きつけやって来た兵士達を無力化し機械は破壊していった。

その途中三人は少し見晴らしが良く、サーバーがよく見える所にやってきた。

「……………」

「…GVさん？」

GVが立ち止まっているのを見て立花が話しかけた。

「GV、過去を思い出すのはいいがミッションに支障が無い程度にな。」

ジーノがGVに言った。

「分かっているよ…。」

そう言ったGVの目はシアン達と過ごしている時には絶対に見せない目だった。

「おっと、天井からものすげー電磁場が出ているぜ。」

ジーノがふと言った。

「雷撃鱗を使うと引き寄せられるようだね。」

GVも冷静に言った。

「おい、GV。」

翼が崖のようになっていいる所を指差しながら話しかけた。

「この構造は一体……」

「おそらく第七波動を使用する事を想定して作られている道だろうね。」

GVが翼の問いに答えた。

「GV、二人を抱えて先に行けるか？」

「大丈夫ですよ！私達もそんなヤワじゃありません！一人で行けます！」

そういうと立花は二人を置いて腕やら腰やらから火を出しながら飛んで行ってしまった。

「はあ……私達も行くか。」

「……そうだね。」

二人も立花を追って飛んで行った。

「ここだね。」

「そうだ！その先のメインサーバーのある部屋を制圧してくれ！」

GVがスピードを緩めジーノに訊いた。

「……行くぞ、突入！」

翼が合図をして三人は部屋に入った。

部屋の中には大きな機械が一つと一人の若者が立っていた。



「…そなたらが、例の侵入者か。」

「あなたは？」

立花が若者に名前を訊いた。

「小生は磁界拳のカレラ、この施設を託されし守人で候。」

「守人よ、退け！」

「断るッ！小生はそなたらと戦う為に此処に来た！この機会を逃す訳にはいかん！」  
翼が叫ぶがカレラも叫び返す。

「フンッ！…又オオオオ！！」

カレラは先の能力者達と同じように剣を取り出し黒い霧に包まれ鎧を纏った。

そして構えを取りつつ叫んだ。

「さあ、参られいッ！！」

## データバンク施設制圧作戦（下）

「構えを解いてください！ 私達はあなたと戦いたくありません！」

立花がカレラに向かって叫ぶ。

「拒否するッ！ 小生はそなたら……特にその劍の娘と戦う為に此処に来た！ なんでも七宝劍の内の二人を屠ったそうではないか！ そう聞いてから武者震いが止まらんのだ！ さあ！ 小生に二人を屠った力……見せてみよ！」

そう語った後カレラは翼に向かって走り出した。

「フッ！ ならばみせて差し上げよう、防人の劍をッ！」

翼も劍を振り上げながら走り出した。

カキンといい音を立てて劍と籠手がぶつかる。

「又ハハッ！ 二人を屠った力……その実力は確かなようだなッ！」

カレラが拳を振るいながら笑う。

「お前こそ、その拳ッ！ これ程豪快な物は受けたことが無いッ！」

翼もカレラの拳をいなしながら叫ぶ、だが彼のように笑ってはいなかった。

見ていた二人が駆け出し始めた頃、翼はカレラの間を見つけた。

「隙ありッ！」

翼は剣を逆にして峰打ちをしようとした。だが次の瞬間剣が音を立てて折れた。

否、巨大な“拳”にへし折られていた。

「何ッ!？」

「そなたの剣は技こそあるものの力が足りん！小生の磁界拳には遠く及ばぬわア！」

「ゴハアッ！」

翼は気が付けばカレラの拳に壁に打ちつけられ叩き伏せられていた。

「チッ！なら遠距離でッ！」

翼が意識を失ったのを見てGVが舌打ちをしながら発砲した。

「フッ！その程度の弾丸で小生の体に傷を付けられると思っていたのか！」

「元々付けるなんて思っただけ無いかからね。」

GVは針を軽々と受け止めたカレラに対してそっけなく返し電撃を流し込んだ。

「又アアアアアッ!!」

カレラは体の一部を焦がしながら叫び、膝をついた。

「気絶させたよ、後は……」

GVは途中まで喋り倒れた。

「GVさん!？」

「何だコレは…力が入らない…。」

立花が駆け寄り抱きかかえるがGVは力なく喋る事しか出来なかつた。

「又ハハハハハハハッ！そなたの雷撃、小生の磁力の拳で捻り潰してやったわ！」

カレラは焦げた体とは裏腹に豪快に笑う。

「まさか…ヤツは能力因子にまで干渉出来るのか…!？」

GVがカレラの能力を推測する。

「…さあ！娘よ、小生と戦え！小生に力を寄越せ！それとも二人を殺されるのがご所望か！」

その言葉を聞いて立花の体がピクリと動いた。

「…二人をこれ以上傷つける訳には行かない。手加減無しで行きます！」

「小生の拳、受けてみよッ！」

叫んだ途端カレラの巨大な拳が立花に向かって行つた。

「遅いッ！」

立花は拳を軽々と躲しカレラを殴つた。

「ウウツ！そなたの拳、中々の物だな…。だがこれならばッ！」

カレラはもう片方の拳を広げた状態のまま立花に向けて飛ばした。

「なッ!?!ガアッ！」

もう一つの拳に対応できず立花はカレラの拳に捕らわれてしまう。

「又リアアアアッ！」

カレラは一瞬の隙に飛び上がっていて拳を立花にぶつけた。地面が衝撃で崩れた。

「があーッ！」

立花は拳の衝撃で吹き飛ばされていた。

だが拳から解放された事でダメージは負ったものの立ち上がる事が出来た。

「又ハハッ！小生の技をまともに受けて無事でいられたのは貴殿が初めてでござる！小生に貴殿の力をもつと見せてみよッ!!」

「言われなくても…あなたを止める事で見せてあげる！」

「又ハハハハハハッ！気持ちの良い返答、実によきかなッ!!拳同士のぶつかり合い！血沸き肉躍るとはこの事でござったか！」

カレラは嬉しそうに叫んだ後両拳に瓦礫を集め始めた。

「小生が欲するは更なる力！力とはより大きな力を乗り越えた時磨かれる！さあ娘よ！小生に更なる力を！」

「たとえどれだけ磨かれた力でも止める！私の拳を砕いても止めて見せる！」

「ならば砕いてみせよ！小生の拳をオッ！」

カレラは叫んだ後瓦礫を飛ばし自身も飛び掛かった。

「どんな物でも砕いてみせる！あなたの力も！」

立花は叫び拳で瓦礫を打ち砕きカレラは足で突き飛ばした。

「又アアアッ！…貴殿の拳！小生の全力を受けられるか！」

そう叫ぶとカレラの拳から巨大な闇が生み出され周囲の瓦礫を吸い込んだ。

「何コレッ!?!吸い込まれる！」

「これで終わりではないッ！爆発四散！」

カレラが叫ぶと闇が爆ぜ周囲は煙に包まれた。それと同時にカレラは拳を地面に着けた。

「又ハハッ…小生の力が…勝った…ッ!?!」

カレラは笑っていたがそれもつかの間。煙の中から立花がよろよろと歩いて来た。

「カレラさん…勝ちましたよ。砕いて見せました。」

立花は微笑みながらカレラに言う。

「まさか…小生の全力から逃れる者がおるとはな…。さあ、とどめを刺せ。」

カレラが力なく言うが立花は首を横に振る。

「私、さっきので力出し尽くしちゃいました。」

「又ハハ…そうか…、満足だ。」

そうカレラが呟いた途端二人は意識を失った。

その後フェザーの部隊が到着しデータバンク施設は制圧、カレラは拘留させられた。

## 能力者を滅する弾丸

ひどく荒れたデータバンク施設に足音が響く。

「いい具合にフェザーとスメラギがぶつかってくれたようだな…。」

メインサーバーの周りに倒れている四人の少年少女を見て復讐者は顔をにやつかせる。

「さて、こいつは確か第七波動を無力化する第七波動を持った能力者だったな…さっそく能力因子を頂くとしよう。」

そう少年は眩くとカレラの皮膚をナイフでゴツソリと削った。

「今回は四体も居る…急がなければっ!？」

アキュラは通路から響いてくる大量の足音に気付き採集を止めた。

「クソっ!もうやって来たか…。まあコイツの能力が手に入っただけマシか、撤退する。」

そう眩くと持っていた盾を構えワームホールを打ち出し中に入った。

———

「アイツラは何処だ…!?…ここか!？」



三人からの連絡が来なくなった事に焦りを覚えたジーノは部隊を引き連れデータバンク施設に来ていた。

「隊長！メインサーバー室にそれらしき人物とスメラギの能力者が居るとの報告が！」

「そうか、急ぐぞ！」

部下からの突然の報告に焦りを覚えつつ走り出す。

・  
・  
・

「部屋に辿り着くと四人は拘束具を掛けられ血を流していたり倒れこんでいたりしていた。」

「おいGV！大丈夫か!?お前らも大丈夫か!?おい、デカイ奴以外の拘束を解いてやれ！ソイツらは敵じゃねえ！」

「ハッ！」

ジーノは自身の焦りに任せGVの肩を揺さぶり部下を怒鳴っていた。

「…ジーノ…らしくないよ。」

「GV！」

小さな声で呆れているGVを見てジーノは喜びを顔に出す。

「ジーノ、罨のチェックはしたの？クリアリングはしつかりとしたの？脈はちゃんと見たの？」

「うっ……」

GVから少々残酷とも思える程の勢いで言葉を並べられジーノは落ち着きを取り戻し若干落ち込んだ。

「はあ……。……大丈夫、二人共生きてる。じき目覚めるさ。」

GVはジーノに代わって冷静に脈を測り報告する。

「はあ……。そうか。二人が無事で良かった。」

「危うくジーノが怪我するかもしれないなかつたけどね。」

GVはジーノに冷静にツツコミを入れる。

「……さて、コイツらは俺達がフェザーの医療施設に連れて行く。GVは野暮用に付き

合つてくれるか？」

「分かった。二人の事、頼むよ。」

「りょーかい！」

二人は会話を終えると立ち上がり歩き出した。

—————

「ふ……。ふ……。フハハハハハハハハ！遂に完成した！対能力者用特殊弾頭！」

薄暗い研究室に少年の笑い声が木霊する。

「実験こそしていないもののコイツの力が本物ならば……」

狂ったように笑う少年の居る部屋の扉がいきなり開けられた。

「アキュラ様、お声の上まで届いております。」

「そうか。で、本当の用はなんだ？」

突然の出来事にもいつもの事のように平然と返す。

「歓楽街でスメラギの能力者部隊が展開されているとの情報が、おそらくデータバンク施設に攻め入ったフェザーを撃退する為かと。」

「何ッ!? ユキネにも伝えろ! すぐ出発する!」

「承知しました。」

ノワは短く返事をするので扉を開けたまま走り出した。

アキュラはその姿には見向きもせずただ静かに、狂った笑顔を浮かべていた。

## ミサイルはやっぱり乗り物

「ハッ!？」

フェザーの医務室兼通信室で横になっていた翼は比較的小さな銃声で目を覚ました。

「大丈夫よ、多分施設の残党狩りね。ここに被害は無いから安心して。」

飛び起きた翼をモニカが優しくなだめる。

「ごめんなさいね、こんなに狭くて。中々資金が集まらなくてね…移動医療施設もこんなものになっちゃって。」

モニカが自嘲するように笑う。

「い、いや済まない。私こそ騒いでしまって…。そうだ、立花は？」

「大丈夫よ、ちゃんと脈も呼吸もある。…タフな子で良かったわ。何せあのカレラという男は第七波動を無力化出来るトンデモな能力者だもの。あなた達が居てくれて助かったわ。」

モニカが仕事をしながら話す。

「そうか…私に何か出来る事は無いか？」

「大丈夫よ、怪我人は休んでて。」

翼の問いにモニカは微笑みながら返す。

「ふむ…そうか…。ところでモニカ、少しずつではあるが銃声が大きくなってないか？」  
「……………。確かにそうね。一度オペレーターの仕事に戻るわ。」

翼の言葉を聞いてモニカは備え付けのモニターを見る。それと同時に大きな爆発音とアラート音が響く。

「何だ!?」「何ッ!?」「…!?」

音を聞いてモニカが急いで端末を操作する。

「ジーノ…聞こえる!?ジーノ！」

モニカが叫んでも聞こえるのは騒音と叫び声のみ。

「…ッ…こちらジーノ、敵軍と交戦中…。」

しばらくしてからジーノの声が聞こえるがいつものような元気が無い。

「ジーノ!?現状を教えてください！」

「スメラギの奴ら…残党狩りで消耗したタイミングで攻めて来やがった…。奇襲に対応してはいるがかなり危険だ…。GVもオレと一緒に戦ってくれていたんだが…。オレがドジ踏んでGV巻き込んだ…。救援を寄越してくれ…。」

そこまで喋った所で通信は爆音に掻き消される。

「ジーノ!?応答して…！応援なんて…他の部隊はここに来るまでかなりの時間が要る

…。どうすれば…」

「私、戦えます。」「私が出る。」

モニカが作戦を考えている間に立花と翼が同時に返事をする。

「立花!?何を言っている!まだフラついているではないか!」

「大丈夫です。ここは何処ですか?私達ならすぐデータバंक施設に行けます。」

翼の制止も無視してモニカに話しかける。

「待って、ヒビキ!あなたさつき起き上がったばかりじゃない!あなたが行っても足手纏いになるだけ!」

「私は大丈夫です、それよりもみんなが心配です。場所は?」

モニカが困惑したように叫ぶがそれを聞かず訊く。

「だからって…」

「決めたんです、あの時。みんなを救うんだって。それにシアンちゃんを悲しませる訳には行きませんから。」

モニカが止めようとするがそれを半ば強引に止め、説得する。

「……分かったわ、今の場所はここ。施設の場所はそこよ。」

モニカが地図を指差しながら言う。

「ありがとうございますッ!」「感謝するッ!」

モニカの説明を聞いた直後彼女は走り出してしまった。

「クソツ！ 奴らどんだけここが好きなんだよ!？」

「馬鹿言つてないで敵を倒して。」

そんな事を叫びながら二人とほんの少しの仲間はスメラギの部隊を迎撃していた。

「た…隊長！ アレを！」

「どうした!? なツ!? 嘘だろおっ!？」

隊員が指差した先には炎を纏い、吹きながら飛んでくる二つの物体を指差していた。

「奴らミサイル出すとかどこまでやる気だアツ!？」

「…いや、ジーノ。 あれはそんなのじゃない。」

「どーいう事…だ?」

ジーノはGVに言われしばらくソレを見ているとそれは炎を吹くのを止め人の形に変わって行った。

「遅れましたッ！ 敵はッ!？」

「お前らだったのか!?! 助かった！ 俺達が護衛するから奴らを倒してくれ!」

「承知したッ！ 我が剣が友を救う退路を開くッ!」

翼が叫ぶと兵士達の叫び声が上がリ士気が上がったのが見て取れた。

．．．  
そうしてスメラギの兵士を無力化し終わったのを確認してフェザーの部隊が帰還しようとしていた頃、一人の男の声が響いた。

「困るねえ、愛する部下達の愛を否定されては。」

「何者だ!?!」

兵士達に銃を向けられているのにも関わらず既に宝剣を使用し装甲を纏っている男は翼の問いに答えた。

「私の名はパンテーラ。その少女、強い愛に塗れた質問をありがとう。私も愛を持つて礼をしよう!」

そうパンテーラが叫ぶと彼の姿は消え気付けば四人の体は吹き飛ばされ兵士達は致命傷、あるいは死亡していた。

「フハハハハハッ!これが愛の力だッ!…我が第七波動夢幻鏡<sup>ミラ</sup>:愛おしい能力だろう?」

「貴様:愛をそんな風に喋るな!」「貴方の言うそれは愛じゃないッ!」

二人は叫びながらパンテーラに走って行った。

「少女の愛への執着、なんと美しい事かッ!受け取ってばかりでは申し訳ないッ!私からも心からの愛をッ!」



（止めるッ！これ以上犠牲者を増やさない為にもッ！コイツの狂った愛をッ！）  
そう思いながら立花は走っていた。だが次の瞬間立花の視界は逆さになった。

「何コレッ!?!」

「私の愛は天地をも覆すッ！無限の愛ッ!」

立花の叫びに答えるようにパンテラが何処かから叫ぶ。気付けば目の前に居た筈のパンテラが居なくなっていた。

「何処だッ!?!…なッ!?!」

辺りを見渡すと翼と立花は複数人のパンテラに囲まれていた。

「少女の愛…私に届くかい?」

「無理やりにでも届けて見せるッ!」

二人はパンテラの群れに攻撃をした、だが斬っても殴っても姿が何処かに行くだけで数は一向に減らない。

「時間切れだ…受け取ってくれ!これぞ、愛・絶技ッ!!」

パンテラの叫びが聞こえたと思ったら周りのパンテラは全て爆ぜ二人のシンフォギアは解除されていた。

——

「大丈夫か!？」

GVとジーノが駆け寄って来て二人を比較的安全な場所に移しパンテラの前に立つ。

「おやあ…?これは何とも美しい少年達だ…君達も私の愛を受け取ってくれるのかい?」

そこまで喋った所でジェット音が響いてきた。

「何だ…これ?」「これは一体何だい?サプライズプレゼントかい?」

三人は動揺していたがしばらくすると赤い大きなミサイルの姿が見え、有り得ない光景も見えた。

「ヒヤッハー!アタシ様のお通りだア!」「……………」

ミサイルの上に少女と少年が乗っているという光景が。

## 対立

「フフフ…今日は皆が私を愛してくれる。…愛で死んでしまいそうだよ。」

一直線に向かつて来るミサイルを見てもパンテラーは笑っている。

「気持ちワリイ事言ってるんじゃないねーっ！」

少女の叫びが聞こえた直後器用にパンテラーだけにミサイルが直撃し周囲に炎が燃え広がった。

「この愛は…実に大きく…愛おしい…。」

「能力者発見、討滅する。」「愛愛ってうるせえんだよ！」

空間から出てきたパンテラーを二人のレーザーと銃撃が迎え撃つ。

だがその攻撃も避けられ先の二人と同じように二人は大量のパンテラーの囲まれていた。

「さあ、受け取ってくれ！私の愛を！」

「言葉と行動が矛盾してんだよおおっ！」「バケモノ共が…失せろ…」

パンテラーを撃ち抜いていくがその数は減らない。

「クソツ！どーゆー原理だコレエツ!?……………ん？」

撃ち抜いていく途中で雪音は見逃さなかった、一か所だけ銃弾が弾かれているという事に。

「そこかあああつ！」

雪音はその一か所に小型ミサイルを大量に打ち込む。その瞬間周囲のパンテーラが全て消えた。

しばらくして打ち込んだ場所から拍手が響く。

「お見事だ、少女。私の愛を見破ったのは君が初めてだよ。」

「そこか！試作品の実験台になってもらうぞ！」

アキキュラがパンテーラを無視し弾丸を打ち込む。

「ガアツ!?…しつこい程の愛をありがとう…だが君はしつこい奴は嫌われるというのを知らないのかね？」

「お前達を討滅するまではどれだけでもしつこく追いかけて回してやる。」

アキキュラは冷たく言い放ち、それを聴いたパンテーラはアキキュラを睨む。

「ならば私も殺してしまうような愛を返さなければね………ッ!」

「どうした？お前の愛はそんなモノか？」

何もしてこないパンテーラをアキキュラが挑発する。

「少年、弾丸に何か仕込んだね…そしておそらくそれはカレラの能力因子…驚いた、降参

だ。」

そう言うとパンテラは両膝を地面に着け両手を上げた。それを見てアキュラはパンテラに近づく。

「やれやれ…一件落着だな……………なッ!？」

パンテラを倒し一息ついていた雪音だったがアキュラを見て目を見開く。

「召されよ能力者…神の御許へ」

そう呟くとアキュラは片手銃をパンテラの頭に押し付けていた。

「何やってんだ!？」

雪音は叫び片手銃を器用に撃ち抜き、弾き飛ばす。

「バケモノを…人ならざるモノを殺しているのだ。見て分らなかったのか?」

アキュラは鬼のような形相で雪音を見る。

「テメエ…そいつだつて人間だ!殺なくたっていいだろ!?!見ての通りソイツは降参した!なら拘束とかそんなんでいいだろ!？」

雪音はアキュラに向かって叫ぶがアキュラは未だに雪音を睨んでいた。

「違う!コイツは…コイツ等はバケモノだ!第七波動能力者…コイツらの存在が俺達人間を脅かすんだ!」

そう叫ぶとアキュラは盾を構え雪音に向けた。

「しかしお前は…人の身でありながらシンフォギアという力を使い俺に協力してくれた。…人間は殺したくない、その銃を下げてください。」

アキュラは雪音に頼む。だが雪音は息を荒げながら歯をガチガチ言わせているだけで銃は下げなかった。

「ふざけんな…」

「何？」

小さく呟いた雪音に対しアキュラが聞き返す。

「ふざけんなって言ってるんだよ！お前な、セブンスが無ければ何でもいいのか!?どんな事をしてでも能力者を殺せればいいのか!?第一何が「バケモノ」だ！そいつらだって能力があるだけの人間だ！なんで殺そうとするんだよ!?!」

雪音は一気に叫んだ。それを聴いたアキュラは肩を震わせ盾を地面に打ち付け怒り狂っていた。

「貴様ア！俺達人間の事も知らない癖によくもぬけぬけとオ！…貴様を敵と見なす。死ぬ、バケモノに味方するモノよ。」

「ああ、そうかよ！だったら知らねえ事全部喋ってくれらるまで伸ばしてやらあ！」

二人は叫びアキュラは盾を、雪音はガトリングを構え向かって行った。

「雪音！」「クリスちゃん！」

だが二人の少女の声が雪音を立ち止まらせ退かせた。

「先輩……それに……」

「何をやってている？雪音!!」「翼さん!？」

呆けている雪音の頬を翼が叩く。

「……いつものお前らしくないぞ、雪音。少しは頭を冷やせ。」

「……すまねえ、先輩。血が登ってた。……ありがとう。」

翼は雪音を優しく諭し雪音もそれに応える。

「ねえ、盾を降ろして！私はあなたと戦いたくない！」

「お前はあの時の……だがこの状況はいささか不利だ、撤退する。」

アキキュラはそう呟くと片手銃を拾い、盾からワームホールを打ち出し中に入っていた。

「アキキュラ……クソツッ！」

雪音は地面に拳を打ち付けた。

こうしてフェザー戦闘部隊殲滅作戦を失敗に終わりパンテラは捕らえられた。

## 合流

フェザー本部にて――

「君も彼女達と同じ並行世界からの人間でありSONG所属の人間か……。頼む、我々フェザーに協力してはくれないだろうか？」

アシモフは指令室で雪音に手を出し、握手を待っていた。

「ああ……問題ない、むしろアタシから頼みたいくらいだ……ありがとう、よろしく頼む。」  
雪音もアシモフに応え手を握った。

「そういう事だ……。GV、彼女を隠れ家に入れてやってくれないだろうか？」  
アシモフは傍で聞いていたGVに訊く。

「問題ないよ、部屋もまだナントカ残ってるし。」

GVは静かに答えた。

「そうか、ならば彼女を頼む。彼女らにもよろしく伝えておいてくれ。」  
こうして雪音はGVらと一緒に住む事になった。

隠れ家にて――



「……………」

「あ、あのー…クリスちゃん…?」

「うるせえバカ!今考え事してんだよ!」

隠れ家に怒声が響いた。

「はあ…今回も中々の曲者だね…。SONGつてのはそんな人達ばかりなの?」

「失敬な!雪音も立花も、他のみんなも皆普通だ。」

GVがぼやいていると翼がツツコミを入れた。

「…雪音…アキュラ、だったか?彼の所で何があつたんだ?」

翼は雪音に近づき話しかけた。

「せ、先輩…やっぱ話しいた方がいいか…。」

「あれ?私の時と何か違うくない?」

眩いた立花の頭に拳がぶつかった。

「スウ…ハア…じゃ今から程々に大事な話をするから耳かっぽじって聞いてくれ。」

…あれはこの世界に来たばかりの頃だ…アタシはビル街の屋上で目覚めたんだが…

そこで奴…アキュラに見つかり、アキュラを見つけたんだ。」

「アキュラ…つてあの白い盾の子?」

「そうだ…アタシは奴と戦い、そして負けた。…まあ正確には奴らなんだけどな…。」

.....  
「そんな事があったのか……」

翼は口をポカンと開けたまま驚いていた。

「ツバサ、口開いてるよ。」

「おっと、すまない。」

G Vが注意し翼がすぐに口を閉じる。

「……ただ、アイツ等にも悪い所ばかりじゃなかった……。それにまだちっこいミチルっていう奴がいるんだ……アイツはアキュラを慕ってる……きつとアイツが死ねばミチルは悲しむ、だから頼む！アキュラは邪魔になっても殺さないでくれ！」

雪音はG Vらに懇願する。

「大丈夫だよ、ボク自体殺すのは好きじゃない。それに今はシアンやみんなが居る、殺しちゃいけないんだ……あの子の為にも。だから……殺さない。」

「そうか……！ありがとう……」

雪音は目に涙を浮かべながら感謝の言葉を述べる。

「さ、そろそろ寝るよ。もう夜も遅い。」

「そうだな。アタシは何処で寝ればいい？」

「……この部屋で寝るといい……おやすみ。」

「ああ……！」

その夜はクリスが久しぶりに安眠できた夜だった。

ちなみにG Vは腰を痛めた

夜だった。

何処かの施設にて————

「紫電様……カレラ様に続きパンテラ様がやられたとの報告が……」

部屋に男のおどおどした声が端末を通して聞こえたと思いきや少年の静かな笑いが部屋に響く。

「ふう……そうか。ところでこの間確保したという未確認生物はどうなっている？」

「攻撃は無力化、触れれば灰となるあの化物の件ですか。現在は紫電様のお力によりこの偽造地下施設にて管理しております。」

「そうか。ならばその化物、近日中に回収してもいいかい？」

「ハッ！承知いたしました。紫電様のご訪問、お待ちしております。」

「ありがとう。最後の一つ、警戒を怠らないでくださいね。」  
そこで通信は切れた。

## 皇神保有地下施設偵察任務（上）

深夜・スメラギ保有の施設付近にて――

「ただの倉庫にしては随分と警備が多いね……」

「やはりきな臭いな……」

「クリスちゃん、大丈夫？」

「だっただ大丈夫に決まってるが！ ゆっゆっゆーレイなんてよお！」

「みんな、行くよ。」

一行は皇神が保有している倉庫の潜入調査に来ていた。

時は遡りフェザー戦闘部隊殲滅作戦から約一週間後の昼……

G Vの端末に電話が掛かった。

「もしもし？ ジーノ、今回は何？」

「よう、G V！ すまねえが今回も依頼だ。今回の依頼は皇神が管理している〃とある倉庫の潜入調査〃だ。」

G Vはその事を聞き静かに端末の音量を上げる。それを感じ取った三人は静かに二

人の会話を聞く。

「ちよいとクサイ話があつて事前に調べてみたんだが……この倉庫、地下にだだっ広い空間が広がってやがんのよ。勿論オフィシャルには存在しない事になってるけどな。」

それとだ。そこに結構前に結構な大部隊とスメラギのボス、紫電が入つて行つた記録がある。ただの倉庫にボスが入つていくなんておかしな話だろ？ コイツは何か隠してるに違え無え。

今回の依頼、引き受けてくれるか？」

そこまで聴いた所でGVは三人を見て三人共OKの目をしていたのでジーンに了承の返事をする。

「大丈夫だよ、ジーン。その依頼、引き受けるよ。」

「サンキュー！GV。……あ、そうだ。どうでもいいけどよ、その倉庫、出るんだとよ。」  
「出る？」

GVが聞き返す。

「ユーレイだよ。ま、噂だけだよ。」

「いつからフェザーはゴーストバスターになったんだい？」

「ニヒヒツ。ユーレイ見かけたら教えてくれよな！じゃ。」

そこで通話が切れた。

「……ワツ!」「ひいひいっ!!」

声がしたので振り返ってみると立花が雪音を驚かしていた。

「バカ!やめろよ、そーゆうの!」

「痛いよー!クリスちゃん!謝るからー!」

「ハア…先が思いやられる…。」

翼が溜息をついていた。

現在――

しばらく進むとジーノから通信が掛かった。

「その部屋から地下に行ける筈だ…ちよつと待つてな。…ポチつとな。」

ジーノからその言葉が聞こえた瞬間部屋に轟音が響き穴が開く。

「!?!」「うわあつ!」「!?!」「うひいっ!」

四人が選り取り見取りな反応をしているとジーノが話した。

「いやあ…事前調査の時にちよつと爆弾をな。ニヒツ。さ、そこから地下空間に行ける筈だ。急いで飛び込んでくれ!」

「もつと穏便な方法は無かったの?」「バンジー!」「…。」「ひゃああああああつ!」

「いいだろ?手っ取り早くて。」

四人が十人十色な反応をしながら飛び込んでいるにも関わらずジーノは呑気に笑っている。

.....

「オー……ぶじ……でき……よ……だな……」

真つ暗な空間に着地するとジーノから途切れ途切れな通信が聞こえた。

「ジーノ？……ジーノ……駄目だ、通信が途切れた。」

「クリスちゃん？」「ひいひい……」「何も見えない……」

「ハア……ボクが周囲を照らす。警備が来ないうちに調査を終えるよ。」

「そっそうだな！早くこんな所オサラバしようぜ！」

GVが三人に話しかけると雪音は早口で応えた。

三人はGVの明かりを頼りに空間を進んで行った。

—————

「にしてもGVさん凄いですね……一家に一人GVさんって感じですね。」

雪音に抱きつかれてうざったく思っているGVに立花は冗談っぽく言った。

「……………そうだね。」

GVは静かに答えた。

「さすがに今のは少し失礼だぞ、立花。」



翼は立花の肩を掴みつつ注意した。

「あつ：す、すいません。GVさん。」

「いいよ、別に。」

GVはそっけなく返した。

(にしても翼さんいきなり肩を掴むなんて大胆になったなー)

立花はそんな事を考えつつ後ろを振り返ると

肩を掴んでいる肉が腐った「ツバサ」が居た。いや、翼自体は隣に居た。

「敵ッ!?!」

「何処ッ!?!」「何ッ!?!」「出てこいクソつたれエ!」

立花が叫びつつ「敵」を殴り飛ばした瞬間三人は立花の方向見て、否、周囲を見て驚愕していた。

「囲まれていたみたいだね。」「迂闊だった。」「腐肉共が!?!」

周囲は暗くよく見えないが、何かの腐った臭いと生き物の吐息がそこから漂っていた。

「コイツらは一体!？」

「さあ、でも敵という事は確かだよ。」

GVがそう呟いた時には4人は人型の「敵」に攻撃し、撃退していた。

「これは一体……？」

「人体実験の被害者……だろうね。」

立花が訊きGVが返す。二人の会話を聞いて雪音はまた震え始めた。

「静かになつた?……誰か……居るんですか?」

暗闇の奥から一人の女性の声が響いた。その方向をよく見てみると一つの人影が震えているのが見えた。

「大丈夫!？」

立花は女性に駆け寄り無事を確認した。

「スメラギの人じゃ……無いんですか?」

女性が恐る恐る訊く。

「ボク達は……何でも屋みたいなものですよ。」

「わ……私……スメラギの人達に捕まって……気付いたらこんな所で……ううっ……。」

女性は怯えながら話す。

「コイツを早くここから出してあげようぜ。」

「そ…それなら…この奥に外に出れそうな通路が…でも先が見えなくて…」

雪音の言葉を聞き女性は一先を指差しながら話す。

「よし、早くそこから脱出しよう。G V、頼む。」

G Vらは女性を連れ通路の先に向かって行った。

## 皇神保有地下施設偵察任務（中）

五人は暗闇を歩く、ひたすら歩く。ほんの少し見えている光を目標にただ歩く。

「ハア…ハア…」

ただ、進めば進む程女性「エリーゼ」の歩く速度は遅く、容体は悪くなつて行く。「大丈夫ですか？エリーゼさん。おぶりましようか？」

「だ、大丈夫です…すみません…。」

だが進めば進むほど彼女の容体は悪くなり遂にはしやがみ込んでしまった。

「うう…あ…ああ…頭が…頭が痛い…！」

「大丈夫ですか!？」

「クソツッ！私が担ぐ！私の機動力ならば…！」

翼は彼女を担ごうとしたが目の前の光景を見て足を止め言葉を止めた。

「そ…そうよ…。この先の部屋は…！」

彼女は立ち上がりふらつきながら、しかし確固たる意志を持って歩いていった。

「おい!?!何やってんだよ!！」

「触るな!！」

雪音は心配してエリーゼの肩を掴んだ、だが彼女は手を払い除け雪音を睨みつけた。  
「待って！」

GVはエリーゼを呼んだ、だが彼女は声を聞かず走り出してしまった。

「クソッ！追うぞ！」

「うん。」「うん！」「了解！」

四人は彼女を追って走り出した。

「……………」

しばらく走った所にある明るく、広い部屋で彼女は静かに目の前の巨大な装置を見つめていた。

「エリーゼ……さん？」

立花はエリーゼに声を掛けた。

「思い……出した！」

彼女は立花らを見ず静かに呟いた。

「[[[[?]]]]」

四人はエリーゼの様子が普通の要因のせいではない事を感じていた。

「私……アタシはア……！」

彼女は静かに眩くと宝剣を取り出し黒いモヤに包まれ装甲を身に纏った。

だがモヤの先に居たのは一人では無かった。

「ふう…やつと出られたわあ…ちよつとアンタ！何記憶失くしちゃってるのよ！」

一人はもう一人の女性を怒鳴り睨みつけた。

「あうう…ごめんなさい…。」

もう一人の女性は静かに涙ぐみながら女性に謝った。

「その姿…スメラギつてえトコの能力者みてえだな？」

雪音が二人に向かって叫ぶ。

「そう…アタシは…『アタシ達』は『エリーゼ』。アタシは使えないその子に代わってア

イツらの言いなりになるよう造られた別人格。」

エリーゼは立花らに向かって自己紹介をする。

「別人格がセブンスを媒介にして実体化しているとも言えるのか？」

「ここに居た他のヤロー共はどうしたんだ？」

雪音がエリーゼに向かって言う。

「…あらア？途中で見なかったかしら？連中の成れの果てー生ける屍を。」

「じゃあアイツらは…。」

立花はエリーゼの言葉を聞き青ざめた表情で眩く。

「『絶対の死』すら覆すこの力……フフ……スメラギも欲しがる訳よね。だ・か・ら、叶えてあげたの……アイツ等の願いを……ああいう形でね！」

エリーゼがそう叫ぶとエリーゼ達は器用に近くに立っているポールのようなものに飛びつき器用に掴まった。

「さあ、アンタ達も一度殺してアタシの玩具にしてあげるわ！」

エリーゼが叫び終わると同時にエリーゼ達はクナイのような物をGVらに投げつけた。

「やめて！手を取り合える方法がきつとある筈！だから……！」

「嫌よ。アタシはただこの力を使いたいだけ、だってそれがアタシが造られた理由<sup>イミ</sup>だもの。」

立花は叫ぶがエリーゼは笑いながら残酷に返答する。

「あうう……すみません……すみません……」

「貴女も何故！」

「フフフ……無駄よ。その子はアタシの言いなり。」

立花はエリーゼに叫ぶがエリーゼが割り込んで返答する。

「その子はねえ……とつても弱い。自分じゃ何にも出来ない……。だから虐げられてきた。だから！アタシが代わりにやるの。その子が出来ない事……全部！その子はアタシ

の言う事さえ聞いていればいいの。」

「……………」

エリーゼはエリーゼの言葉を聞いてさらに攻撃を激化させる。

「貴様！使えない、何も出来ないなどと言って彼女を従えているが彼女は本当にそれを見て望んでいるのか?! 本当は嫌がっているんじゃないのか?!」

翼はクナイを剣で弾きながらエリーゼに叫ぶ。

「フフフ…その子つたら代わりに苦しい事を受けてくれる存在が出来たと知った途端アタシに従ったわ！彼女は自分の意志でアタシに従っているのよ！」

「うう……………」

「フフ…見てなさい。アンタ達をゾンビにしたら地上の奴らもみんなゾンビにしてあげる。誰もがみんな、化け物になるのよ。そうならばもう誰もアタシ達の事を化け物だなんて呼ばなくなる…。」

死という安らぎに満ちた世界でアタシ達は女王クイーンになるの!」

「ううう……………」

エリーゼは叫びエリーゼは力なく唸った。

「やめろ！無駄に争う気は無い！」

「あははははは!!無駄、無駄！アタシ達はもう止まらない！止められない！」



GVも叫ぶがエリーゼの耳には届かなかった。

「だあああ！さつきからちよつせえ事、うだうだうだウツセエんだよ！」

皆が諦めかけていたその時雪音がクナイを撃ち抜きながら叫んだ。

「…アタシは孤児になった時もあった、だから虐げられた時の気持ちは分かる。アタシは大きな力を手に入れた時もあった、だから利用されて、従わされて、恐怖に怯えて、怒りに燃えた。だからアンタの今の気持ちも分かる。」

「何を言い出すかと思えば…：だったら分かるでしょう!?その子の気持ちが！」

「だけどなー！」

エリーゼの叫びを掻き消し叫んだ。

「だけどな、そういう風に力に溺れて、弱い奴らを踏みにじつて、そんな大きな欲望を持つたらお前はきつと死ぬっていうのは知ってる。実際アタシもそうなりかけた。」

「なっ、何を…。」

「アタシはお前らみたいに力だけで欲望を、間違った方法で夢を叶えようとしたし、そんな奴を見ていた。だが…その結果は破滅だった。アタシは死ぬ所だった、だが仲間が…アイツらが止めてくれた。だからアタシは踏みとどまって、生きる事が出来たし正しい方法で夢へ向かっていける。」

……アタシはあんたらにそんな悲惨な結末は迎えて欲しくない、だからアタシがアン

「タラを止めてやる！」

雪音は大量の銃火器を、エリーゼは大量のクナイを持ち戦い始めた。

## 皇神保有地下施設偵察任務（下）

「があっ……ああ……」

「エリーゼ3」は壁に打ち付けられ呻いていた。

「来いよ……まだ力余ってんだろ？」

雪音はエリーゼ3にハンドサインをしつつ挑発する。

「このヤロオツッ！」

「ウラアーツ！」

エリーゼ3はクナイを投げつつ突進するが雪音の銃火器には勝てずあえなく轟沈する。

「ぐあーっ！」

「ツ！ごめんなさい……ごめんなさい……」

エリーゼ3が吹き飛ばされたのを見て「エリーゼ1」が慌ててエリーゼ3を蘇生する。

「ハッ！」

目覚めた途端に頭にゴリツという嫌な音がする。

「ヒツ……」

「降参ですって言え！…それとももう一回閻魔様に挨拶してくるかア？」  
「こ…降参です…。」

エリーゼは頭に突き付けられた銃に怯えながら小さく呟く。

「何イ？声が小さくて聞こえ無えなあ？…もつかい言ってみろオ！」

「許してください！もう嫌！何でもするから許して！」

「…言ったな？信じるからな？嘘ついたらまたさっきのを繰り返すぞ？」

エリーゼの言葉を聴き雪音は静かに銃を頭から離した。

「ああつ…。」

直後、安心感からかエリーゼの体は倒れ静かに瞼を閉じた。

「ハア…ようやく落ち着いてくれたか…。」

「雪音、どうやらそっちも終わったようだな。」

翼が一息ついていてる雪音に声を掛ける。

「先輩？そっちもって事は…。」

「ああ、彼女もようやく落ち着いてくれてな。クナイが蛇に変化した時は驚いたが何か人数で抑え込めた。」

「…まるでリンチつすね。」

「フツ。雪音のそれは拷問に見えたぞ？爆音で声を掻き消したり殴って言葉を発させな

いとは雪音もやるな！」

「……………ハツハツハツハツ！」

「ヒイツ！」

二人の笑い声を聞いてエリーゼーは小さく悲鳴を漏らす。

「大丈夫だよ、エリーゼさん。もう殴らないから…。」

「そ…そうですか…。」

エリーゼーは立花から目を逸らしつつ小さく答えた。

「二人共、二人を連れて本部へ帰るよ。スメラギの部隊が来てもおかしくない時間だ、急

ぎょう。」

「うん！」「分かった。」「リョーカイ。」

G Vの言葉を聞き三人はG Vと共にエリーゼをおぶったり引きずったりしつつ地下

施設を脱出した。

—————

時は遡り…

「やあつ！」「はあつ！」

エリーゼらは掛け声と共にクナイを一行目掛けて投げる。

「無駄だツ！」「フツ！」「せいっ！」「ハアツ！」

雪音、立花、翼は自らの得物でクナイを弾き飛ばしGVは雷撃鱗でクナイを焼き切った。

「これで終わりと思わないでツ！」

エリーゼが叫ぶとクナイが蛇の形に変化し一行に襲い掛かった。

「こんなチマツこいもんで勝てるって思ってたのかア?!」

だが雪音は全てガトリング砲で撃ち殺してしまった。

「これで終わりだ！」

そう叫ぶとショットガンを取り出しエリーゼ3の四肢を撃った。

「アガツ!？」

「もうお前は立てない、戦う事も出来ない。降参を…!？」

雪音はエリーゼ3に対して降参するよう促したが次の瞬間目の前の光景に驚愕した。

「甘い…甘いわね…ハアツ！」

エリーゼは立ち上がりまたクナイを投げようとしていた。足からの出血は止まり肉はみるみるうちに元に戻っていった。

「クソツ、だつたらあ！」

「ガハアツ!？」

雪音はミサイルをエリーゼ3に向けて発射して大量の血液が飛び散ったのを確認した。

「これなら…なあッ!?!」

「フッフ…無駄よ。」

エリーゼは笑いつつ雪音に鞭で攻撃しようとしていた。大量の血液が流出し肉体がボロボロになっているのにも関わらずに。

「チツクシヨー!!」

雪音は叫び、大量の手榴弾を取り出した。

…

「…もう…やめて…許して…」

エリーゼ3は力なく話す。

だがその声も爆音に掻き消されてしまう。

「エリーゼー! もう蘇生をやゴファッ!?!」

「これでもか? これでもか!?!」

雪音はうんざりしたようにエリーゼ3を殴る。エリーゼの必死の叫びはエリーゼ1には届かなかった。

「もうやめて…。」

そして現在に戻る…。

—————

G Vらの脱出から数時間後…

「チツ…彼女はもう連れ去られたか…。」

少年は舌打ちをしつつ荒れた部屋を見る。

少年はしばらく歩き一つの嚴重の扉に守られた部屋に辿り着く。紫電が扉の前に立つと扉はそれに応え開く。

少年は部屋に入り一つのポッドを見てにやりと笑う。

「彼らに壊されなくてよかった…僕の計画の大事な駒が壊されては困る。」

紫電はポッドごと「駒」を浮かせ部屋を出る。

「コイツの力を…彼で試させてもらおう。」

少年は笑顔とポッドを浮かべつつ施設を出た。



## 帰還

GVの隠れ家にてー

「ただいまー!」

「お帰りなさい!」「お帰り。」

立花は扉を勢いよく開け挨拶をする。シアンとモルフオがそれに応える。

「バカ!大きな声出すな!…隠れ家がバレちまう。」

雪音が立花を殴りつつ注意する。

「はあ…雪音も大きな声を出しては意味が無いぞ。」

「さ、さーせん…。」

翼に注意され二人ともしゅんと分かりやすく落ち込んだ。

「三人共、玄関ですつと立つてるつもりかい?ボクも入りたんだけど…。」

「あ、ごめんなさい。」「おお、すまねえ。」

GVが咭くと二人は図ったように同時に返事をして家に入った。

「ふう………それにしてもシアン、ずつと起きていたのかい?」

「あつ……、ごめんなさい…。」

GVはシアンに訊くとシアンは小さく謝った。

「ごめんなさい、GV。アタシも止めようとしたんだけど、この子ったらGVをお出迎えするって聞かなくて…。」

「モルフオ?!言わないでって言ったのに!」

シアンは勝手に秘密を喋ったモルフオに怒鳴る。

「はあ…みんな無事に帰ってきたし取り敢えず寝よう?」

「う、うん…。」

GVの提案に賛成しシアンは自分の部屋に戻ろうとする、が振り返りGVに話しかけた。

「じ、GV…。」

「ん?」

「その…一人だと寂しくて…。一緒に寝てもいい?」

「…うん、いいよ。」

GVの返事が聞こえた瞬間様々な場所から三人が飛び出して来てGVの取り囲む。

「GV…分かっているとは思いますが…シアンに手を出してみろ、ただではおかんぞ。」

翼は背後から耳元に静かに、厳かに言った。

「分かっているよな?何かしてみろ、ぶっ殺す。」

雪音は正面から睨みつけつつ殺意を醸し出しつつ言う。

「さすがにGVさんも分かっていますよ。ね？分かってますよね？」

立花は殺意を込めた笑顔でGVに訊く。

「わ、分かっているさ。さすがにそんな事しないよ。」

GVが驚きつつ話すと三人は途端に元に戻り各々の部屋に入っていた。

「そうか。ではおやすみなさい。」

「ならいーんだ。おやすみ。」

「そうですか！じゃあ、おやすみなさい！」

「ハア……さて、寝ようか。」

「う、うん。」

一行は眠りに就いた。

—————

「……眠れない。」

GVはうんざりしたように呟いた。

「……………」

隣で寝息を立てているシアンを起こさないように静かにベッドを抜け出す。

「銃の手入れでもするか…。」

G Vは静かにダートリーダーと工具箱を取り部屋を出た。

…

G Vは唾然としていた。

立花、翼、雪音の三人が途轍もない表情で端末を睨んでいた。小さく話したりしていた。

「…何してるの？」

G Vが小さく訊くと三人は肩を飛び上がらせ驚いた。

「ね、眠れなくてな…。」

「そ、そうそう。たまたま三人共眠れなくてな…たまたま…。」

「任務の緊張がほぐれてないのかな？ははは…。」

三人はそれぞれ言い訳をする。

「はあ…ボクも眠れないし、今回は許すよ。」

「そ、そうか…。」

G Vは机に向かいつつ三人に言う。三人の顔がすこし緩んだ。

…

「…そうだ、G Vさん。」

「何？」

立花は突然GVに話しかけた。

「GVさんってあんまり子供の頃の話をしないですよ。ちよつと不思議だなーって。」  
「確かにGVが話したことはあまり無いな…どうしてだ？」

「……三人には話しておくべきなのかもね…。」

GVは振り返りいつもは見せない鋭い目つきで話し始めた。

自身がスメラギの被検体であり実験体であったこと。

アシモフに救われ彼のように他の能力者を助けるようになったこと。

その途中人を殺めた事もあったこと。

その壮絶な物語を聴いて三人はただ呆然とすることしか出来なかった。

「ボクが話せる事はこんなことかな…。」

「そんな事がGVさんにあったなんて…。」

「……夜中にする話じゃなかったね、ごめん。…ボクはもう寝るよ、おやすみ。」

GVはそう言い残すと自身の部屋に戻っていった。

「……アタシも寝るよ…おやすみ。」

「私もそうさせてもらおう…おやすみ。」

「うん………私も寝よつと、おやすみなさい。」

一行はようやく眠りに就いた

## 薬理研究所襲撃任務（上）

地下施設偵察任務から数日——

「ん？……モニカさんからだ、珍しい。」

G Vの端末に一通のメールが届いた。

「こんにちは、G V。みんなとは仲良くやってる？それで……今回も依頼なのだけ……。あなたには皇神の薬理研究所で培養されている花を駆除して欲しいの。その花から採れる成分……スメラギはS・E・E・D。とも呼んでいるわ。それそのものは抗ストレス剤なんかに使われたりするのだけれど……製法次第では第七波動を強化する他に、強い副作用をもたらすこともあるの。……秘密裏にスメラギはS・E・E・D。を能力者の制御に使用しているみたい。……この依頼、受けてくれる？」

「……だそうだけれど？どうする？」

「んなもん決まってるんだろ？トージェンYESだ。」

「私も雪音に同意だ。」

「行きましよう！」

「了解、メールは送っておくよ。」

翌日深夜――

「こちらGV、施設内への侵入に成功しました。」

GVは静かに物陰からモニカへ通信を送る。

「了解、その先にターゲットの花が培養されている筈よ。急いでね。」

「りよーかい、ミサイルで…と聞いてえが…狭いな。地道に歩いて進むしか無えか。」

雪音は残念そうに呟く。

「にしても…随分と明るいね…寝れなくなっちゃいそう。」

立花が目パチパチさせながら話す。

「急いで駆け抜けるぞ。」

…

「うわあっ?!何コレッ!」

立花は目の前の歪な植物を覗いて叫ぶ

「触手…実験植物の一種か…。」

「どうも貴方の雷撃に反応するようね…触手…ジーノが喜びそうなトラップだわ…。」

「モニカ、そういうのはやめて頂きたい。」

モニカの発言に翼が厳しく言い放つ。

「…え?あ、ち、違うのよ!?!…ジーノがいつも変な事ばっかり言ってるから…。」



「はあ…モニカ…そりゃ無えよ…。」

モニカが焦って話したのを聞いて雪音は悲しそうに呟いた。その後小さくモニカの泣き声が聞こえた。

・  
・  
・

「その奥に、ターゲットが培養されているわ。駆除して。」

モニカの指示を受け一行が扉の先に進むとそこには様々な機械を巻き込んだ巨大な植物が立っていた。

「これがターゲット？まるで怪物じゃないか。」

「資料と全然違うわ…成長したというの？実験コード“Vivid”…まさかこんな姿になっているなんて…。」

「早急に切り倒す！一刀両断！」

翼はモニカの説明を待たず茎からVividを切り倒してしまった。が…

「んだコレエ!?再生してるっていうのか!？」

斬った所から茎が伸び葉が出て蕾を作ってしまった。

「資料通りならその花の弱点は花卉に守られた雌しべ…」

「だつたらあああああ！」

「おい!?バカ!こんな狭い所でそんなことしたら…!」

立花はモニカの言葉を聴くやいなや花の蕾に思いつきりパンチを当て貫いてしまった。

「ヨシッ！…ん？…ああっ?!」

「まずい！ボクの傍へ来い！雷撃鱗で防ぐ！」

立花のパンチは天井にまで当たり大量の瓦礫を降らせた。が、GVの機転により一行はほぼ無傷でその場を切り抜けられた。

「ごほっごほっ！大丈夫！」

「お前なあ！…ああーッ！」

上から降ってきた立花を怒鳴ろうとして雪音は気付いた。

「どうした!?!…あっ…」

雪音の方向を見てGVも気付いた。

「扉が…壊れている…!」

パンチの衝撃か、瓦礫がぶつかったか、扉は瓦礫に塞がれわずかに見えた操作端末もエラーの表示を出していた。

「落ち着いて、奥に進む事になるけどもう一つ扉があるわ。そっちから脱出して。」

モニカが慌てて叫ぶ。実際探せば無事な扉がしつかりとあった。一行はそこから先へ進んだ。

「V i v i d がやられた！侵入者を捕らえるんだ！」

「了解！」

しばらく進んだ先では大量の兵士が一行を待ち構えていた。

「雑魚共がわらわらとオ！」

「せりゃああああ！」

が、一行にはいくら束になっても敵う筈も無くあつさりと無力化されてしまった。

施設奥部——

「クソっ！まだ侵入者は捕らえられないのか！援軍を要請しろ！」

部隊の隊長らしき男がイラついていた。

「隊長！実験中の被検体——ストラトスが暴走を！」

部下と思われる男が走って来て報告した。

「何だど!?早くS. E. E. D. を投与しろ!!」

男はマニュアルの通りに命令をした。

「そつそれが…調度ストックが尽きていて…ViViDがやられたせいで新しいモノも造れ…うわあっ!？」

報告の途中で部下の体が装備ごと崩れ血液一滴残さず消えてしまった。

「おい!? どうした!？」

「…腹が…減つてよオ…」

部下の代わりにやつれた男が質問に答えた。

「なっ!?!…お前…ストラトス!」

隊長はランチャーを構えながら叫んだ。

「お前らのニク…いたたくぜエ…」

男はそう話すと右手が消えそこから群れた何かが生まれた。

「やめろ…クソツ!」

隊長は馬頭混じりに群れに向けてランチャーを撃った。が、弾は爆発せず、破片が残りもなかった。そのまま群れは隊長の元へ向かった。

「嫌だ…やめろ…死にたくない! やめろおおお!!」

隊長は叫び、消えていた。

「まだ…食い足りねえなア…? 行くか。」

右手が戻った男は静かにそう言い放ち部屋から出て行った。

## 薬理研究所襲撃任務（下）

「ふう……結構あつけなかつたね。」

「まあ、四人も居るからね。」

二人は地面に散らばった気絶した兵士達を眺めながら呟いた。

「にしても随分と数が少くないか？」

「ここが連中にとつて需要じゃなかつたつて事じゃないか？」

翼が訊くが雪音が当然のように答えた。

「さて、早くここを出ちやおう！」

「そうだね……………ん？」

G Vは立花の提案に同意し走り出そうとした時に近づいてくる何かを見つけた。

「ありやあ……………人じゃねえか？随分と慌ててんな。」

「ただ慌てている訳ではないようだ。何かあつたのだろうか？」

「……………！」

人が近づいてくるにつれ声が聞こえて来た。

「助けてくれ！死にたくない！死に……！」

男の声が聞こえたと思えば彼の体は塵のように消え去ってしまった。

「どういう事だ!?何があった!」

「彼の体は消える直前…黒いモヤのようなモノが居たように見えた…まさかそれが原因か…!?」

「セーカイだあ…」

翼が叫びに男の声が答えた。

「あなたは…!?」

「ん…?…アンタから…漂ってくる…ニオイ…」

立花の問いを無視して男は呟いた。

「これはア…クヒヒヒヒツ!!」

「大丈夫ですか!」

立花は様子がおかしい男の元へと駆け寄り訊いた。

「何かヤバイ…!バカッ!そいつから離れる!」

「えっ?何を…」

「イタダク」

男はそう呟くと両腕を消しそこから“群れ”を生み出した。

「あつぶな!」

立花は雪音の注意もありなんとかそれを回避出来た。

「何だ!? 今のは…」

「恐らく彼のセブンスね、肉体を蠅のようなエネルギー体に変化させる能力だと思う。」

G Vの問いにモニカが通信を通して答える。

「ディナーが…飛び跳ねんじやア…ねエ…空腹に響くだろうがア…」

男は蠅を元に戻し両腕を生成し宝剣を呼び寄せた。

「ガアアアアア…」

男は唸り黒いモヤに包まれ装甲を身に纏った。

「ならよオ…腹を満たす為に…目の前のモノを食いまくるしか無いじゃないかア…なア!?」

男は狂ったように叫び大きな口のように変形した。

「まるで口のような…ハッ! 皆、跳べ!」

彼女が叫ぶと同時に四人は飛んだ。

「ガアアアアアッ!」

それと同時に口が地面を削り倒れていた兵士を皆捕食してしまった。

「そんな…みんなが…」

「アンタのその匂い…たまらないなア…腹の虫が腹の中で騒ぎまくって…五月蠅いんだ

よオ……」

元に戻った男は立花を見つめながら言った。

「バカを狙ってる……？ おいバカ！ 気を付けろよ！ ソイツはお前が旨そうに見えるらしい！」

「立花を援護しろ！」

「ヒヒッ……あアー腹が減ったア……！」

「何ッ!？」

翼は男に向かって走りでしたが男の出した大量の蠅に阻まれてしまう。

「まったく先輩はアタシが居ないと駄目だよなあ！」

雪音が蠅を火炎放射器で焼き払いながら叫んだ。

「雪音……！」

「いつものコンビネーション、決めますよ。」

「………承知！」

翼は自前の火遁で、雪音は火炎放射器で武装して男の方へ走って行った。

「熱すぎるディナーはダメなんだよオ……冷まさないとダメア!？」

男はそう叫ぶとさつき以上に蠅を出した。

「いくら蠅が出て来た所でえっ！」



「私達の前には無力！」

「ヒビキ！今の内に彼を！」

「了解！」

二人が蠅を抑えている内に二人は男に向かって走り出した。

「!?…グワアーツ！」

が感づいたのか男は地中に潜ってしまった。

「彼は何処に?!」

「………、ヒビキ！跳べっ！」

「フツ！」「ギヤアアアア！」

GVの指示通り響が跳ぶとそこに地中から飛び出してきた「口」がその場所を喰らった。

「ありがとうございます！GVさん。」

「どういたしまして、それよりもそつちを気にしたら？」

GVに言われ立花がGVのしている方向を見ると男が立花を睨みつけながらそれらに寄り掛かっていた。

「言っただろオ…デイナーが飛び回るなんてよオ…マナー違反もいい所じゃアないか…」

「何だ…？アレ。」

よく見てみるとそれらは透明な大きな卵だった。

「クヒヤヒヤヒヤア！」

男が叫ぶと卵が割れ中から大きな蠅が飛び出してきた。

「食らえッ！」

G Vは掛け声と共に発砲し蠅を電気で黒焦げにした。

「なア…：食わせてくれよオ…：一口でいいからよオ…：」

男は力なく呟いた後、多くの小さな口をG Vに向けて放った。

「くっ、数が多い！閃く雷光は反逆の導 轟く雷吼は血潮の証 貫く雷撃こそは万物の

理！VOLTIC CHAIN！」

G Vは叫び大量の鎖を口に巻き付け雷撃を放った。

「誰か…誰か…誰か、この空腹を…」

「ヒビキ！彼を止めるんだ！」

「はいっ！」

G Vは何かを察し叫んだ。立花はそれに応じ走った。

「止めてくれよオオオ!!!」

「なっ!?!」

だが立花は間に合わず男の呼び出した二つの巨大な口に囲まれてしまった。  
「くらいなア！」

男が叫ぶと同時に口が立花に襲い掛かった。

「ぐうああああッ！」

立花は必死に口を押さえたが少しずつ手の装甲が削れており彼女が危ないのは明白であった。

「立花アッ！」「バカ！」

蠅を退治し終わった二人が立花の元へ走っていたが間に合いそうな距離では無かった。

「クワセロツ！クワセロオオッ!!」

男はさらに口を力を入れ立花を喰らおうとした。その時に男は気付いた、立花の目が穏やかなモノになっている事に。

「…あなたがどんな人なのかは知らない、あなたがどんな事をされたのかも知らない。…けど、あなたが今している事は間違ってる。聴いて！私の絶唱を！」

G a t r a n d i s   b a b e l   z i g g u r a t   e d e n a l :

「彼女は歌っているのか…?」

G V は ぶ ら つ き な が ら 走 り つ つ 眩 いた。

「やめろ！そんな状態で絶唱を放ったら！」

翼は必死に叫んだ。

…Emustolorronzen fine el zizzl…

だが立花は叫びを聞かず最後まで歌い終えてしまった。

「クワセレアーツ!?!」

直後、立花を中心に渦が生まれ口と男を吹き飛ばした。

「ガアツ！」

その後男は壁にぶつかり気絶した。

「おい！大丈夫か!?!おい！」

雪音は手と口から血を流して立っている立花に叫んだ。

「な…なんとか…大丈夫…夫。」

立花はそう言ったがすぐに膝をついてしまった。

「ハア…なんとか今回は大丈夫だったが今後こんな無茶はするな、いいな？」

「すいません…」

翼の言葉に立花は苦笑いしながら答えた。

「ヒビキ…君は一体何を…?」

「そいつも後で話してやるからとりあえずアイツを捕らえようぜ。」

「あ、ああ…。」

雪音に質問をうやむやにされGVは男の手足に拘束具を着けた。

「ああ…確かに今夜は眠れなくなりそうだな…。」

立花を抱きかかえた翼が静かに呟いた。

こうして薬理研究所襲撃任務は終了した。

何処かの施設――

一人の少年が宝剣をもう一人の少年に渡していた。

「これにアイツの力が…?」

少年がポッドに入った怪物を指差しながら言った。

「そうです、キミにはそれを制御出来る力がある。その力で奴らを倒してください。」

少年は自信たっぷりの表情で言った。

「ふーん…報酬は?」

少年はテキトーに訊いた。

「シアンの生写真を…」

少年は真剣に言った。

「乗った！その仕事、やらせて貰うぜ。」

少年の言葉を聞いた少年は飛び上がりそうな勢いで返事をして部屋を出た。

## 幕間

隠れ家——

「ツバサ……ヒビキはあの時一体何をしたんだ？」

GVはシアンの子守りをしている立花を横目に翼に訊いた。

「あの時……あの男と戦った時か？」

翼は二人とじやれている雪音を見ながら聞き返した。

「そうだ、あの時君達はかなり焦った様子でヒビキに叫んでいた。…教えてくれ、彼女が何をしたのか。」

GVは真剣な目つきでしっかりと翼を見ながら言った。

「……やはり話すしかないか…。」

その様子を感じ取った翼はしっかりとGVを見ながら話し始めた。

「あれは絶唱と言って…ギアの出力を本人の状態を問わず引き上げる、言わば…諸刃の剣だ。」

「……それで負傷した者はいるのか？」

翼の言葉を聴いてGVは小さく訊いた。

「…私の親友が…死んだ。」

翼は顔を背けながら呟いた。

「…ツバサ。なるべく無茶はしないでくれ、危なくなったらすぐに逃げろ。君達が居なくなればボク達、特にシアンは悲しむ。頼むから生きてくれ。」

「GV…。」

「それにSONGでの仕事も残っているのだろうか？あつちの人達の為にも生きなきゃ。」

「分かった。」

「…あと…さつき言った事二人にも伝えてくれないかい？…今になって言うのもなんだからこれかなり恥ずかしいんだ。」

夜は更け一行は眠りに就いた。

ピピピピ…ピピピピ…

「ん…？もう朝か…。」

GVは眩き端末を見る。

「X月Y日Z曜日SUN AM6:00」



端末は薬理研究所への襲撃から数日経った事と起床時間である事を知らせていた。

「ふう…朝ごはん…作るか。」

GVは静かに体を起こそうとした…がいきなりの着信音に驚きガバアと音を立てて起きてしまった。端末を見てすぐに電話に出る。

「Good morning! GV! 良い反応速度だ!」

やけに陽気なアシモフの声が端末を通して聞こえて来た。

「おはよう、アシモフ。何かいい事でもあった?」

GVはうんざりしたように端末に話しかけた。

「いや、何もなかったが。取り敢えず大きな声を出しているだけだ。」

アシモフはつまらなさそうに言った。

「そう…で? 要件は何?」

GVは訊いた。

「今日の夕方、スメラギの工場施設への奇襲攻撃をお願いしたい。目標である工場施設の最深部こちらが用意する小型爆弾を仕掛けて欲しい。」

アシモフはこちらに資料を送りながら答えた。

「了解、にしても何でこんなに急に?」

GVはまた訊いた。

「なんでもその工場で新しい無人兵器が開発されているらしい。」

「邪魔になるから開発資料ごと吹き飛ばして欲しいって事?」

「Exactly.」

アシモフの答えに聞き返しましたアシモフが答えた。

「…施設内にはどうやって侵入すれば?」

「目標施設には、定期的に自動運転の列車によって燃料物資の搬入を行っている。その列車に乗り込めば施設内部まで侵入出来る筈だ。」

「了解、これで終わり?」

GVは電話を切っていいか指示を扇いだ。

「ああ…おっと、忘れていた。」

アシモフの言葉に一瞬切りかけたがなんとか指を止めた。

「何?」

「クリス…ユキネクリスに言っておいてくれ。連中はミサイルを警戒している。今回はミサイルで突撃するな、と。以上だ。」

アシモフはそう言い放ち電話を切った。

「うひゃー…ミサイル程じゃないけどこの世界の電車も中々速いねー…。」

響は先頭列車からの景色を楽しみながら呟いた。

「確かにはえーな…まるでジェットコースターだ。」

雪音も感心しながら笑った。

「にしてもやはり弱いな…。」

翼は列車に取り付いていた兵士をポイポイとコンテナの中に放り投げながら言った。

「むしろ、高速で移動する列車の上に立っていられる人がこれだけ居る時点で凄いなだけだな…。」

GVは呆れながら呟いた。

「今回の任務は早めに帰れそうだな！」

雪音は嬉しそうに言った。

「そうだな、仕事が早くに終わるのは嬉しい。」

翼も微笑みながら雪音の言葉に便乗した。

四人を乗せた列車は工場へ走って行く。四人と謡精を引き裂く死神が近づいている事は知らずに…

## 皇神保有工場攻略任務（上）

「あつちいんだよお！お前らがいるともつと暑くなるからとつとと倒れる！」

「心頭滅却すれば火もまた涼し…心頭滅却すれば火もまた涼し…。」

二人は熱気が漂っている工場の中でぼやきながら戦っていた。

「超スピードで新型兵器が開発されているんだらう、急ぐよ。」

「分かりましたッ！」

GVは敵を全員痺れさせてから走った。それに応え立花も走り出した。

「あつおい待てよ！…何でアイツらは平気なんだ？」

雪音は二人を追いかけつつ翼に問う。

「GVは私達とは少しだけ違うからな、そこら辺でカバーしているのだから。立花は…分からん。体が丈夫だからだろうか…？」

「ふーん…。」

雪音は翼の回答に素っ気なく返した。

・  
・  
・  
・

「…！…皆、止まれ。」

翼が何かを感じ取り三人に呼び掛けた。

「そこだね。」

GVは空間に弾丸を放った。が、弾丸は空中で弾かれ転がる。

「…我がアンブツシユを見抜くとは…ドーモ。アームドブルーIIサン。スメラギソルジャーです。」

空間から現れた数人の兵士が挨拶をする。

「何だ、コイツら？お前の知り合いかよ？」

雪音は親指を兵士に向けつつGVに訊く。

「ボクにこんな変な知り合いは居ない。」

GVは即答する。

「我がスゴイ・イアイドーでしめやかに爆発四散させる！」

兵士らはそう言い四人に襲い掛かった。

「あつぶな!?!せえい!」

「グワーツ！」

一番目に剣が届いたのは立花だったがあっさりと反撃され兵士は倒れた。

「「「「「イヤーツ！」」」」」

「「こつち来んじゃねえ！」」

「遅いッ！」

「フッ！」

「！！」「グワーツ！」「！！」

さらに大勢が他の三人に襲い掛かるが主に二人の銃火器の影響でかなりあっさりと倒れてしまった。

「ゴウランガ：ならばサイバネスパイダーを：サヨナラッ！」

倒れた一人がボタンを押しつつ高々と叫び倒れた。

すると奥から大きな機械が突進しつつこちらにレーザーを撃ってきた。

「せりやああああ！」

が、立花の反応速度と攻撃力の前には歯が立たずあっさりとスクラップになってしまった。

「…本当に何だったんだろう…」

誰かが呟いた。

・・・

「あそこに居るのは…」

立花は少年を指差しながら訊いた。

「スメラギの能力者だろうな。」

G Vが立花に答えた。

「そこを退け！能力者！」

「退くものかよ！フェザー！」

翼が叫ぶが即答される。

「テメエらが俺の管轄エリアに居るって訊いてよオ…爆速でカツ跳んで来たぜツ！テメエらが行くのはこの先の開発部屋じゃねえ…地獄だツ!!」

そう叫んだ後少年は宝剣を取り出しつつまた叫んだ。

「俺はデイトナ！愛しのシアンちゃんを奪ったテメエを、俺はゼツテー許さねえ…！」  
「シアンが…何だって？」

G Vが反応するが無視されデイトナは装甲を身に纏った。

「人の恋路を邪魔する奴ア…馬に蹴られてゴ…トウ・ヘルだぜツ!!」

そう叫びデイトナはG Vにスライディングで近づき足払いを仕掛けた。

「ツ…恋路…シアンにか！」

G Vは足払いをジャンプで避けつつ言い放った。

「決まってるだろオが！それをテメエ…シアンちゃんを連れ去りやがって…何してくれてんだよツ！」

デイトナは叫びつつ上方に丸い塊を打ち出す。

「そこまでだッ！」

「アタシ達を忘れんじやねえよッ！」

「話は後で聞かせてもらいますッ！」

が、塊は弾丸に撃ち抜かれGVに届かずそこで爆ぜる。

「うるせえンだよ！俺あ今コイツと話してンだよ！黙ってるー！」

そう叫びデイトナは三人に向かって雑に爆弾を連射し跳んで行ってしまった。

「行かせねえッ！」

雪音はライフルを出現させ煙を撃ち抜いた。

「ガアッ！」

が、見事にデイトナに当たり何か落ちる音がした。

「そこかッ！」

翼は音のした方向へ走り、影を斬った。

カキンと音を立てて剣が止まる。

「効かねえぜ…そんなナマクラッ！」

デイトナは剣を弾きその隙に翼の上半身をボコボコにしていく。

「アガッ！」

「消し炭になりやがれッ！」



翼が仰け反った瞬間にデイトナは爆弾を翼に打ち込んだ。  
「やったかッ!？」

煙に向かつてデイトナは叫んだ。

「惜しかったな、だがまだまだだ。」

翼の声が聞こえたと思った瞬間デイトナの体に光の剣が数本突き刺さった。

「グウアッ!? まだ生きて…なッ!？」

目の前の煙の方向を見るとスラスターで加速している少女の姿が見えた。

「オラアアアアアッ!」

「ゴハッ!？」

立花は思いっきりデイトナを蹴り上げ天井にぶつけた。

「ウグウ…。」

天井から落ちて来たデイトナが呻く。

「…大丈夫ですか? デイトナさん。」

「おい…: テメエ…: 何してんだ…:。」

自分に手を差し伸べている立花にデイトナは話しかけた。

「何って…: あなたに手を差し出しているんです。私達は手を取り合える。」

あつさり立花は答えた。

「まだだ…まだ俺は…取り合え無え…テメエらを燃やし尽くすまでは…死ねねえ…」

デイトナはそう呟きフラフラと立ち上がった。

「止めろ。これ以上やっても結果は判っている、帰れ。」

翼はデイトナに剣を向けつつ言い放った。

「殺されてでも…死んでもお前らを…ブツ殺す！」

デイトナはそう叫び新たな宝剣を取り出した。

「業剣ッ！」

デイトナはそう叫ぶとまた黒いモヤに、しかしきつき以上に禍々しいモヤに包まれた。

「何をしているんだッ！」

「ブツ殺す…ブツ殺す…ブツコロス…」

GVの叫びは届かずデイトナはモヤの中でブツブツと呟いていた。

「ブツ殺す！」

が、デイトナが叫ぶと同時にモヤは晴れ、中から黒く尖った装甲を身に纏ったデイトナが現れた。

「俺の炎が迸る！」

彼の怒りの声が部屋の中に響き渡った。

## 皇神保有工場攻略任務（中）

「装甲の形が変わった…!？」

立花は黒い装甲を纏ったデイトナを見て、驚いていた。

「それだけでは無い…熱い…火傷しそうだ。」

翼は汗を拭いながら言った。

「熱中症で倒れ無え内に倒すぞ！」

雪音はガトリング砲を構えながら言った。

「殺れるもんなら殺ってみろ…ウオオオオオ！」

デイトナが雄叫びを上げると周囲に炎の壁が出来上がった。

「まるで闘技場…だとしてもッ！」

立花は怯まず腰のブースターで加速し、殴りかかる。

「やってみろッ！」

デイトナも炎で加速し蹴りかかる。

「その蹴りッ…止めるッ！」

立花はデイトナの足を掴み、地面に投げつけようとする。

「うう…動かない…。」

「ヘッ！テメエの拳もそんなもんか!?オラアッ!」

が、炎の勢いでデイトナの蹴りはブレず立花を吹き飛ばす。

「貴様ア!」「よくもオオ!」「チッ!」

翼が斬りかかり、二人の銃火器で援護する。即席の作戦ではあるがかなりの威力を持っていた。

「オッセえ!」

「なッ!?!」

デイトナは飛び上がり、翼の剣を躲し、二人の弾丸を避けていた。

「消し炭になりやがれッ!」

デイトナは炎を雪音に向けて打ち出す。

「クッソ!」

雪音は慌てつつもしっかりとバリアフィールドを展開する。

「燃えろ燃えろオオ!」

デイトナはまだ炎を打ち出し続ける。

「トドメだア!」

「クソっ!…これは…」

「デイトナは更に炎を強くする。その中で翼は何か気付く。

「雪音！避けるッ！」

「えッ?!」「デヤッ！」

炎を隠れ蓑にしてデイトナはバリアに向かって蹴りをかましていた。

「耐え切れ…ネエッツ!!」

バリアは容易く壊れ、雪音を炎が襲う。

「アアアアッ！」

炎が無くなり視界は晴れた時には雪音のギアは解除されていた。

「あと、二人。」

「貴様アアッ！」「デイトナッ…」

二人はデイトナに向かって走り出す。

「先にテメエだッ！」

「斬るッ！」

デイトナは先に翼に蹴りかかる。

「オラッ！」

「セイッ！」

デイトナの蹴りをなんとか弾くが次の攻撃に剣を用意出来ない。

「デエイー！」

「ガアッ！」

デイトナは炎の壁を蹴り翼の想像より早く攻撃した。そして翼はモロに攻撃を喰らい地面に倒れる。

「フッ！ハッ！」

「クソツ…体制を整えなければ…」

デイトナは炎を蹴り何処かへ行ってしまった。その隙に立ち上がろうとするが体が上手く動かない。

「翼！上だ！防御しろ！」

「蹴り潰すツ！」「クソツ！」

GVは叫ぶが翼の防御は間に合いそうに無い。上からは踵を振り上げたデイトナが見えた。

「デヤーツ！」「こうなったら…！」

翼は思わず目を瞑った。

ー

炎の熱は来ない、痛みも来ない。私はそれらを感じる間も無く死んでしまったのだら

うか？

「ツ…。」

私はふと目を開ける。

「ぐううつ…。」

「そこ退きやがれ！それともテメエが潰されたいかツ!？」

G Vが目の前でデイトナの足を雷撃鱗で防いでいた。

「G V!」

「大丈夫？ツバサ。立てそう?」

G Vは呑気なのか平気なのか。私にいつも通り質問してくる。

「私は大丈夫だ！早くそこから離れるんだ!」

私は叫ぶがG Vは苦笑いしてデイトナを見る。

「…シアンを頼む。」

G Vがそう言った瞬間周囲が眩しくなった。

ー

「クツ…G Vは…!？」

「コイツがどうかしたか?」

ツバサの問いにデイトナが答える。ボクはデイトナに掴まれていた。ボクの必殺技「スパークカリバー」もコイツの前では意味を成さなかったようだ。

「デイトナア！」

ツバサが怒りでなんとか立ち上がる。

「ウラア！」

「ゴハツ！」

が、ツバサがデイトナに蹴り飛ばされギアが解除される。

「へいき…へっちゃら…」

「あん？」

まだギアが展開されているヒビキが立っていた。

「まだ残ってたか…メンドくせえ！全部燃やし尽くす！」

デイトナはボクを投げ捨てながら叫び、飛び上がった。

「ヒヤツハア！」

デイトナの全身から無数の炎が放出されていた。あの傷ではもう反撃も出来ないだろう。

「ううっ…」

ボクも立ち上がろうとしてみるが、体が動かない。



視界が赤に包まれた。

## 皇神保有工場攻略任務（下）

「GV、大丈夫？」

真つ白な空間で少女がボクに話し掛けてくる。

「…誰だい？キミは…」

「酷いじゃない！こんな幼い少女に、しかも何回も見た顔の少女に誰だい？なんて！」

ボクの質問に大人っぽい女性の声が怒鳴る。

「…ごめん、でも本当に…?!」

ボクは言い掛けて気付いた。

「歌…？しかもこの歌は…」

歌が聞こえた。

「…思い出した？」

皆を苦しめていた歌が。

「ああ…さつきはゴメン。そして…」

皆を喜ばせていた歌が。

「その先は言っちゃダメ、私が…私達が言わせない。」

ボク達を立ち上がらせてくれた歌が。

「…そうか…ありがとう。」

そして…

「さあ、GV！飛んで！」

ボクを奮い立たせてくれる歌が、聴こえた。

・  
・  
・

その場いっぱい広がっていた赤は大きな蒼に止められていた。

「…モルフオ…さん…？」

立花がボクを見ながら訊く。

「~~~~~♪」

ボクの傍にいるモルフオは立花にウインクしながら歌い続けた。

「んだテメェ！何でまだ立って、しかも俺の炎を止めるだけの力があるんだ!？」

デイトナが焦りながらもボクに怒鳴る。

「止めるだけじゃない！お前の炎を掻き散らす力だ！」

ボクは叫び雷の力を強めた。

「ウオオツ!？」

雷は炎を打ち消し、デイトナを弾いた。

「やってくれるな…だがッ！お前のおかげで高さが稼げた！蹴り潰してやるッ！」

「デイトナは炎で加速し、ボクに踵を落とす。」

「その炎、ボク達の雷が切り裂くッ！謠精の想いよ敵を貫け！アンリミテッドスパークカリバー！」

ボクはデイトナを迎え撃つように全力のスパークカリバーを放つ。

「デヤーーーッッッ!!」「ハアアアアッ！」

炎と雷、二つの力が一点に集中し、集まり、爆ぜた。

・  
・  
・

二人の力がぶつかり、弾けた。

「G…V…さん？」

「まさか…」

「嘘…だろ？」

三人はその様子を見る事しか出来なかった。

「そんな…そんな終わり方って…」

立花は涙を流した。

「クソっ…」

翼は拳を地面に打ち付けた。

「ツ……」

雪音はその様子を見ていた。

「そんな暗い顔しないでよ。」

「そうそう、勝手に殺さないで欲しいわね。」

部屋に二人の声が響いた。

ズドドドドドーン

大きな音を立てて地面から人影が出て来た。

「……GVさん！」「……GV……！」「……んのヤロウ……」

三人は駆け寄る事は出来なかったが、顔いっぱいに喜びの表情を出した。

「無事だったんですね！」

「うん、シアンとモルフオのおかげだね。」

GVは背後のモルフオを横目に立花の声に応える。

「ははっ……何とかなつたみたいだな……」

「無事で何よりだ。」

三人は何とか立ち上がり、GVに歩み寄った。

「ありがとう、でもボク達の任務はまだ終わって無いだろう？」

「本来の目的を忘れないでね。」

G Vの言葉に便乗してモルフオが茶化す。

「ハア…まあとにかく早く帰ってアイツに礼言わないとな！」

雪音が二ヘラと笑いながらG Vに言う。

「そうだね、急ごう。」

その後、一行は無事に爆弾を仕掛け、来たように列車に乗った。

## 悲劇と始まり

「…暇だ…。」

列車の操縦室の中で翼が呟いた。

「仕方ないじゃないかツバサ。アシモフの忠告通り、対空砲があった。しかもかなりの強度の。あれは完全にボク達を迎え撃とうとした。」

G Vが面倒そうに説明した。

「そうだが…。」

「またG Vは女の子に声をかけて…ふわあ…。」

モルフオがG Vにちよつかいをかけようとするがアクビが出たので中断した。

「モルフオ、眠いのかい？」

「ええ…ちよつとね…久しぶりに力を使ったから…。」

G Vの質問に答える途中でモルフオは消えてしまった。

「帰ったらシアンに羽織る物をかけてあげないとね…。」

G Vは景色を眺めながら一人呟いた。

・  
・  
・

「うむ。敵能力者の捕縛、感謝する。ご苦労だった、G V。」

アシモフがデイトナを抱えながらG Vに話す。

「こつちこそ。忠告が無ければミサイルを撃ち落とされていた。ありがとう。」

G Vもアシモフに向かって話す。

「Your welcome. それでは、また。」

アシモフは振り向き歩きながら別れの挨拶をした。

「またね。」

G Vも他の三人の方を向きながら挨拶をした。

・  
・  
・

「こいつは…!?!」

雪音は目の前の惨状を見ながら言った。

「隠れ家が…バレていたのか…!」

翼はボロボロになった隠れ家を見ながら言った。



隠れ家の扉は何かで強引に開かれ部屋は荒らされていた。

「シアン！無事か!？」

「シアンちゃん！居たら返事をして!！」

先に家に入った二人がシアンに呼び掛ける。…が、返事は無い。

「…ツ…これは…。」

GVは目の前にある缶ジュースの缶のようなモノを見ながら呟く。

「GV、何か見つけたのか?！」

翼がGVに近寄る。

「睡眠ガスのグレネード…コイツがあるって事は…!！」

いつの間にか来ていた雪音が呟く。

「ああ…シアンは何者かに連れ去られたんだ…!！」

GVは怒りを込めた声と目で言った。

.....

「スメラギの野郎共…オレ達をナメてやがるぜ…!！」

通信の向こうでジーノが歯を食い縛りながら言った。

「落ち着け、ジーノ。たった今、諜報班から連絡があった。どうやらシアンはスメラギの

衛星拠点アメノウキハシに連れ去られたようだ。」

アシモフが全員に地図等の情報を送信しつつ話した。

「衛星軌道から全世界にモルフオの歌を拡散する…恐らく、それが連中の狙いだろう。我々としても、この馬鹿げた計画、阻止せねばならない。」

アシモフは演説のように立派に言った。

「ボクが行くよアシモフ。」

「私も行きます!」

「私も行かない訳にはいかん。」

「アタシも行くぞ。」

GVの言葉に続いて三人の言葉が並ぶ。

「アメノウキハシに行くにはスメラギの軌道エレベーターを使うしかないわ。まずは、軌道エレベーターのコントロールを奪わなければならない…。」

モニカが資料を送信しつつ話した。

「そつちはオレ達に任せな…なあ、リーダー?」

ジーノがアシモフに問いかけるようにして話す。

「ああ、お前達には陽動と正面突破を任せる。大変だとは思うがお前達なら出来る筈だ。」

「大丈夫です！ 正面突破は得意中の得意です！」

アシモフの言葉に立花が元気に答える。

「ありがとう…みんな。」

G Vがしみじみと言う。

「頼んだぞ、G V…チームシープス、ミッションスタート！」

アシモフの言葉が終わると同時に皆が通信を切り、各々の仕事を始めた。

## 四人には勝てない

「オリヤアアアアアアアッ！」

「ゼリヤアアアアアッ！」

「オラオラオラオラアッ！」

「ライトニングスファイアッ！」

四人は豪快に、そして派手にアメノウキハシに続く島、オノゴロフロートを攻略していた。途中両者共にアクシデントがあったが無事に切り抜けここまでやってこれた。

「ここまでやれば……」

立花がそう言った所で通信が入る。

「朗報だ！コントロール施設の制圧が完了した、何時でもお前らを送り出してやれるぜ！後はお前らが軌道エレベーターに乗り込むだけだな！」

ジーノが喜びを抑えきれない様子で伝える。

「こつちもおおよその敵を倒しました！今からエレベーターへ向かいます！」

立花がジーノに一番に返答した。

.....

「ここまで来るのもあつという間だった、本当にありがとう。」

G Vがエレベーターの中で三人に頭を下げる。

「その礼は終わった後で受け取らせて頂こう。」

「ニヒヒツ、もしかしてデキてんのか?」

翼の言葉から何かを連想し茶々を入れる。

「そんな訳ないでしょ、ジーン。」

「それもそうだな、あのG Vだからなあ…。」

「…早くエレベーターを動かしてくれないか?」

二人の会話に割り込んで雪音が話す。

「おっおお…すまねえ。…ポチつとな。」

ジーンの掛け声と共にエレベーターが動き出す。

「うひゃあつ!!?…はっ速い…。」

かなりの速度で動き出したエレベーターに立花が素っ頓狂な声を上げる。

「…これでも最低速度らしい。」

G Vがエレベーターの中の端末を見ながら言う。

「ええ……？……じゃあ最高速度とか死んじまうんじゃねえの？」

雪音が若干冗談っぽく話す。

……

「そろそろ、通信可能な限界高度を越えるわ。」

「絶対シアンちゃんを助け出して、生きて帰ってこいよな。」

「「もちろんです（だ）」」「ああ、そのつもりだよ。」

二人の言葉にそれぞれ答える。

「……それにしても、アシモフは一体何処に行ったのかしら？」

モニカが心配そうに呟く。

「リーダーの事だ、こっっそりそのエレベーターに潜り込んでいて……オイシイ所でみんなを助けようとかそんな事でも考えてるんじゃないかねーか？」

モニカの呟きにジーノがノイズの混じった声で答える。

「ジーノ……アナタじゃないんだから……。」

ジーノの答えにノイズが混じった声でモニカがツッコむ。

「へいへい……モニカ……リーダー……ホの字……か……な。」

ジーノが途切れ途切れの声でぼやく。

「なっ!? ベ……に……そう……わけ……な……。」

「あの人…案…そう……………茶目……………」

「……………」

二人の途切れ途切れの会話が聞こえた後、通信が途絶える。

「アシモフさん…心配ですね…。」

「あの人なら大丈夫だよ…それにここまで来たんだ、引き返す訳には行かない。」

立花の眩きにGVが上を睨みながら眩く。

「さて、とつとと助けてみんなで飯でも食おうぜ！」

「そうだな…」

——

オレはノワの力も借りなんとかアメノサカホコに辿り着いた。

「…ツ…」

最奥部に向かって歩き出すエレベーターが動いている事にオレは気付いた。

「フェザーの連中か…。」

オレは足を止め振り向く。

「…決着をつけさせて貰うぞ…蒼き雷霆、そして…雪音。」  
そう呟いた少しした後、箱が到着し、扉が開いた。



## ケジメ

「やっと着いたか。」

エレベーターがそこそこ長めの時間を掛けてようやくアメノウキハシに辿り着く。

「早くシアンちゃんを助けて一緒に美味しいご飯を食べましょうー！」

立花がそう意気込んだのと同時に扉が開いた。

「……お前も来ていたのか。」

扉の先には奥へ続く廊下と一人の少年が居た。

「待っていたぞ、フエザー。」

少年、アキュラがりボルバー<sup>ボイダー</sup>を向けつつ話す。

「……お前ら、先に行け。」

「クリスちゃん?!」

「アタシなら大丈夫だ、早くシアンを助けてやれ。……それにアタシはコイツと決着をつ

けたい。」

雪音もりボルバー<sup>イチイバル</sup>をアキュラに向けつつ話す。

「分かった、ありがとう。……行くよ。」

GVは感謝を言いつつ走り出す。

「…フン、一騎打ちという訳か。」

アキュラが雪音に狙いを付けつつ言う。

「ああ、アイツらの足は止めさせ無え。…行くぞッ！」

雪音は言い終わると同時に弾丸を放った。

「お前は能力者を助けた害悪、死んで貰うッ！」

アキュラも弾丸を放ち、弾丸は全て空中でぶつかった。

「まだまだア！」

雪音はガトリング砲でアキュラに向けて弾を撃った。

「ミリオンイーターッ！」

アキュラは盾を構え、蠅を放った。

「ハッ！盗みはお手の物ってか？」

雪音は余裕そうに笑う。

「お前らの警備が弱いだけだ！」

アキュラは叫びつつ盾からレーザーを撃つ。

「ちよっせえ！」

雪音はレーザーの軌道を弾丸で曲げる。

「まだまだッ！」

アキュラの盾からはビットが発射され雪音に飛んでいく。

「オラオラア！」

雪音は小さなミサイルを大量に打ち出しなんとかそれを撃墜する。

「ジェラシツクゴルゴン！」

アキュラは真つ直ぐにこちらを睨む雪音に向けて光を放つ。

「あん？目くらましにもなん無え…ぞ？」

雪音は二丁拳銃でアキュラに接近しようとして気付く。

「脚が…!？」

脚が石化して動かない、さらに石化はどんどん上に迫ってくる。

「これで終わりだ。」

アキュラが言うと同時に無慈悲に雪音の周囲にワームホールが展開される。

「レイジーレーザーッ！」

ワームホールからレーザーが発射され雪音を囲む。

「クツソオオ！アーマーパーズだッ！」

雪音が叫ぶと同時に雪音の石化が解かれ、レーザーが弾かれる。

「レーザーがッ!？」

「それだけじゃねえッ！」

次の瞬間ワームホールを通じてアキュラの前に大量の装甲だったものが現れアキュラにぶつかると。

「グアアッ!？」

「こんのおおおッ！」

アキュラが吹き飛んだ衝撃でボーダーは飛んで行き盾は転がった。その隙に雪音は距離を詰め、アキュラを拘束する。

「クッ…。」

「アタシの勝ちだ、アキュラ。」

「クソッ…こんな所で、こんな奴に…。」

アキュラはもがくが拘束からは逃れられない。

「ひとまず眠って貰うぞ、アキュラ。」

素晴らしい雪音はアキュラの首に掛かっている腕に力を込める。

「俺はバケモノを…一匹残らず…。」

「……………」

うわ言のように呟くアキュラを見て雪音は力を緩める。

「…能力者にも力を悪用する奴らは居る、けど全員が全員そんな奴じゃねえ。特に二人、

GVとシアンは違う。それだけは言いてえ。」

「なっ!？」

「それだけだ。」

そう言い雪音はまた力を込め、アキキュラを気絶させた。

——

「クリスちゃん…大丈夫かな…。」

立花がふと呟いた。

「大丈夫だ、雪音を信じろ。」

翼が立花をなだめる。

「そうこうしてる内に着いたよ。」

GVが扉を蹴破りつつ言う。

「…ようこそ、フェザーの皆さん。そして久しぶり、立花響。」

少年が静かに笑いながら三人を出迎える。

「紫電さん…!」

「覚えていてくれていて光栄だよ。」

立花の言葉に紫電は呑気に応える。

「貴様…シアンを何処へやった！」

翼が怒鳴ると紫電は少し驚いたかと思えば端末を操作し部屋を操作する。

「シアンなら…(こ)こ(き)。」

紫電は地面から出て来たポッドを見ながら話す。

「貴様アツ！」

「おっと、止めておいたほうがいいよ。これはシアンと直接合体している、機械を斬ればシアンも切れる。」

翼が叫ぶが紫電がそれを止める。

「どうして…どうしてあなたはこんな事を…！」

「まあ、言ってしまうなら国と平和の為…かな？」

立花の質問に紫電は答える。それを聞いて立花は更に拳に力を入れた。

「どうして!?! どうして女の子を傷つける事が平和の為になるんですか!?!」

「ヒビキ。」

立花をGVが止める。

「その話はコイツをのした後でも聞けるだろう。まずはシアンを。」

「連れ去らせないよ。」

紫電は威厳のある声で言った後ポッドに手をつけた。

『……………』

紫電の背後にモルフオが現れる、だが何処か様子がおかしい。目からは意志を感じる事が出来ず、まるで感情の無いプログラムデータの様に見えた。

「モルフオに何をした…!」

GVが怒りを何とか抑えつつ訊く。

「これは電子サイバーデータの謠言を制御する装置でね、少し彼女を弄らせて貰った。…今のボクにはモルフオの加護がある。いくら君達でも勝ち目は無いと思うよ?」

紫電が「余裕」を全面に出しながら話す。

「だとしてもおとおッ!」

プツツンした立花が紫電に殴りかかる。

「なッ!?!」

「フツ。」

が、拳は突如出現したバリアに止められる。

「言い忘れていたが…モルフオが生み出す電子障壁サイバーフィールドがある限り、君達の攻撃はボクには届かない。」

「でやあああああッ！」

紫電の説明も聞かず立花は殴り続ける。否、聞いているが殴り続けている。

「それと……この攻撃のエネルギーは何処へ行くんだらうね？」

「知るかあああああッ！」

「答えは、攻撃を仕掛けた者の居る方向だよ。」

紫電が言い終わると同時に巨大な拳が立花をぶん殴り、吹き飛ばした。

「がああああッ!？」

「にしても、彼女の歌は凄いな。僕のセブンス、サイコキネシス念動力を使わなくても君を吹き飛ばせたんだから。」

紫電は多少の嫌味を込めて話す。

「貴様ア！シアンを捕らえた挙句平和などとぬけぬけとぬかしおって！絶対に許さんッ！」

翼は剣を紫電に振りつつ叫ぶが紫電は鼻で笑いつつそれを受け止める。

「テロリストの許しなんて最初から求めちゃいないさ。全ては平和の為、中途半端な覚悟では無いつもりだよ。」

「平和だとツ!?!少女を苦しめ、能力者を殺す事がツ?!」

翼は光の剣を降らせつつ反論する。



「君達も見て来ただろう？暴走する能力者、欲望の為に力を使う能力者。一人一人が未知の兵器を所持しているようなモノだよ、危険極まりない。管理が必要な事くらい、君にも分かるだろう？」

「だが能力者を弾圧する事が正義とは言えないだろう！」

翼は巨大な剣で蹴りをいれつつ叫ぶ。

「確かに他の方法を取るべきかもしれない。けどね、その他の方法を考える時間すらも無いんだ。」

エネルギーに耐え切れなくなったバリアが翼に剣を放つ。

「あああああッ!？」

「だからこうやって、押さえつけるしかない。」

「クソッ！」

GVは翼が射線からどいたので回り込むのを止めて紫電を撃つ。

「でもに今みたいに何回押さえつけても、何回だって敵は出てくる。」

「スパークカリバーッ！」

「だからボクの歌姫プロジェクトの為に彼女が必要なんだ。」

GVの剣はバリアに阻まれ紫電には届かなかった、届かない筈だった。

「お前のやり方はおかしい！そんなものが平和の為の行為でなるものか！」

『……………！』

G Vの雷はモルフオに届き、一瞬ではあるが障壁を解除した。そして…  
「ぐおおおおっ!?!」

その一瞬にG Vの剣が紫電を切った。

## 正義と善

「驚いた…強いね…キミは…」

紫電は胸の傷を押さえつつ言う。紫電の背後に居たモルフオはいつの間にか消え、部屋に満ちていた威圧感の様なモノは消えていた。

「流石、スメラギの最高傑作…ボクも本気を出さざるを得ないようだ。」

そう言うと、紫電は三本の宝剣を取り出し、掲げた。

「そして…」

紫電がポッドに触れるとポッドの扉は開き、中からシアンが出て来た。

「何を!？」

「見るといい…これがボクの真の力だ…!」

紫電がその言葉を発し終わると同時に周囲は光に包まれた。

光が晴れるとさつきまで居た部屋は崩壊し、宇宙で奇跡的に出来た小さな足場に三人は居た。そして、その背後には

「神にも等しきこの力…全ては守るべき民と国土の為に!」

変わり果てた姿の紫電が居た。その姿は神と呼ぶに相応しい、巨体と神々しさを持つ

ており、溢れる力が周囲を震わせていた。

「ボクの正義が、悪を挫くッ！」

「そんなモノが正義なもんか……！」

フラフラと近づく二人に紫電は視線を向ける。

「チツ…起きてしまったか…ならばもう一回眠らせるまでッ！」

そう叫び紫電は黒と白の二匹の機械仕掛けの獣を呼び出した。

「地に伏せよッ！」

紫電がそう言うのと黒の獣は爪で地面を引っ搔いた。

「喰らえッ！」

爪が引っ搔いた所から「爪」が三人に襲い掛かる。

「あつぶな!」「クツ…!」「フツ！」

三人は何とか跳んでそれをやり過ぎす。

「吹けよ、神風！」

紫電がそう言うのと今度は白の獣が機械を、よく見れば送風機のようなモノを体内から出した。

「つとと!!風が!!」

「スラスターでも…落ちないようにするのが…精一杯……！」

「攻撃の隙すら…与えてくれない…！」

三人は風を何とかしのぐが端に追いつめられてしまう。

「星々の煌きよッ！」

紫電は何処からかレーザーを集まった三人に向けて照射した。

「グウアアッ！」「アアアアアッ！」「ウオオオオッ！」

三人はレーザーをモロに喰らい、その場に倒れ込む。

「闇へ還れッ！」

黒の獣がレーザーを吐く。

「光に散れッ！」

白の獣もレーザーを吐く。

悲鳴の声も歓喜の声も光に掻き消される。

「邪魔だ邪魔だアッ！退いてろ犬っコロオ！」

雪音がミサイルと共に突撃して獣の向きを無理に変える。そして三人の中にもうまく

滑り込み、バリアを張る。

「グウツ!」「ウラアアアアツ!」

レーザーは紫電に当たり、三人は生き延びた。

「クリスちゃん?!」

「助かった!ありがとう、雪音。」

「ありがとう。」

三人は口々に礼を言う。

「礼は後だ、先にアイツを倒しちまうぞ。」

雪音は巨人を見ながら言う。

「でも中にはシアンちゃんが…!」

「お前なら…私達ならやれるだろ?これまで何回も修羅場を乗り越えて来たんだ、今回も行ける。」

「…S2CA・トライバースト…か?」

「そーいうこつた…今回も頼むぞ。」

雪音はそう言い、立花の手を強く握る。

「…今回も喰らわせてやろう。」

翼もそう言い立花の手を強く握る。

「…分かりました！でも…」

立花はGVの方を見ながら言う。

「GVさん。時間を稼ぐ事って、出来ます？」

「…シアンを、救えるんだね？」

GVは静かに訊く。

「勿論です…！どんなだろうと、救います…！」

その返事を聴くとGVは満足そうに頷き、三人の前に立った。

「ボクが時間を稼ぐ、そのうちに！」

「「ハイッ！」」

「「Gatrandis babel ziggurat edenal…！」」

「この収束するエネルギーはッ!?そんな事があつていいものかッ！」

今頃立て直した紫電は拳を何度も三人に向かって振るが、蒼の膜に止められる。

「クソッ!ようやくッ!ようやくボクの支配が完成するつてのに!こんなッ！」

紫電は総戦力で膜を攻撃するが硬度はどんどん上がって行く。

「こんな浅はかで、愚かな奴らに…！」

「「Emustolorronzen fine el zizzl:」」

次の瞬間周囲は虹に輝き、風が巻き起こる。

「秩序を砕かれてたまるか！」

「スパークソング！」

「コンビネーションアーツ！」

「セツトツ！ハーモニクス！」

風は次第に立花に収束し、立花に力が集まる。

「ボクを砕けば混沌と破壊が君達に襲いかかるぞ！」

「S2CAツ！トライバーストツ！」

立花の拳に力が集まる。

「これはお前達の！」

「これが私達の！」

立花の拳が紫電に突き刺さる。

「ガアツ！」

「絶唱だあああああああ!!」

紫電の体を竜巻が貫き、砕いていく。上半身を失った状態で紫電は小さく言った。

「…愚かだ…君達は…実に…愚かしい…」



「!?」

「…秩序を失った能力者は反乱を起こすぞ…!」

「何を?!」

「ボクだけが…この国を…!」

紫電は自信の崩れ行く体を見ながら呟いた。彼の体は爆ぜ、僅かな足場は崩れ去った。

「立花! 無事だったか!」

残っていたアメノウキハシの断片で何とか辿り着いた三人が立花を出迎えた。

「シアンは!?」

「大丈夫です、ここに。」

G Vに訊かれて立花は大きな手に入ったシアンを出した。

「ハア…アンタ随分と危なっかしい事するわね…」

モルフオが立花に言う。

「アハハ…。」

立花は苦笑いで返すしか無く、頭をポリポリと搔いている。

「ハア……ま、皆無事だったしヨシとしようぜ。」

雪音は皆に言い、皆それに賛同する。

「さて、早く帰ろうか。」

一行は出口に向かって行った。

e n d : : ?

一行は所々崩れた通路を歩く。目を覚ましたシアンも多少フラついてはいるが一行にしつかりと着いて行っている。

「…なんで、貴方がここに…」

ふとGVが目の前ここに居る筈の無い男に言う。

「皆、ご苦労だった。紫電を倒すとは…お前達こそ、新たなる時代のキングとクイーン、そしてソルジャーに相応しい。」

「何を…言っている…?」

アシモフの言葉に動揺を隠せない翼が問う。

「今の騒動でスメラギは混乱している…今が絶好のチャンスなのだ。」

「アシモフ…?」

「まさか…アンタ…!」

アシモフの言葉から何かを感じ取ったモルフオが敵意をアシモフに向ける。

「GV、お前はフェザーを離れ私が想像した以上に成長したようだ。」

アシモフはそう言い終えた後、ハンドシグナルでそちらに行くよう促し、続ける。

「フェザーに戻って来い、G.V。今ならその少女にも居場所はある。勿論…お前達三人にもソルジャーとして十分な居場所を用意しよう。」

「駄目よ！アイツの誘いに乗っちゃ駄目！」

アシモフの誘いを必死に止めるが一行はまだその男の考えを分かっていたいなかった。いや、分かりたくなかった。

「シアンの歌と、この衛星拠点…そしてお前達の力があれば愚かなスメラギや無能力者共をこの世から一掃出来る。」

「！！！！」

アシモフの言葉で一行はアシモフの考えを理解せざるを得なかった。

「私がフェザーを設立し、この日が来るのをずっと待ち望んできた…」

アシモフは一行を迎え入れるように両手を広げ話し続ける。

「今こそ、我ら能力者が『自由』の名の元に立ち上がる時が来たのだ。さあ来い。皆で共に自由ある世界を勝ち取ろう！」

そう言い終わるとアシモフは静かにこちらに歩み寄ってきた。

「そんなやり方じゃ自由にはなりません！それにフェザーはみんなの共存が目的じゃ無いですか!!」

立花は叫ぶがアシモフは首を横に振る。

「チツチツチツ…フェザーの目的はあくまで自由だ、共存は勝手に誰かが勝手に言い出した事だ。」

「そのようなやり方で手に入れた自由など本物の自由では無いしお前のような者がそれを扱えば容易く崩れ去るだろう！私は…私達はお前の言葉に賛同出来ない！」

「ボクは貴方に救ってもらった恩がある！それを忘れるつもりは無い！…だけど！それが…そんなモノが貴方の野望というのなら、貴方は…あの紫電と同じだ！シアンを利用するつもりなら、ボクが止める！」

二人はアシモフに反論し、シアンを庇うようにして前に出る。

「そうか、残念だよ…」

アシモフは腰からリボルバー銃を抜く。アキユラとの戦いで見覚えのある銃だ。

「アキユラの…銃…！」

雪音が銃を見て一番に叫ぶ。

「ここに来る途中に居た無能力者から奪っておいた。奴と争った際に一発掠ってしまつたが…驚いたよ。どうやらコイツの弾丸には第七波動を阻害する効果があるらしいな。」

ゆつくりとその銃をGVに向けつつ言う。

「…いかにお前と言えど、無事では済むまい。」

銃口がG Vを睨み、引き金は引かれ、弾丸は飛び出す。

「させるか！」

雪音がリボルバーで弾丸に向かって発砲する。

「フン、お前は既に対策済みだ。」

アシモフが呟くと同時に矢と弾丸がギリギリで交わる。

「ゼアアッ！」「セリヤアアッ！」

立花と翼が弾丸があるのであろう位置に得物を振るう、が弾丸は二人の反応より先にG Vに向かって飛んで行く。

「ヤメロオオオッ！」

誰かの叫びが木霊するが弾丸は止まらない。

「グウッ！」

G Vの心臓に弾丸が突き刺さる。

「アスタラビスタ<sup>サヨナラ</sup>だ…G V。」

アシモフがそう言い終えると同時にG Vが膝を着き、そして倒れた。

「嫌ッ…そんな…：…G V…！！」

シアンはG Vを抱きかかえ叫ぶがG Vはグツタリとしたまま動かない。

「よくも貴様はアッ！」

翼が剣を振るうが容易く止められ、剣を投げ捨てられてしまう。  
「なっ!?!」

「反逆者は反逆者らしく向こうでじゃれ合っている。」

アシモフは翼の頭に弾丸をぶち込んだ。翼の体がパタリと倒れる。

「うっ…ウワアアアアッ!」

雪音は体を赤黒い何かで覆い、アシモフに襲い掛かる。

「フン、獣と堕ちたか。」

アシモフは弾丸を雪音の両脚に当て、動きを止める。

「自我を失った獣は真っ先に死ぬんだ、こういう風になッ!」

動きが止まった雪音にアシモフは弾丸を放つ。

「デリヤアアアアッ!」

立花はアシモフに殴りかかるが寸での所で拳を躲される。

「ハッ! G Vの武術に比べれば可愛いモノだッ!」

「ぐあっ!?!」

立花は簡単に投げられ地面に打ち付けられる。

「安心しろ、シアンもすぐにそっちに送る。」

アシモフはそう言い放ち、立花の心臓に弾丸を放つ。

「さて、後はお前だ。シアン。」

リボルバー銃をシアンに向け、引き金を引く。…が、弾丸はシアンの顔の横を通り過ぎて行く。

「ッ!？」

「シアンちゃんを…殺させは…しないッ…!」

アシモフの衣服にしがみついた立花を見て一瞬は驚いたアシモフだったがすぐに冷静さを取り戻す。

「心臓を潰してもまだ戦うか、仲間に来てくれなかったのが本当に惜しい。…だが反逆者が殺さねばならない…チャオ。」

アシモフの放った弾丸は立花の頭蓋骨を砕き、脳を抉った。

「…これで終わりだ。…向こうで仲間が待っているぞ。」

アシモフはシアンの左胸に触る。

「アリーヴェデルチ。」

アシモフがそう呟くと周囲が一瞬輝き、直後にはシアンも倒れていた。



## 目覚め

「……（こ）は？」

白く、広いように見えてとても狭い場所に立っていたシアンが呟く。

「起きたのね……」

目の前にとても疲れた様に見えるモルフオが現れる。

「モルフオ……う……そうだ！みんなは！私、死んで……」

「はいはい、落ち着いて……」

モルフオがポンポンとシアンの肩を叩きつつなだめる。

「だけどツ……」

「……落ち着いて聴いて。」

シアンの言葉を遮りモルフオは話す。

「まず、みんなは生きてる。あなたも含めてね。」

「……」

モルフオの言葉を聴きシアンの顔がパッと明るくなる。

「……でもね、貴方の身体と“私”はもう動きそうに無いの。」

「えっ!？」

「ごめんなさい…けど彼らを守る為には仕方なかったの…。」

モルフオは涙をポロポロと零しつつ話す。

「つていう事は…。」

「違う。」

「え?」

「貴女の考えている事と私の考えている事は…違う。」

「どういう事?」

モルフオにシアンが訊く。

「私の体はまだ動く、貴女の問題と私の肉体。その二つを組み合わせれば何とか貴女は生き残れる。」

「…!」

「でもね、生きれてもそのままじゃ貴女はすぐに死んでしまう。」

「…!? どういう…事?」

「肉体と精神、その二つが別ればそう長くは生きれない事、それは知ってるわよね?」

「う、うん…。」

「ここを出たら、すぐに憑りつく肉体を見つけないさい。私からの最期のお願ひよ。」

「最期って…死ぬみたいじゃない！そんな事言わないで！」

「…ごめんなさいね、でも…駄目みたい。」

「そんな…。」

「しつかりしなさい。あなたが死ねばみんな悲しむわ、私も含めてね。」

「…！」

「だから行って、生きなさいなさい。」

モルフオはいつの間にか背後に現れていた扉を指差しつつ言う。

「…分かった。私、頑張るよ。」

「よく言えました…頑張ってね。」

シアンの言葉にモルフオが手を振りつつ応える。

「じゃあ…」

「ちよつと待って！」

振り向いたシアンをモルフオが呼び止める。

「何？」

「みんなにこう伝えて。「みんなのおかげで私は全ての力を開放できた。あの弾丸から私を守ってくれてなかったらみんなを助けるだけの力が出せなかった。本当にありがとう」ってね。」

「分かった、しつかりと伝えてくるよ。」

「ありがとう、これで悔いは無いわ…」

「それじゃあ、私はもう行くね。」

シアンが扉に手を掛けつつ言う。

「ええ、行つてらっしゃい。」

モルフオがその言葉を言い終える頃にはシアンは扉を抜け、先へ行つてしまつていた。

「…行つちやつた…」

空間に一人の声が響く。

「はア…モット生きたカツタなア…」

自身の崩れ行く「肉体」を眺めつつそれは呟く。

「…みんな…ありがとう…シアンをよろしく…ネ。」

そう言い、それは消え、その後空間が消滅した。

—————

私は「シアン」の肉体を抜け、現実に戻った。私の今の肉体はとても軽くて、宙に浮く事も出来た。そして何より…

「……………」

感じる事が出来る。音と電波で、周囲の状況を把握できる。

「うわあああああああッ!!!」

「GVさん……」

「……ッ!」

「クソッ!クソッ!」

「……!」

近くにGV、ヒビキ、ツバサ、クリスが悲しみに満ちている事が感じられた。私は急いでGVの身体に入る。

「……………」

次第に視界が出来ていく。GVの眼を通して、視界が復活したのだと感じる。GVの肉体の感覚も感じれる。身体は整った。次にする事は一つ。

「みんな、泣かないで。」

みんなを励ます事だ。

## 蒼き雷霆の目覚め

「……ッ！」

GVは飛び起き、周囲を見渡す。

「起きたか」

「クソツ……クソツ……」

「GVさん……」

三人は既に起きており、皆暗い顔をしていた。雪音は壁に拳を打ち付け続けていた。

「あっ……」

GVは三人の近くに横たわっている一つの小さな体を見つけた。

「シアン？……おい、シアン……」

GVはその小さな死体に歩み寄りつつ呼び掛けるが返事は無い。

「クツ……」

一瞬、歯ぎしりの音が聞こえたと思うと

「うわあああああああああああああッ!!!」

GVの叫びが周囲に響き渡った。

「…ッ!」

「GVさん…」

「クソッ!クソッ!」

GVの叫びを聞き、一行の顔は更に暗くなり、雪音の壁を殴る音も大きくなった。そして少しの間、静寂がその場を埋め尽くした。

「みんな、泣かないで」

モルフオのような、シアンのような、優しい声が聞こえた。

「えッ!?」「なっ!?」「はッ!」「シアン…?」

声のする方へ顔を向けると、そこにはモルフオが居た。だが、仕草が少し違う。

「シアンなのか…?」

何かを感じ取ったGVがモルフオシアンに向かって言う。

「うん、モルフオが私を…皆を助けてくれた。」

「そうだ、モルフオさんはッ!」

立花が思い出したように叫ぶ。

「…そのモルフオから伝言、」

シアンはモルフオの言葉、そして事の終始を伝えた。

「そんな…」

涙が落ちる音と歯ぎしりの音が聞こえた。

「泣いている場合じゃないよ、貴方達の今したい事は何？」

「ボクは」「私は」「アタシは」

「「あの男を止めたいッ……！」」

四人の声が揃った。

「行きましよう？私の歌があなたの翼チカラになる……！」

シアンの歌が響き渡る。

「この歌はッ……！」

「感じる……！フォニックゲインの高まりを……！」

「力の高まりを……！」

少年と少女達は輝き、それが晴れた後には少女達の装甲は白く美しいモノへと変化しており、GVの周囲には有無を言わせぬ力強いオーラが漂っていた。

「行くよッ！」「行こう……！」

二人がそう言った後、壊れかけのスピーカーから軌道エレベーターが動き出している事を表すサイレンが鳴った。

「軌道エレベーターがッ……！」

「行かせるかあああああッ！」



「せやあああッ!」

多くのミサイルと大きな光の刃がエレベーターかその管があるであろう場所を砕いた。

「何ッ!?!」

そしてその場所にはドンピシャでアシモフが居た。

「まさか生きていたとはな…: どういうマジックだ?」

完全に壊れたエレベーターからアシモフの声が聞こえる。

「アシモフ…: お前の好きなようにはさせない…: i」

「散って行ったモルフオさんの為にも…: i」

GVは銃口をアシモフに向け、立花は戦闘の構えを取る。

「そのセブンスのパターン…: なるほど、サイヴァーデーヴァの力を取り込んだか。惜しいぞ、GV。その力があれば、私に代わり新たな時代のリーダーに成れただろうに。」

アシモフが呆れた様子で言う。

「そんなモノに興味は無いッ!」

「支配ならもつとマシなヤローを選んだなッ!」

翼が切っ先を、雪音は銃口をアシモフに向けつつ叫ぶ。

「どうやら育て方を間違えてしまったようだな、私もモノを見る目が鈍ったか。今のお

前達は我々の前に立ちはだかる…敵だッ！」

そう叫びアシモフはサングラスを取り、雄叫びを上げる。アシモフのオーラが瞬く間に変わり、そのオーラが意志を持ったように装甲へと変化する。

「迸れ、蒼き雷霆<sup>アームドブル</sup>…我が敵を貫き滅ぼせッ…！」

## 決着

「その姿は……!」

GVは目の前に居る知らないアシモフに言う。

「雷撃の第七波動がお前だけのモノだと思っていたのか?」

「先手必勝ツ!」

痺れを切らした翼がアシモフに斬りかかる。

「効くものか、そのような剣が。」

「なツ!?!」

が、剣はアシモフをすり抜け、勢いそのまま通り過ぎる。

「ハア…面白い話をしようと思っていたが、それすらも許されないか。」

ようやく戦闘の構えを取ったアシモフが呆れつつ言う。

「オラアアアアツ!」

「オラオラオラア!」

「スパークカリバーツ!」

立花がアシモフに殴りかかり、二人がそれを援護する形で攻撃を仕掛けるが、それも

全てすり抜ける。

「効かないと言ったのが分からなかったのか？ フール共が。」

そう言い、アシモフは地面に手を付ける。

「迸れ、アームドブルー…ボルティックチェイン…！」

アシモフがそう言い放つと同時に雷の鎖が四人に絡みつき、電撃を流す。

「あああああああッ！」

何とか立っていられたのはGV一人、けれどそれもすぐに倒れてしまいそうな程にフラフラだった。

「他のガイズはすぐに殺せそうだ…先にGVを殺すでしょう。」

そう呟き、アシモフは銃口をGVに向ける。

「GVは私が守るッ…！」

シアンがGVを庇うように現れるがシアンもぶっつけ本番で力を扱いきれないらしく時々体にノイズが走る。

「今度はサイバーディーヴァの力さえも殺してやる。」

「ぐうっ…GVさんを…シアンちゃんを守らなきゃいけないのにッ…！」

三人は足掻くが立ち上がれない。

「助けなきゃいけないのにイッ！」

「さらばだ、G V、シアン。」

立花の叫びが響き、無慈悲に引き金は引かれる。

「死なせない、みんな、殺させない。」

モルフオの声が聞こえ、弾丸は弾かれる。

「…まだ生きていたか、謡精。」

「モルフオっ!?!」

「やっぱりアタシが居ないと駄目ね。」

見えないもののその存在を、意志を感じ取れた。

「これが本当に最後よ、さつきみたいにはいかないけどツ…!」

シアンが静かに腕をG Vに向けると、G Vのオーラがさつきよりも大きくなる。それと同時に三人の体はパタリと倒れ、装甲が解かれる。

「みんなの力、借りるわね……さあG V、立ち向かって」

その言葉が聞こえたと同時に、モルフオの意志が燃料が無くなったかのように小さくなり、消えた。

「モルフオ……ありがとう。」

G Vは静かに眩き、手に持つ銃をアシモフに向ける。

「フン、立ち上がった所で何が出来る?」

アシモフは残弾を全てG Vに向けて撃つ。

だがそこにG Vは居なかった。

「早いッ……アームドブルーの力は恐ろしいな、だが封じてしまえば……ッ!」

アシモフは右手に握ったリボルバーを見ようとして気付く。

「探し物はこれか?アシモフ。」

いつの間にかきつちりと弾丸を込めたりリボルバーをアシモフの頭に付突き付けていたG Vが訊く。

「貴様ア……だがッ!」

アシモフはリボルバーを掴み、G Vの方へ向ける。

「喰らえエッ!」

「やめてくれ、この力は自分でも制御が難しい。」

直後、アシモフの手首とリボルバーがねじ曲がり、リボルバーが爆発する。  
「グウオオオツ!!?ならばアツ!」

アシモフはさつきより強い力で鎖を生み出し、GVに絡みつかせようとする。  
「ライトニングスファイアツ!」

が、雷の球が鎖を全て砕く。

「これで終わるモノかツ!直接雷撃を流し込んでやるツ!」

「逆れ、アームドブルーツ!グロリアスストレイザー!」

虹色の剣がアシモフの肩を斬る。手がGVに触れるが雷撃はGVに流れない。

アシモフの右肩が綺麗に胴と離れ、断面から血がドクドクと流れる。

「…流石だ…ガンヴォルト…その力…お前こそ…新たなる世界のリーダーに相応しい…」

膝を着いて、GVを見上げているアシモフが言う。

「そんなモノになるつもりは無い。ボクはただ、シアンの仇をとつただけだ…」

アシモフを見下げつつGVは言う。

「ああ…そうだろう…な…だが…能力者の台頭は…もは…や…止めら…れん…力を…手にした…お前達は…その流れに…乗るにしろ…抗うにしろ…いずれ…逃れられぬ戦いに…巻き込まれていく…ことに…なる…だ…ろう…」

「……………」

途切れ途切れに必死に、そして静かに叫ぶアシモフをGVは静かに見下げる。

「お別れ……だ……GV……能力者の……未来は……お前に……託す……グッドラック……！」

そう言い残すと、アシモフの体はどきりと倒れた。

気付けば、朝日がエレベーターに差し込んでいた。



## END

「んん……ハッ！」

立花は何処かの綺麗なベッドから飛び起きる。

「目が覚めたか……」

近くで看病をしていていたジーンが立花に声を掛ける。

「……は？」

「フェザー所有の移動拠点だ、安心してくれ。」

ジーンが立花の問いに答える。だがその声いつものような元気さは無い。

「……そうだッ！GVさんはッ!？」

「……それはちゃんと話す……ロビーで他の二人も待つてる、ついてこい。」

そう言いジーンはスタスタと部屋から出てしまった。

「ちよ、ちよつと待つてくださいッ！」

立花も急いでベッドを抜け出し、ジーンを追いかける。

・  
・  
・

「…よう、寝坊助。」

「おはよう、立花。」

入ってきた立花に二人は声を掛ける、がジーノ同様あまり元気は無い。

「おはよう…モニカさんは？」

「…アレ以来部屋に閉じこもっちゃまった。」

「何かあつたんですかッ!？」

「落ち着けよ…ちゃんと話す。」

深呼吸をしてからジーノは話し始めた。

—————

「みんな…遅いな。」

昇ってくる朝日を眺めつつ、ジーノは軌道エレベーターの入り口の前で一行を待っていた。

「大丈夫よ、みんなならシアンちゃんを無事に連れて来てくれるわよ。」

モニカは焦るジーノを抑える。

「だけだよ……リーダーは居ないし、みんなは朝日が昇っても帰ってこないし……」  
「それは確かにそうだけど……あつ！」

ジーノをさつきと同じように話そうとしてモニカはエレベーターが降りてきているのに気付く。

「帰って来たわ！」

「本当かッ!?……急いで迎えてやんねーとなッ！」

二人はドアの前に立ち、一行を迎える準備をする。

しばらくして、エレベーターが地面に着き、重いドアが開かれる。

「GV………って、お前……それ……」

「……そ……そんな……」

二人はドアの向こうの光景を理解するのに何秒も時間が掛かった。

三人は地面に倒れ、アシモフは腕を切り落とされ事切れている。そして、その中たった一人静かに立っているGV。パニックを抑える事など出来なかった。

「アシモフ……!?まさか……死ん……で……?」

「……………」

ジーノが目の前の光景を認めないように言葉を発しても、GVは何も言わない。

「……嫌ッ！そんなッ……そんな……アシモフ……」

モニカは涙を流し、叫び、崩れ落ちた。

「……………」

GVは仲間達にも言わずに立ち去ろうとして、何かを思い出したかのようにジーノの隣に行く。

「急患だ、三人…頼むよ。」

そう言い、GVはまた歩き出した。

「お…おい、GVッ!?何があつたつてんだッ!?アシモフはどうして…!?なんでみんな倒れてんだッ!?それに…シアンちゃんは!?!」

GVに近づこうとしたジーノが、不可視の“何かの力”によって阻まれる。

「……………」

島を出て行くこうとしているGVは何かと話していた。だが、それを聞き取る事も出来なかった。

—————

「そつからは…お前達をここに運んで、あんまり傷も無かつたけど、手当して…今に至るつっ—訳だ…」

「……………」

ジーノが言葉を発し終わるとその場を静寂が支配した。

「それからGVさんは…?」

「まだ足取りが掴めてねえ、まあ見つけたとしてもあのGVだから掴まえられねえだろうけどな」

ジーノはほんの少し、前のように話した。

「…なあ? 何があつたんだ? あの時、あの場所で…何があつたつてんだ!」

ジーノは一行に掴みかからんばかりの勢いで訊いた。

「それは…」

三人はアメノウキハシでの事を自身の言い表せる限りの言葉で話した。

「…嘘だろ? だつて…アシモフが、そんな…」

「…済まない、私達の力が足りなかったばかりに…」

「いや…謝りたいのはこつちだ。…すまねえ。」

「……………」

「そうだ、お前達が言つてた並行世界への入り口なんだが…アメノウキハシからちよつと行つた所の空間に発見出来た。橋はポロポロだがお前達なら行けるだろ?」

「そう…ですか。」

「我々はひとまず報告の為に帰還する必要があるだろう、準備が出来次第出発するぞ。」  
「あと…隠れ家に、忘れモンとか無いか？一応車はある。今すぐにも行けるぞ？」  
「ああ…有難くお借りします。」

.....

「ぼろぼろになっちゃたけど…お世話になりました。」

一行は壁が砕け、窓も割れている家に一礼する。

「…？…なんか…ポストに入ってねえか？」

雪音が指を指した先には、あからさまに封筒が突き刺さった郵便受けがあった。

「これは…もしかして…」

「ああ、恐らくGVからのモノだろう。」

「中身は…」

封筒を開けると一枚の手紙が入っていた。

「この手紙を開けているのが何時から分らないけど、読んでいてくれるのは感謝するよ。この数週間、ボクもシアンも君達と一緒に居れて楽しかった。」

ボクはシアンと一緒に旅に出るよ、みんなは気にせず元の世界に帰ってくれ。ジーンにはボクを探す労力があるなら他に手を回せと伝えておいて。

雷霆より」

蒼き

「なっ…なんで…何でこんな…」

「随分冷てえじゃねえか…！」

「助ける事すら拒否するとは…相当滅入っているな…」

「だからって、助けない訳ないじゃないですか…！」

走り始めた立花を翼が押さえた。

「離してくださいッ！」

「今行つてどうするとうんだ、場所も予想も分からない今。」

「そうだ、ひとまず本部へ帰って応援を頼むしか無えだろ。」

「……………分かりました。」

.....

「ここが…出入口だったなんて…」

エレベーターの残骸を跳んでアメノウキハシに到着した一行は宇宙を見て、そこにある入り口を見つめる。

「さて、とつとと応援呼んで、帰ってこなくちゃあな…」

「行くぞッ！」

一行は跳び上がり、入り口へ飛び込んだ。

「…入ってきた時の嫌な感じがしない…」

「今思い返せば、あの感覚は紫電のセブンスと似てたな」

「恐らくそのエネルギーが入り口から漏れ出し、我々を巻き込んだのだろう」

その後一行は何事も無く、本部へ帰還出来た。

.....

一行は帰還後すぐ他メンバーの手厚い歓迎を受け、風鳴指令に報告を行った。



「…ふむ…そんな事が…」

「装者六名での出撃命令をください！」

「…濟まない、こちらもあり状況は良く無い…これを見てくれ」

指令は数枚の画像を端末に表示し、「棺」の説明をした。

「…許してくれ、こちらでも無視できない状況なんだ…」

指令は深々と頭を下げ、謝罪した。

「頭を上げてください…」

「オツサンが謝る事じゃねえよ」

「…ありがとう。…所で、カルマノイズは無事撃退出来たのか？」

「「……………あつ」」

—————

アメノウキハシ最奥部にて…

ボロボロの道と呼べるかすら分からない道を一人の足が渡って行く。

行き止まりの辿り着くと、そこにある一つのポッドにその人物は抱きつき、頬擦りを

した。

「あの紫電でさえも支配はおろか排除すら出来なかった障害ノイズ…その力、我々が頂きましょう。愛をもつて…」

## トールームでの会話「壺」

く 憧れく

翼が買い物から戻ると、シアンがリビングでテーブルに向かって何かしていた。

「ただいま……」

「……………」

扉の音や人の声に気付かないとなると結構集中しているようだ。

なんとなく気になり背後から覗いてみると、テーブルの上には奇妙な模様が描かれたチラシが数枚あった。

「これは……サインか？」

「うわあっ!?!」

翼が何気なく声を出した所でようやくシアンは翼の存在に気付いたのか素っ頓狂な声を上げた。

「い……いつから見えたの……?」

「ん? ついさつきだが……」

「そっ、そう……」

「サイン…懐かしいな。」

「ツバサもサインを描いてたの？」

「ああ。私は私の世界では自分で言うのもなんだが有名なアイドルなんだ、サインを描く機会もよくあった。」

「へえ…サインも沢山描いた？」

「うーん…最初こそ描いてはいたんだが…どんどん描く回数が減ってな…」

「えっ何で？」

「さあ…私にも分からん。」

「じゃあ描いてみてよ！」

シアンはそう言い、翼にチラシとペンを差し出す。

「…久しぶりだが、描いてみるか…せやーッ！」

翼は凄い勢いでペンを走らせ、サインを描き上げる。

「どうだッ！」

「えっ」

翼がバンと見せたそのチラシには俗にいうシヨドーで書かれた自身の名前と何か分からない微妙な模様が描いてあった。

「あ…いいと思うよ！」

「だろう？だが皆は微妙な顔をするんだ…」

その後GVに直球な意見を言われへこんだり、シープスの皆さまに笑われたりするの  
はまた別のお話。

く伝説のロックスターく

GVがちよつとした野暮用から戻ると、二人はヘッドホンを付け、音楽を聴いていた。  
「お帰りだ、GV。」

「…あつ、ごめんなさい。歌を聴いていたの。」

先にGVの存在に気付いた翼が挨拶をし、それに続いてシアンも挨拶をする。

「二人共熱中してたみたいだけど、何の曲を聴いていたの？」

「アオイって…分かる？」

アオイーGVらが生まれるより大分前にヒットしたロックスターの事をシアンは  
興奮が収まらない様子で話す。

「やっぱり伝説のロックスターはすごいね…聞き入っちゃった」

モルフォ  
「キミの歌も大したモノだと思うけど。」

「それはセブンスの、モルフォの歌だから…私自身が喉を傷めて歌っているワケじゃな  
い。」

「そう言うな、シアン。本格的に聴いた事は無いが…時々歌っている鼻歌…あれはとても綺麗だった。鼻歌でそれなのだから、もしかしたら私よりも上手いかもしれない。」  
翼はシアンの肩に手を置き、慰める。

「そっそうかな…」

それを聴いたシアンは顔を赤らめて照れていた。

「ツバサは何を聴いていたの？」

シアンが訊くと翼は嬉しそうに答えた。

「サイキッククラブというグループの曲でな…歌っているモノはロックなんだが、この曲には何か惹かれるモノがあつてな…」

翼が説明をしつつ端末を二人に見せる。画面には所謂ヒーローモノの画像が映っていた。

「ロックと聞いて参考程度に聴いてみたんだが…どうもこの曲が頭から離れなくてな…！」

その後翼は訊いてもいないのに感想を語り始めた。

「そ、そうなんだ…でもボク用事があるし…」

「私も…」

そう言い二人は翼をほっぽり部屋に戻ってしまった。

翼が我に戻ったのは数時間後だった。

（猛犬注意）

家へ帰ると手に包帯を巻いたシアンと執拗にマネキンにクナイを投げ続けている翼が居た。

「えっ…シアン、大丈夫かい？」

「うん、私は大丈夫。手当てもしつかりしてもらったし。」

その返事を聞きGVはほっと胸をなでおろす。

「ちよつとツバサ、訓練をするのはいいけど、シアンに怪我をさせたのは良く無いね。」

「ん何イ!？」

ちよつと怒った様子で翼に話しかけると、それ以上に鋭い目つきでGVは睨まれた。

「ちつ違うの！ツバサはちゃんと安全にやってるから！翼もそんなに睨まないで！」

シアンは二人の間に割って入り二人を止める。

「実は…私下校途中にワンちゃんに手を噛まれちゃって…」

シアンは包帯を巻いた手を見せつつ話す。

「傷の手当てはツバサがしてくれただけ、ツバサだったらそいつに文句を言ってや

るって言い始めて……」

「私はシアンの情報を基にその家へ行つたんだ……!」

シアンと正気に戻つた翼が話す。

「だがッ……あの犬畜生は……! 私の影縫いをいとも容易く抜け出し……笑いながら私を吹き飛ばしてきたんだ……!」

「あ……それが悔しくて練習を?」

「そうだ。」

「あのワンちゃん……紫色してたから多分柴犬だと思っただけ……」

「何を言っているんだ?」

「うーん……その犬は多分……」

「あの犬は赤かったぞ?」

「「えっ?」」

「それって別の犬じゃ……」

「なっ……ではあの犬は……?」

その話はちよつとした都市伝説として有名になった。



## トークルームでの会話「弐」

「あの人達なら結構ハマリそう」

GVがリビングに入るとシアン、立花、翼、雪音の四人がテレビに向かってやいのやいのしてた。GVはテレビを見てぎよっとした。テレビに映っていたのは先日ジーノに貰ったレトロゲームムービー「モテモテになった男の子が追ってくる女の子を目力で気絶させる」という頭のおかしいゲームだったからだ。

「えつと…何をしてるの？」

目の前の光景を理解できず、GVは一行に訊いた。

「ん？…見ての通りゲームをしているのだが…」

「う、うん…」

【翼がまともな顔をしてあのゲームを見ている】、その時点で大分GVはパニックになっていた。

「あっ！GVさんもやりますか？」

「やる？」

「おい手紙攻撃来てるぞ！」

立花とシアンは笑顔でコントローラーを握らせてこようとすし、雪音もゲームの方に熱中している。…女子四人をハマらせてしまうゲームにGVは恐怖すら感じていた。「いっいや、いいよ。みんな楽しんで…!」

GVは自分でも分かるくらい引きつった平静を装った顔で静かに自分の部屋に戻った。

〜日記〜

「はあ〜…ん?」

雪音が何気なくカーペットに寝っ転がるとふと違和感があった。そこの辺りを探ってみると一冊のノートがあった。

「なんだこれ?」

「どうしたの? クリスちゃん。」

ノートを拾い上げた雪音に何気なく立花が声を掛ける。

「いや、カーペットの下からノートを見つけたんだけどよ…」

「名前とかは…書いてないね。」

「そうなんだよ…」

雪音が困り顔をしていると立花がニヤニヤとしながら雪音とノートをチラチラと見ていた。

「…中身見るなんて事しないからな。」

「えー…持ち主分らないじゃーん…」

「ん…それもそうだけだよ…」

「そうそう！開けちゃえ！」

立花がガバリとノートを開けるとそこにはギツシリと文字が詰められたページがあった。

「文章の最初に日付があるし日記だね。」

「勝手に見てんじゃねえよ！」

「にしても…これGVさんの事ばかりだね。」

立花の言葉通り日記には「今日GVが…」「GVが私に…」「GVと…」などのGV以外の誰かがGVの事を書いている文章が大量にあつた。

「…お前か？」

「そんなワケないじゃん！クリスちゃんじゃないの？」

「ばつ馬鹿！こんな夢見る乙女みてえな事しねえよ！」

「だよね…。翼さんは…」

「あの人は無いだろ。…つてえ事は」

ガチャリ、と音がして扉が開く。

「ただいまー！」

そして、元気なシアンの声が聞こえる。

「お帰りー！」「お帰りだ。」

「ただいま。」

挨拶をするフリでノートを閉じる。

「あっ！」

シアンはカーペットの上にあるノートに気付いたらしく買い物袋を置いてから二人に駆け寄る。

「私のノート！探してたの！」

「そっか！私達もノートの持ち主が分からなくて困ってたからこれで一件落着！」

立花が少し日本語が変になりつつもシアンにノートを渡す。

「…読んでないよね？」

「うっうん！読んでないよ！」

「そっか！」

シアンはノートをテーブルの上に置いて、買い物袋の中身を二人と一緒に冷蔵庫に詰め始めた。

その後雪音は二人の関係を結構気にするようになった。

「買い物」

「しまったな……」

G Vが冷蔵庫を開けて呟く。冷蔵庫の中にはロクな食材が無かったからだ。

「私、買い物に行ってくるよ！」

「いや、危ないしボクが行ってくるよ。」

シアンが買い物袋を持って元氣よく言うがG Vはそれを抑える。

「でも……私、みんなに何でも任せっきりで……私も何か役に立ちたいから……」

「大丈夫、シアンのその気持ちだけで十分だよ。」

そう言うて立ち去ろうとするG Vの肩を誰かが掴む。

「そんな事言わずに！ 私達も着いていきますから！」

背後に居た立花が構えを取りながらシアンに着いて行く。

「だけど……」

「まあそういうな。たまにはアイツにもやらせてみたらどうだ？」

雪音がG Vの肩をポンポンとしてから二人に着いて行く。

「では、これにて失礼します。」

翼も一礼して一行に着いて行く。

「…行っちゃった。」

その後一行の好み全開の食材を買ってきたのはまた別のお話。

## トークルームでの会話「惨」

〜お勉強①〜

「GVさんの能力って確か…」

「雷撃の能力だよ、アームドブルーって呼んでる。」

立花の突然の問いにGVは静かに答えた。

「…GVさんの力で」

「電気代の節約とか言わないでよね。」

「うっ…そっそんな事言う筈が無いじゃないですか…ハハハ」

「そう…」

立花は一時的に引き下がったように見えたがまた質問をGVに仕掛けた。

「GVさんの力でレールガンの事って出来ないんですかね？」

「…え？」

立花の思いもよらない問いにGVの思考が一瞬停止する。

「どういう事？」

「いや、修行の為に時々アニメも見ることがなくなったんですけど…」

そう言いつつ立花は懐からコインを抜き取り親指と人差し指の間に挟む。

「GVさんみたいな雷撃使いの人がこんな感じにしてコインを打ち出してたんですよ……」

素晴らしい立花はコインを指で弾く。コインはカーペットに落ち、そのまま立花に拾われた。

「……ええ……」

「で、どうですか!? 出来そうですか!?!」

グイと期待タツプリの眼でGVに問いかける立花にGVは苦し紛れにこう言った。

「ああー……うん、アシモフに相談してみるよ。」

くお勉強②く

「GVさんが任務の時にとつてるポーズって何の意味があるんだ?」

雪音が何気なくGVに訊いた。

「ん?……ああ、チャージのポーズだね。まあ……力を回復させる時のイメージ……かな?」

「ほーん……さつきチャージつつたけどよ? 何をチャージしてるんだ?」

「EPエネルギーだね。」

「EP……? なんだそれ。」

「ELECTRIC PSYCHO エネルギー……ボクの実力の電気エネルギーの事だ」



ね。」

「ただいまー！」

そこで立花がドアを勢いよく開けて帰ってきた。

「お帰り、…なあ」

「ん？どうしたの、クリスちゃん。」

「お前って自己暗示とかって…する事あんのか？」

「ん…そーいうのはしらないかなー」

「そうか。いや、それならいい。」

「…？」

この時雪音はこんな事を思っていた。

（最近シアンが変なポーズを取りながらモルフオを呼び出してる…バカかGVに影響されて始めたんだろうが…これ以上変な癖が出来ない内にアタシが止めてやんねーと…）

「ただいま。」

「ただいまー！」

その時翼とシアンも帰ってきた。

「GV！見ててー！」

シアンは帰ってくるなりいきなりGVの前に立ち、キメツキメのポーズを取った。

それと同時にモルフオもキリツキリのポーズでシアンの背後に現れた。

「…何、してるの?」

「えへへ…ツバサに教えてもらったんだ!モルフオを呼び出すときのポーズ!」

「我ながらいい仕上がりだ…!」

「お前かああああああああ!!!」

その後数時間は雪音の説教が続いたらしい。

〜大切な勉強〜

「GVさん、今日の晩御飯たこ焼きでいいですか?」

立花がたこ焼きプレートのコードをコンセントに突き刺しつつGVに訊く。

「どうせ駄目って言ってもやるんでしょ?」

「でへへ…バレてましたか。」

「…いくら安かったからってこんなデケエタコ買うこたねえだろ。」

雪音は冷蔵庫の中身を見ながら嘆いた。

「たこ焼きかあ…どんな味なんだろう?」

シアンがワクワクしながら一行に訊く。

「そりやあもう…アツアツで、フワフワで、ウマウマなご飯だよ!」

「液状の生地と一口サイズのタコをこんな感じの形に入れて焼いた料理だ。」

立花の大雑把な説明を翼が補足した。

「へえー……早く食べてみたいなあ〜！」

シアンが目をキラキラさせながら雪音と一緒に冷蔵庫のタコを眺めた。

「……たこ焼きか……確かボール状の」

そこでGVは消えた。

「ヒビキ……何をするんだツ……」

トイレのドアに押し付けられつつもGVはなんとか言葉を紡ぐ。

「あなた……さつき何て言おうとしました？」

「……ボール状の……お好み焼き……」

「フンツッ！」

立花の押し付ける力が更に強くなった。

「あなたみたいなのアホにはタコ大盛りです、たこ焼きとお好み焼きの違いをよくその脳ミソに植え付けてください。」

そこで立花の手は離れ、その後順調にたこ焼きは作られた。ただ……

GVのたこ焼きはタコがアホみたいに入っていた。

「……ねえヒビキ」

「なんですか？」

「すごく食べづらいんだけど？」

「……………」

立花は更にタコを生地に入れた。

「見ていろシアン…：そらッ！」

翼がタコの脚を宙に投げると、あっという間に一口大のタコがプレートに収まった。

「ツバサすごい！」

「ふふん。」

「食べ物で遊ぶのも控え目になー…：よつと」

「クリス、焼くのうまい！」

「へへへー」

……………たこ焼きはシアンに大好評だった。